

---

# 妖しい紅

月猫百歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖しい紅

### 【Zコード】

N16890

### 【作者名】

月猫百歩

### 【あらすじ】

泣いた親友が呼び寄せてしまった紅い鬼と契約した紗枝。

自分以外の友人達は無事に元の世界へ帰れたと喜ぶ反面、一切の日も射さない世界に日々侵食され、怯え、憔悴していつてしまう。そんなある日、紅い鬼がなにやら隠し事をしている事に気がつく。何かを探しているような。戸惑っているような。

紅い鬼は一体何を隠しているのだろうか。

元の世界に戻った親友達と何か関係があるのだろうか。真相を究明するため紅い鬼との駆け引きが始まった。

## 序ノ怪 深紅の瞳

暗がりの奥で、氣味の悪い笑みが浮かぶ。  
その様子に思わずぞっとする。

「それで？意見を聞こう力ナ？」

独特のなまりのある口調。常に弧を描く口元。  
緊張で口の中が乾く。カラカラだ。  
飲み込む唾さえ出でこない。

「口が利けなくなつたの力ナ？」

手をヒラリ。

“紅”がおどけてみせる。

「わ……たし……は……」

やつとの思ひで出たのは、裏返つた、掠れた声。

それをニヤニヤと見つめる“紅い”影。震える手を懸すよつじ臂  
中で拳を作る。

一体、何を言えればいいのだろうか？

下手な言い訳をすれば間違いなく今以上の窮地に立たされ「」と  
になる。

息がうまくできない。

「好きに話せば良い」。ただコイツが全部落ちるまでに

そういうじつでコンと、青い砂時計をつつき、より一層、笑みを深め

「話さなければ、こちから動くマジテ」

相変わらず表情は変わらないが、確かに瞳だけは鋭く光った。

その鮮やかな、深紅の瞳が……

## 序ノ怪 深紅の瞳（後書き）

この小説に目を通して頂いた方、感謝いたします。

初小説ですが、がんばって日々精進していきたいと思います。  
分かりづらい・誤字脱語などありましたら申し訳ございませんが  
ご指導ご鞭撻いただければありがとうございます。

今後もよろしくお願ひいたします。

## 第一怪 紅い嘲笑

私がよく映画や本で目にした不思議体験は鏡や扉、トンネルをくぐり異世界の冒険に出発するもの。

はたまたタイムスリップをして過去や未来へいくものや、怪談・ゾンビ・幽霊などのホラーものなど。昔ながらの陰気なものも知っていたけれど、それは幼いころ祖母に聞いた話で、数年もたてば思い出すことの無い御伽噺だった。

すべて作り話。自分とは無縁の世界。  
そう思っていた。

しかし……

彼女は朽ちた神社で泣いていた。  
お社の階段で身体をうつ伏せにし、身体を震わせて。  
切つたばかりの髪はボサボサでグレーの制服は所々汚れていた。  
私は彼女に声をかけ、帰ろうと肩に手をかけた。

パシッと、乾いた音が辺りに響いた。  
友達が私の手を振り払ったのだ。

「分かんない……絶対に……」

“なにが……分からなの?” そう尋ねようと口を開いたとき、友達は荒々しくポケットから何かを取り出した。

それは人型をした赤い折り紙だった。わけが分からずにいる私を

よそに、友達は無造作に転がっていた鎧びた釘を握り締めると、突然激しく折り紙に打ち付けた。

「……だ」

「あつ！」

何かを叫びながら、大粒の涙を流しながら、何度も何度も、折り紙に打ち付けた。

昔、祖母が話してくれた丑の刻参りの女性のように……。

しばらく呆然とその様子を眺める私と友人たち。

ハツと我に返り、私はまた泣き叫ぶ親友の肩に手を置こうと手を伸ばす。

「ねえ……みつちゃん……」

その時、音も無くなんの前触れも無く突然闇が広がった。ボロボロになつた折り紙が音もなく踊るように宙に舞つていく。私達はまるで金縛りにでもあつたかのように誰一人身動きせず人型の折り紙を凝視していた。人型はフラリフラリと闇の中へと小さくなつていき、ポツと深紅の灯火へと姿を変えた。灯火は揺らめいて次第に大きく燃え上ると、ニヤリと笑つた。

「よつこせ」

自分とは無縁だった世界が、真っ赤な口を開けて「おいで」と手招きしている。

私たちはただどうする事も出来ず、闇を受け入れるしかなかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

落ち着いて……落ち着いて！

自分にそう言い聞かせ、深呼吸を繰り返す。あそこまで自分達の力で扉の前まで辿りついたんだ。何一つ責められる事なんて無い！相変わらずニヤニヤ笑う紅い鬼を見やり口を開く。手に汗を握りながら。

「い、意見も何も。私たちは自分で扉を開けてここから出ようとしがだけ。貴方は私との約束を破つた。助けてなんてくれなかつた！だから私たちは自分達の力での扉を開けただけ！」

身体全体が脈を打つてирよつな感覺を持ちながら私は精一杯話した。

自分達に非はないと。なんら間違つていないと。  
しかし紅い鬼はクツクツと笑い次第に大きな声で笑い始めた。

「……なにが可笑しいの？」

「」の時ばかりは恐怖を忘れ、ムツとして訊ねた。

「いやいやいや……。大変おめでたい娘かな。自分達の運と力だけであそこまでたどり着いたと思つていい。まさに……まさに滑稽力ナ！」

ひとしきり大笑いした後でニヤリ笑い、また私を深紅の目で見据えた。

「大広間の騒動も、裏口の鍵も、門番も、全てこの俺がやつたこと。お前達は俺が手を引ひいてあの扉まで連れて行つたも同然……」

「一体この鬼はなにを言つてるのだろう。  
あの大広間のバカ騒ぎも、裏口に落ちていた鍵も、酔いつぶれていた門番も。  
この鬼が？」

「な、なんでそんな遠まわしな」

「行灯もつて」案内でもするとでも思つていたのかナ？」

私の言葉をわざと小馬鹿にしたよつと言つた鬼は、おもむろに立ち上がつた。

「いやいや、それでは面白みにかけていいなあ～」

また、手をヒラリとさせた。

その瞬間、まるで電撃が走つたように私は悟つた。

ば、馬鹿にしている！

私たちが必死になつて戦々恐々としながら、あの扉を励ましあつて目指しているのをこの紅い、腹立たしい鬼は、影でニヤニヤ笑つ

て見ていたといふことだったワケ！？  
無事に扉まで行けたと喜び合つたのを見て滑稽だと笑つていたの  
！？

さつと今、自分の顔はそこそこ紅潮してゐるのだ  
らづ。

先ほどまで怖さで震えていた拳は今では怒りでふるふると震えて  
いる。

そんな私をみて鬼はなだめる様に両手を振つた。

「まあまあ、兎に角。約束は守つた」

鬼はゆっくりとこちらへ歩を進めた。

一步一歩、勿体ぶらせるかのよう。

そのゆっくりした足取りは、今さっき燃えたばかりの私の怒りを  
小さなものにさせ、かわりに恐怖の影を忍ばせた。

「ああて……」

紅の瞳を鋭く光らせ、その眼に宿つていた笑みを消す。

笑みと同時に部屋の明かりも消え、私の怒りの炎も消え一切の光  
も無い真つ暗闇。

しんと静まり返つた中、耳元で紅い声が囁いた。

「後はお前さんが守る番」



## 第一怪 紅い呪

暗闇の中、突然目の前に紅い目が現れ、顎を掴まれた。身体は金縛りにあつたかのように動かない。心臓がひどく早鐘をうつ。

「ああ……俺の田をよみく見るんダ」

逸らす事を許さないという鋭い眼。手の先がピリピリと痺れる。

その怪しく光る深紅の瞳に囚われ、次第に意識が朦朧としてくる。貧血になつたみたいに頭がクラクラし、頭の中がぼんやりとしてくる。

揺りめく意識の中でもがいていると、遠くの方から声が聞こえてきた。低い、ゆっくりとした口調で頭の中にこだまする。

「お前の名は『鈴音』<sup>すずね</sup> 今持つ名を捨て『鈴音』とし、我に魂を捧げろ。『鈴音』の呪を甘んじて受入れよ」

「鈴音……」

口から名前がこぼれる。

その途端、頭の中に甘い霧が蒸気のように立ち込む。

恍惚にも似た様な感覚の中、私はコクリと頷いた。

『なんか、これが私の名前なんだ』と。

「良い子ダ」

かすんだ意識の向こうで鬼がクツと笑つたのが見えた。  
鬼は顎を放し、手の甲で私の頬を撫でると、ねつとりとした猫な  
で声で私に問うた。

「お前の名は?」

「……鈴音」

口が勝手に動いて声が出る。  
でも違和感は無い。

「お前の主は?」

「……貴方様です」

鬼は満足そうに笑みを深め相変わらず頬を撫で続ける。  
そして暫くこちらを眺めると、口を開いた。

「お前の捨てた名は?」

「捨てた名前……」

名前。捨てた名前。呼ばれていた名前。  
混濁とした意識のなかを探る。

……見つからない。

自分が生まれて初めてもらった名前。自分の存在示す名前。

記憶と心と頭の中を必死で探す。

だめ。

見つからない。

「……名前」

鬼は楽しげに私が名前を探すさまを眺めている。

猫が鼠をいたぶっている様な残虐な眼で私の瞳を覗いている。

「分からぬの力ナ？」

もう一度記憶の中をまどろみながら探す。  
ずつとずつと奥へと。ついこの間まで呼ばれていた名前を。  
すると何かが深い霧の奥でキラリと光った。あれはなんだらう。  
あの光つているのは。  
光が溢れる深いところへ。深いところへ探す。

あれは

「そ……え……」

動いた唇に鬼が眉を寄せた。

ピタリと頬を撫でる手も止まり、ひどく怪訝な表情を浮かべて私を見つめる。

私は淀んだ頭の中にある霧を払いのけて口にした。

「紗枝……私の名前は、紗枝」

紅い鬼は顔を凍らせた。

頬を引きつらせ信じられないと言わんばかりに私の顔を凝視した。朦朧としていた意識は次第に晴れて行き、ハツと気がついた時は紛れもなく本物の『鬼の形相』といつものが目の前にあった。

「いやあつ！」

溜まらず鬼から離れ、勢いのあまり尻餅をつく。

辺りはまだ暗闇で包まれていて、鬼の両脇にある鬼火が一人だけを照らし、鬼は表情を変えずに私を見下ろしていた。

私は一体何をされたんだろう？

鬼はどうして怒っているのだろう？

訳が分からずガタガタ震えながら鬼を見つめる。

しばらく鬼は微動だにせず顔を引きつらせたままでいたが、ふと、何かを考えるかのように顎に手を当てて唸つた。

「おかしいナアー……こんな事があるとは」

田を閉じ俯いた後、一呼吸いれてもとの意地の悪い笑みを浮かべた。

「まあ、いいサ。お前さんは今この時から『鈴音』ダ。これで一応契約終了カナ」

パンと鬼が手を鳴らすと部屋にある全ての蠅燭に灯りが戻る。未だに状況を把握しきれていない状態のまま、私は呆然と明るくなつた部屋を眺めた。すると突然身体が浮き上がり、驚きの声をあ

げる。グルリと視点は床へ移り、ビビビん遠ざかる。ビビヤリ鬼の肩に担がれたらし。

「さあて。お前さんを入れる籠はもう用意出来ているんだ。今から連れて行つてやるからナ」

鬼は愉快そうに笑い、私を担いだまま歩を進める。

私はただただ鬼と契約した実感があまりない自分の鈍感さに半ば呆れつつも、もう一度と元の世界に戻れないのだと改めてかみ締めていた。

これからは日も射さぬ物の怪の世界で、いつ飽きられ食われてしまつかも分からぬ世界で怯え、戸惑つ日々を過いさせねばならないのだ。

「……ツ」

おかしいな

後悔はしていないハズなのに。

鬼に気づかれないように、にじむ視界を何度も何度も擦つた。それでも視界はなかなか晴れてはくれなかつた。

## 第三怪 白竹の鳥籠

後悔なんてしていなかつた。

少なくとも友人達は元の世界へ逃げられたのだから。

みつちゃんも……彼女もきっとそのほうがよかつたと思つ。

これ以上、辛い目に遭うことは無い。あんな辛いことが立て続けにあつたんだから。

先ほどから何度もそう自分に言い聞かせ、なだめていた。

未だに震える手。それを胸に抱えて深呼吸を繰り返した。

頭は驚くくらい落ち着いている。だけど身体は意に反して震え続けていた。

「憂いでいるのカナ？」

突然かけられた声にハツとして顔を上げる。

相変わらずニヤニヤ笑う鬼が一匹。

「……」

私はその姿を見るや否やフイッと顔を背けた。

正直あれから友達や、家族や将来の夢とか、色々考えてしまって泣きそうに何度もなつた。でもこの鬼の前で泣いたりしたら大喜びする事間違いないだろう。

人の悲しみや苦しみが大好物な鬼のことだ。私がここに閉じ込められてメソメソ泣いているのを眺めて酒の肴にでもするつもりなんだ！しかし……だからと言つて泣かないなら喰つてやれ！ というのは勘弁して欲しいところなのだけれど。

「『』機嫌斜めなの力ナ?」

竹がしなる音が背後ですると、『』の『鳥籠』に鬼が入ってきた。十畳ほどの和室には雀が隠れ鬼をしている絵が描かれている襖に淡い夢げな光を放つ灯籠、奥には三畳ほどの白い和鳥籠が置かれていた。もちろんその鳥籠の中に居るのは鬼と契約した私だ。

「私をどうする気なの? 私なんか食べても美味しいと思いません」「

震える手を隠しながら努めて丁寧に言ひ。

また先ほどの形相を見たいなんて思わなかつたし、何より怒らせて酷い目に遭うのだけは避けたかった。

しかし自分の意見はしつかりと伝えておく。

「いやいや。食べるののは今のところ遠慮しておこうかな」

私が怯えているのを悟つてか、薄ら笑いを浮かべながらズルリと赤黒い舌で口の周りを舐める。

“今のところ”

爛々としている鬼の目に思わず身体が強張る。

鬼は勢いよくその場に座ると、私にお酒の入った入れ物を押し付けた。

「酌をとりナ。今日はそれで勘弁してヤル」

腰に下げた皮袋から大皿ほどの盃を取り出した。おずおずと酒を受け取り、その漆塗りの大盃に注ぐ。

お正月の時に親戚にお酌をして回つたことがあつたけど、まさかこんな所で役に立つなんて……。

これくらいで穩便に済むのなら安いもの。早く帰ってくれる」と  
を祈りつつ黙つて従つた。

「良い籠だ口ウ? 特注品らしくてナアー」

上機嫌に注がれた酒を飲み干し、注げと言わんばかりにまた盃を  
乱暴に差し出す紅い鬼。勢いあまってコシンと酒瓶に盃が当たる。

「良い竹を使つてゐるみたいダ。感触もいい」

酒を注ぎながら、横田で骨のよつて白い格子を撫でてゐる鬼を見  
る。

赤黒い髪に鳶色の肌。屈強な身体に走る朱色の模様。口端からの  
ぞく真つ青な牙。だらしなく胸元を開けている緋色の着物。  
自分が赤鬼だと強調しているのだろうか。

赤・朱・紅ばかりだ。そして何より紅いのが……

「何を見ているの力ナ?」

ハツとして顔をすぐに逸らす。

どうにもあの紅い瞳が苦手でしかたない。目が合つと身体がすべ  
んでしまつ。

吸い込むような、射抜くような、怪しい瞳。

クツと鬼が笑むと無色透明の液体を赤い口に流し込んだ。

「上酒だナアー。實に美味いつ

空いた盃にまた酒を注ぐ。

そんなに大きな酒瓶でもないのに注いでも注いでも無くならない。  
牙の間を酒が通り過ぎ、空いた盃にまた酒を注ぎ、赤い口に酒が

吸い込まれ、また盃に酒を注ぎ。

酒が消え、酒を注ぎ

酒が消え、酒を注ぎ……

こんなにガンガン飲んでも平氣なのだろうか。酔った勢いで酒の  
つまみにされたら堪らないのだけれど……。

ハラハラしながら飲む速さを加速する鬼を見つめる。上田君が機嫌  
がいいようで、鼻歌まで歌いだした。

「あ、の……」

鬼の目が虚ろになりだしたころ、勇氣を振り絞つて声を出した。  
鬼は聞こえていないのか、宙をとろんとした目で見つめている。  
口からはだらしなく真っ赤な舌が犬のように垂れて、恍惚とした  
表情を浮かべていた。

意を決してもう一度、既に消えかけている勇氣を捻り出す。

「あの、もう、お休みに……なつたほうが」

よろしいのでは、と言う言葉は一瞬にして鬼の掌へと消えた。  
何が起きたか分からなかつた。気がつくと顔の下半分は鬼に驚き  
みにされ、その大きな手は耳まで届いている。  
鬼は顔をゆっくり、ねつとり、こちらへ向けた。

後悔した。

何も言わなければ良かつた。

「そのまま喰われるのだろうか。それとも殺されてしまうのだろうか。

何も読み取れない表情。しかし相変わらず焦点の定まらない深紅。手足は動き方を忘れたようだ。私は震えるのも忘れ、身動き一つせず涙を零した。

ズルリと生暖かい真っ赤な舌が目元を這い回る。まるで生きているみたいに。

顔を掴んだ手はズルズルと下げられ、人差し指を私の唇へと押し付け意地悪に笑った。

「お密さん のようだネ」

ちりっと向いの襖を見据えた。

## 第四怪 金と黒

「あらん。」しあらんいられたのぉ？」

ねつとつとした声が聞こえたと同時に籠の向こうにある襖がゆつくり開いた。

格子に負けないぐらい白い手が見える。それがぬるりと襖から離れると、金と黒が印象的な、煌びやかな遊女が現れた。

まあ、遊女と言つても映画や漫画で見たくらいなので田の前にいる女性が本当にそなのかは分からぬけれど。

それにもなんて気持ちの悪い声なんだろ？。一瞬にして鳥肌が立つ。

「鬼さんが籠に入っている姿なんてえ」

ふふつと笑い「なかなか見れない絵よ」と付け加えた。

応えるようにひらりと紅い手が揺れると鬼は相変わらず上機嫌で彼女に笑みを向けた。

「おお、蜘蛛の姫さんじやあないか。久しいナア～」

「鬼さんちつともいらしてくれないから、寂しかったわあ」

しなりと身体をよじらせて籠に近づく。

金色の空に黒い雲が漂つてゐる着物の絵柄。よく見ると妖怪が人を襲つたり、それを見て笑つてゐる鬼が描かれていた。

なんて悪趣味な着物なんだろ？。この女人も物の怪なのかな。

大きく後ろで二つに結われた漆黒の髪に、桃色の羽が左右に飾ら

れ、飴色をした八本のかんざしは蜘蛛の足のように広がっている。

「あらん。なんて美味しそうな人の子なのかしらん」

そのセリフに私は思わず絶句した。 その悲鳴を表すために、ぜひ「え」に濁音をつけて頂きたい。

じろじろ見てしまったことを不快に感じたのか分からないが、笑みを浮かべてはいるが、白目部分が段々と黄色くくすんだ色に変わって行き、文字通り獲物でも見るかのような眼を私にむけている。硬直した私をよそに鬼が「そつだらつ」と血襷げに話した。

「IJの籠をもらつてナア。入れる雀を探していたんだ」

ガシリと首根っこを掴まれた。……あ、熱い！

火傷するほどではないにしても、カイロをグッと押し付けられたかのようだ。私を掴んでいる手が、人の体温とは比べ物にならないほど熱い。

さつき顔を掴まれた時はなんでもなかつたのに！  
ながく触られたら低温火傷でもしてしまはんじやないのだろうか。

「ねえん。この子、私にくださらない？」

嫌な汗が背中をじつとりと濡らした。

首の熱さよりもこの女性から感じる絡めるような視線のほうが怖い。

嫌だ。食べられたくない！

反射的に心の中で叫ぶ。

鬼はむうと唸ると怪訝そうな顔で彼女を見返した。

「だつてお前さん。男しか喰わんのだろ？」「コイツを貰つてどうするんだ？」

……え、 そうなの？

その言葉を聞いて少し安堵する。この遊女に喰われる心配はなさそうだ。その点に関してはこの鬼より安全かもしけない。しかしぬの言葉に完全にその望みは絶たれた。

「ワタクシだつて、たまには柔らかい お肉を頂きたいのよ。お願い、鬼さん」

ぬめりと白い指が籠の中の鬼へと伸びた。

鬼の足の甲に白い手が這うように撫でる。鬼は特に嫌がりもせず、私の首を放し、盆を咥えてまたむうと考えをめぐらす。

ああ、やつぱり。

淡い期待がしほんでいくのを感じる。

ここでは人間は遊び道具兼、食料でしかないのだろう。例え運よく食べられなかつたとしても、殺されてしまつ可能性だつて十二分にあるのだ。

女性は艶つぽい声で格子にもたれ掛かり囁いた。

「だつてね、鬼さん。このまえ天狗さんのところで美味しい人の子が宴で出されたそうよ。最近出される人の子は良い物を食べてゐるせいか、大変美味だそうで」

「ほほう。それは良いことだ。昔は骨と皮ばかりで不味いのばかり

出回った時期があつたからナアー」

「それに人間を飼うのも、それはそれは大変みたいよ。前に狒々<sup>びひ</sup>が人の子をさらつて 飼つていたみたいなんだけれど、うるさくて我慢できずに食べてしまつたつて言つしい鬼婆さんは面白がつていじめ過ぎちゃつて、人の子が鬼になつて困つてたみたいだしい」

鬼はそれを鼻で笑うと、盃をグイッと私に差し出した。  
しかし私はそれに気づかず真つ青になり震え上がつていた。

「奴等は飼い方が下手なだけだ。第一飼いならすなんて柄じやないだロウ？ 物事を楽しむなんてこと、出来るとは思わなんだ。……  
おい、酒だ」

二人の会話を聞き、完全に思考が麻痺したようで何も耳に入らない。

……食べた？  
いじめ過ぎて鬼になつた！？  
一体どうじうこと！？

いい加減この状況に耐え切れなくなり、瞳からまた涙が零れた。  
手も身体もガクガクと震えてのどが詰まる。心臓がドクドクいつ  
ている。

いつ酷い目にあうんだろう？  
いつ弄られるんだろう？  
いつ死ぬんだろう？  
いつ喰われるんだろう？  
もういつその事、発狂したい！

本当に今更、私は今いる世界に対して強く恐怖し、絶望した。

「かわゆいのう」

くつり。薄い三日月の口が笑った。引いた紅から鬼とは違う、これもまた三日月のような牙が覗く。

音もなく遊女は立ち上がり凛と背筋を伸ばした。

「鬼さん、おねだり聞いてもらえないみたいだからワタクシ帰りますわあ」

踵を返した遊女にひらりと紅い手を振り

「おお、おお。すまないナア士の姫さん。そのうち埋め合わせをしようつかな」

鬼の言葉に「ええ」と頷き襖に手をかけて、ふと何かに気がついたように女性は肩越しに鬼に言った。

「それと。人の子と言えど、飼っているのなら身だしなみは大切。そんな低俗な服なんて剥いで、上等な召し物でも与えてくださいまし」

ズルリと粘着質のある声と共に、襖の向こうへと、彼女は消えた。鬼はそれを鮮やかな深紅の瞳で見送った。

## 第五怪 若草色の湯

「お前さん、湯浴みでもしてこい」

女の人気が帰つて一言、鬼が唐突に私に言つた。  
あまりにも急に言われたので思わず「え？」と聞き返す。

「小汚い雀なんぞ飼いたくない力ナ。案内をやるから行って来い」  
鬼が手を鳴らすと籠の外の天井からいくつかの小さな影が降つて  
きた。

驚いて飛びのき、その何かを凝視した。

あ！ これは……子鬼だ！

私の膝くらいの身長に、ギョロリとした大きな目。  
緑色の手足は骨のよに細く、お腹は太鼓みたいに丸く出つ張つ  
ている。

腰には気持程度にしかない布が巻かれていて「きいきい」と古い  
ドアが鳴る様な小さな声で鬼に挨拶し、頭をたれた。

「お前さん、魚どもに湯浴みの用意をさせや。あとそりだナア。」  
着物も用意させるように伝えた

子鬼達は頷くと籠の出入り口で整列し赤い鬼が籠から出るのを待  
つた。

鬼は籠から出るといつと伸びをして「おひるべく」と向きなおる。

「さ、早くソ」「から出て子鬼の後についてイケ

私はよろめきながら立ち上がると籠から出た。

子鬼はそれを確認すると小走りで襖の方へと走つていき「いらっしゃへ」と私に手招きをした。

脱衣所に到着して一人になつたところで、ふと、こんないつ何が起こるか分からぬ所で無防備（とは言つても服を着ていても同じのだろうけど）な格好をするのには些か抵抗があつた。どうしようかとモジモジしていると

「はよひ……お入りい……」

喉がつかえている様な低い声が背後から聞こえ、思わず叫び声をあげる。

後ろを振り返ると魚の頭をした浴衣姿の人物が目に入つた。腰を抜かして口をパクパクさせている私を見て、ゆっくりと手に持つていた力ゴを私の手前にそつと置いた。

「紅の鬼様のお、お屋敷でえ、勝手な行動をとる者はおりません……。安心してえ……入られると宜しいかとお……」

淀んだ目を私に向けてそう言つとノソノソと歩いて脱衣所から出て行つた。はあーつと思わず安堵の息を漏らす。一体今のは何だつたんだろう。

ともかく、今の魚（それとも魚人？）さんの話を聞いても安心できなかつたけれど、このままモタモタして鬼の機嫌を損ねるのも良くない。それに『小汚いのは飼わない』と言つていたから、もし入

らなければそれこそ酷い目に遭わされた挙句、喰われてしまつかも。

その考えにそつとして慌てて制服の上着を脱いだ。

もう一度と学校に行くこともないんだろうなと、しんみりしながらも黙々と脱ぎ、一寧にたたんで足元のカゴにそつと入れた。

脱衣所の奥にある龍が彫られた大きな引き戸。

これがお風呂の入り口なのかな？

やや重い引き戸を両手で開けて中を覗き込んだ。

「うわあ……す」露天風呂…」

田の前に広がる光景に思わず声を漏らしてしまった。

向こうに見える手入れをされた和庭園には優しい光を放つ灯籠に立派な松の木。岩と雪は鏡のようにスベスベしていて黒曜石のよ。

温泉の中央には本物そっくりの白虎の石造がとめどなく口から温泉を出し、瞳は猫の目をした宝石がはめられてくる。

漆黒の空を見上げると線香花火のような妖しくも美しい満月がこちらをぼんやりと見下ろしている。

風が通るたびに踊る湯気の中を進み岩風呂へと恐る恐る近寄ると若草色をした温泉が見えた。あまりにも濃い色だったので少し躊躇したが、手でお湯をすくい身体にかけて、ゆっくり身体を温泉に浸からせた。

いざ温泉に浸かれば恐怖心が和らぐものだ。

しばらくの間、何も考えずにただ大きく息を吸つて吐き出すのを繰り返した。

身体が温まってきたせいか睡魔がゆっくり頭の中に忍び足でやつてくる。

そういえば今は何時だろう？みんなどうじているのかな。うとう

としながら、元の世界の事を思う。

今頃みんな心配しているのかな。

みつちゃん達は無事に帰れたのかな。

様々な事が思い浮かぶも、次第にまぶたが重くなり、それに任せ  
て目を閉じる。思考がだんだん遅く鈍くなつてゆく。

呼吸もだんだん深いものになり、ついに睡魔は私をとらえたよ  
うだ。

意識は深いところへ深いところへと沈んでいった。

## 第六怪 漆黒の始まり

「一緒に高校に行けなくなっちゃった」

弱々しく微笑んで、夏休みの終わりに彼女は私にそう告げた。  
伏せた目が寂しさをより感じさせていた。

みつちゃんは私にとつて妹のような存在だった。口数の少ない内  
気な子だけど、笑うとともに可愛い思いやりのある子。

学校が始まり、テストが終わり、そして文化祭の時期が来た頃。  
みつちゃんのお母さんが希望した高校に行かせてくれない理由を  
知った。

バイトが出来ない事、そして高校卒業後にすぐ就職して欲しいの  
がその理由だつたみたいだ。

文化祭も無事に終了した黄昏時。

文句ばかりいう男子2人と他のクラスの女の子、そして私とみつ  
ちゃんの5人で図書館に本を返しに行つた帰り道。通りかかったコ  
ンビニでピタリとみつちゃんが足を止めた。彼女の目線の先には学  
校の先輩達の姿。その中に、彼女と仲の良い男の先輩が見えた。

みつちゃんはクラス問わず男子から何度も何度もからかわれ、す  
っかり男子嫌いになつていたけれど、その先輩には心を開いていた。

「あの先輩、落とした荷物を拾つてくれたり、傘を忘れたとき貸し  
てくれたんだ。それにね、廊下でそれ違つたら話しかけてくれたの」

ある日の下校途中で、その先輩の話を彼女は嬉しそうに話してくれた。その時の、はにかんだ笑顔はとても可愛らしくて顔中にその先輩は特別だと書いてあつたほど、嬉しそうに笑つていた。

私もその先輩とは一度だけ話をした事があった。

文化祭の準備がまだ慌しい時で帰りが遅く、たまたまその先輩と  
帰り道が一緒になった日のこと……。

「先輩は遅くまで、どうされたんですか？」

「いやさあ、美術の課題のオルゴール、先生の提出が終わつたから  
持つて帰つたんだけどよお。文化祭に出演するのすっかり忘れちま  
つてや」

「え。どうして持つて帰つたんですか？」

「自分流にアレンジしたくてさ。そうしたら……」

先輩が言いよどむので私が田で先を促すと、ガシガシと頭をかき  
ながら苦笑いして、ぶっきらぼうに言つた。

「そしたら失くしちまつたんだよ。で、さつきまで美術の先生にこ  
つてり絞られてたワケ。まったく……だつせえよなあ～」

みつちゃんと同じ屈託のないその笑顔を見て、先輩はきっと彼女  
を大事してくれてる。と、なぜだかそう思えてならなかつた。ど  
こか力サツだけれど、優しい表情がとても印象的な先輩だった。  
だけれど……。

夕闇が迫るコンビニ。店内の明かりが浮かび上がるその前で、友  
達と座り込む先輩達の会話は彼女にとって最悪なものだった。

「なあ、なんであんなダサい後輩と仲良くしてんだよ」

「うるせーな、だから言つてんだろ。罰ゲームなんだって」

「やつやつ、『イシ』の前ゲーセンで負けてあのキノ子に10回優しくする事になつてんの。この間なんか頭撫でてやつたんだよなあ」

「ほつとけよ、見てんじゃねー！ でもあと4回があ。面倒くせーな。」

みつちゃんの髪は近くに住んでいる親戚のおばさんがいつもカットしていた。

何故かいつもマッシュルームカットで背が低い上に目と口が小さい彼女がその髪型になると、より真っ黒な髪が全体的に大きく見えてしまってもアンバランスになつたのだ。

いつからか、誰かが『光子じゃなくてキノコだ！』と笑いとぼしたのをきっかけに、彼女のあだ名は悪意ある「キノ子」になつたのだ。

コンビニで笑い転げる先輩達。それを呆然と見つめるみつちゃん。私がなんと声をかけて良いか分からぬでいると、彼女はボロボロと涙を流しそのまま駆け出した。

「待つて、みつちゃん！」

慌てて私は後を追つた。  
彼女を捕まえようと手を伸ばす。

「待つてよー！」

伸ばした手は空を掴んでばかりで彼女に届かない。

おかしい……足は彼女より速いはずなのに何故か追いつけない。

それでも必死で追いかけると、見えた先には鬱蒼とした山道の入り口。その山道は神社の裏へと続く階段。あの紅い鬼が笑った場所に続く階段。

「ねえ、ダメ！ そっちに行っちゃダメ！」

一体どうしてなんだろう？

追いかけても追いかけても、何故か追いつかない。

彼 女はどんどん遠ざかる。小さくなつて見えなくなる。

お願ひだから行かないで！ そっちに行つたらダメ！  
ねえ、お願ひ！ 戻つてええ！！

泣きながら叫ぶけれど、口からは掠れた声すら出でこなかつた。  
辺りは真つ暗闇。何も見えない。何もない。

「みつちゃん……」

息を切らしながら走るのをやめて辺りを見回す。

やはり何も無い。誰もいない。

「そんな……みつちゃん！ みつちゃん！」

暗闇に自分の声がこだまする。

その叫んだ声に応えるかのように、どこからか笑い声がきこえる。

人をあざけつたような、嫌な笑い声。

どこから聞こえるんだろうと辺りを見回す。注意深く見回したとき、視界の端に何か捉えた。ゆらゆらと陽炎のように揺らめく背中。

「みっちゃん？」

呼びかけるが返事は無い。駆け寄つて「ねえ」と呼びかける。声にびくりと人影が反応しゆつくり振り返つた。振り返つたその顔は鬼の顔をした親友だった。

突如顔に水が掛けた感覚を覚え、慌てて手足をジタバタさせる。どうやら温泉につかつたまま寝入ってしまったようだ。むせびながら顔にかかつたお湯を手で拭つ。

それにしても嫌な夢だったな。みんな無事に帰れたのに、なんだか不吉…。

途中までは記憶どおりの夢だった。けれど彼女を追いかけて行くあたりからは違つた内容だつた。

追いつかなかつたのは不思議な力が働いたわけではなく、ただ運悪く信号が赤になつてしまい彼女との距離が開いてしまつたのだ。しかも最後のみつちゃんのあの顔……。

生暖かい風が頬を撫でる。お湯に入っているにもかかわらず、背中に悪寒が走つた。

そろそろ出よう。なんだか気分が優れない。

ここに残ると決めてから、おそらく一日も経つていらないハズのに、もうすでに心が病み始めている。

お湯から上がる前に髪と身体を洗おうと辺りを見回したが、石鹼の類は一つも見当たらない。シャワーすらない。

気休めだけれど温泉のお湯をすくつて頭からかぶり、髪をすすぐだ。何もしないよりは良いよね。

これからどうなるんだろう。

意味もなくお湯をすくつて指の間から零れさせる。言こうのない不安。ふうとため息をつく。

このままここにいても仕方がない。答えのない漠然とした思いで立ち上がり、脱衣所へと足を向けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

編みかごの中には制服の変わりに三枚の手ぬぐいが置かれていた。枚数に意味があるのかわからなかつたが、湯冷めをする前にそれで身体を拭くことにする。

それにしても着替えはどうすればいいのかな。何か着る物は……。

「お待たせえ致しましたあー」

のんびりした口調とは逆に勢いよく脱衣所の扉が开く。裏返つた叫び声を上げて飛び上がるが、格好が格好なのですぐにうずくまる。なんでこの、さ、魚さん？はいつも突然声をかけるんだろう。ついでに扉の开け方が何故激しかったのかも疑問だ。

「ひづりをどつうぞ」

相変わらずくぐもつた声で、丁寧にたたまれた何かを突き出す。差し出された物を手に取り広げて見ると、薄い生地の浴衣だつた。これだけ？とも思つたが、裸のままで居るわけにもいかないのでわざわざ羽織る。真っ白でなんの模様も無い。

「あの、帯や下着は……」

おずおずと聞くと、魚さんと私の間に一つの間にか脱衣所に入ってきた子鬼達が私の裾を引っ張り、付いて来る様に促してきた。

私は魚さんにぺこりと頭を下げ、小鬼たちに囲まれながら脱衣所を後にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鷺が描かれた屏風と龍が描かれた屏風の間に立つ。

最初に着ていた浴衣は身体についたお湯を吸つてぐつしょりになり、子鬼に脱ぐよう言われてすでに手渡していた。

子鬼はきいきいと言いながら、私に白いシャツのような短い和服を着せ、紅色の袴をはかせ、最後に山吹色の刺繡が見事な緋色の着物を羽織らせる。

あ、この格好ってどこかで見たことがある。

自分の着ている着物を角度を変えたりして眺める。これは百人一首のカルタに描かれていた女性と同じ着物だ。

平安時代だったかなと、當てにならない知識で思い当たるイメージを上げてみる。袖を広げたりして着物を観察していると、子鬼が座れと合図をしてきた。

おとなしくその場に座ると子鬼が後ろに回り、櫛で背中まである髪をとき始めた。するりするりと何度もとくとく、香料を髪に滲ませた。髪から微かに梅の香りがする。

子鬼が手招きをして襖を開けた。手には行灯を持っている。

これからまたあの紅い鬼のところへ行くんだろう。そう思つだけで気持ちが暗くなる。

正直もう会いたくない。だけれども契約をしてしまつたんだ。私が残らなければみんな鬼の腹の中。我慢しないと。

子鬼たちが中々立ち上がらない私をつつき、早くするよつせつつく。

いい加減行かないと。ぐつと自分に言い聞かせ、深く息を吐いて立ち上がる。

裾を踏まないよう足元に気をつけながら、私は襖の向こうへと足を進めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おお。よく似合つてる力ナ」

紅い手がヒラリと踊る。向こうの一つ上の段にいる紅い鬼は身体を横たえ、上機嫌そうに笑っていた。

振った手にはまた酒瓶が握られていてタップンと中の酒が波打つ音が聞こえる。

私はと言つと、紅い鬼の言葉に喜ぶはずも無く、口を真一文字に結び襖の前に突つ立てた。

「何をしているのかナ？　こっちに来ナ」

鬼は酔つているのだろうか。ニヤニヤとこつりもへラへラしているようだ。

私はそんな鬼を見て硬直していた。疲れが出始めた身体と心は一時の休息を得て完全に降伏状態になつた。

どちらも、もう一度休ませてくれと悲鳴を上げている。足もガクガクしていた。お風呂に入る前まではお酌までしていたのに、今は足が疲れと恐怖ですくんでいる。ギュッと歯を食いしばつていないと歯まで鳴り出しそうだ。

でも行かなくちゃ。鬼の機嫌を損ねる前に行かなくちゃ……！

焦つて心臓も強く脈を打ちはじめた。しかしどうしても身体が動

かなかつた。

鬼はしばらく黙つてそれを見ていたが、大きく酒を一口飲むと、ゆっくりと身体を起こしあぐらをかいだ。頬杖をしてちらりと深紅の瞳をこちらへ向ける。先ほどまで笑んでいた顔は今や無表情だ。

「どうした？　来いと言つているんだガ」

「……」

「聞こえないのカナ？」

「……」

私は完全に俯いてしまつた。もうこの場から逃げたい。休みたい。鬼のいない場所に行きたい。

そんな考えばかりが次々と浮かぶ。みんなと一緒に座敷牢から逃げ出してから今に至るまで、一度もきちんとした食事も睡眠も安息もなかつたのだ。

もう嫌、もう限界！　私は心の中で叫んだ。

「鈴音え……」

鬼がつぶやくような小さい声で名前を口にする。しかしその声には威圧するものがあつた。ドクッと心臓が強く鳴る。

顔がゆっくりと上がり、視界に映る景色が顔の動きに合わせてゆっくりと変わる。

鬼と目が合つ。何度も見た妖しい紅の瞳。

「来いつ、鈴音え！」

低く轟く声が部屋の四方に響く。すると身体は痙攣したかのよつにビクッと震え、足が勝手に動き出した。

最初の一歩は弓を引くよう。しかし一歩田からはしつかり畳を離れ着地する。

「やつ、……嫌つ！ 止まつて！」

慌てる私をよそに足はどんどん鬼へと歩いていく。顔だけは自由がきくようで、無意識に顔を左右に必死で振るがそんな私を無視して足は止まる気配を一向に見せない。

鬼は無表情のまま視線を逸らさずにじつといちらを見つめ続けている。

だんだん近くなる紅い鬼の姿。額からは鋭い象牙色のツノが一本生え、その下にはあの妖しい瞳。

こちらを一瞬たりとも逸らさない眼。

怖い。もう嫌だ。家に帰りたい。ボロボロと涙が零れた。緋色の生地に涙が吸い込まれる。

かすむ視界に映る紅い影。もつこれ以上近寄りたくない！

「やめ……て……やめてええ！」

叫んだ瞬間、突然足の束縛が解けた。私は突然の事にバランスを失い、斜め後ろに倒れこんだ。畳みに激しく身体をぶつけ呻き声を上げる。

鬼はほんの少しの間微動だにしなかったが、またむうと唸り顎に手を当てる。そして視線を目の前の緋色へと戻し、腰を上げた。

私は恐る恐る目を開いた。映るのは未だにぼやける視界。映つているのは畠の緑色だけ。身体に力を入れ、立ち上がるつとするが

「……痛つ」

腕をついた途端、痛みが走った。倒れた時、とつさに身体を庇つた腕の手首が捻挫したようだ。

痛みに顔をしかめたとき、自分に影が掛かかつた。ハツとして顔を上げると田の前には紅い鬼が腕組をして立つていた。

「あ……あ……」

後ずさりとしだがすぐに手首の痛みにまた顔をしかめて抱え込む。

鬼は無言でしゃがみ込むと、痛む手首を掴み上げ口を大きく開けた。悲鳴を上げる間もなく手首は鬼の口ですっぽり覆われた。

その時に口から見えた牙を見て怖くなり、反射的に強く瞼を閉じる。

鬼は牙を立てることもなく手首をもじもじと含むと、口から放しベロンと舐めた。

「どうだ？ マダ痛いか？」

「え……」

鬼から放された手首を曲げてみる。痛みは感じられない。先ほどの痛みが嘘のようだ。信じられない。

しばらく驚いていたが、すぐに私は手首が治つたことと、鬼が治してくれたという事実に戸惑つた。

「飼つている人の子の怪我くらい簡単力ナ。今度から俺の言つ」とは最初から聞け」

すつと立ち上がり、私の腰に腕を回すとひょいと肩に担ぎ上げた。

視界がグルリと回る。

「今日はもういい。一眠りして、これからは事をもう一度よく考えろ」

あきれた口調で私に諭すように言い、襖を足で器用に開ける。

鬼が薄暗い廊下を歩き出すと先ほどの部屋から漏れる光が遠ざかっていく。それにつられて限界だった私の意識も次第に遠ざかっていく。

意識の端で鬼が何かを喋っているのが聞こえる。でも何を言っているのか確かめる前に私は意識を手放してしまった。

じつしてとても一日とは思えない長い時間に、私はようやく終わりを迎える事が出来たのだった。

次に目を覚ました時、私に一体何が待ち受けんんだろう。せめて眠りについている間は、穏やかな気持ちでいたいと切に願った。

## 第八怪 溜息茶雀

浅い眠りの中。しんとした時間帯。

古い扉が鳴るようなきいきこという子鬼の鳴き声に混じつて聞こえる話し声。

『紅い…… わか…… しそびれ……』

『儀式は…… 失敗……』

『逃がし…… と…… 言ひつ事か?』

一体誰が話しているんだろう。何の話をしているんだろう。  
そう思いながらもまた眠りの渦に巻き込まれ、意識は沈んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

意識が浮上して、目を開ける。見慣れない天井と、そこを横切るいくつもの白い線。

一瞬どこだらうかと思考をめぐらす。

…… そうだ。

鬼と約束して、それで、私はこの世界に残つて……

恐る恐る身体を起こす。どうやらいつの間にか失神して寝かされていたようで、着ていた着物も今は薄い生地の浴衣に変わっている。今まで自分が寝ていた小さめの敷布団には梅の模様。掛け布団には不気味なくらい白一色が広がっていた。

視線を布団から部屋全体に向ける。田の前には自分を囲む白い格子。握つて強く揺するがビクともしない。

ふと遠くのほうで誰かの笑い声や悲鳴が聞こえた。  
心なしか低い唸り声や何かを引きするような音、三味線等の和楽器を鳴らして、お経のような唄を歌う声まで耳に入つてくる。  
やだ、気味が悪い。

両腕で震える身体を抱きかかえる。

当たり前だけれど夢じやないんだ。

おばあちゃんが昔話してくれた、物の怪の世界に今いるんだ。

失神する前の記憶が呼びおこされる。

友達に神社に鬼に妖怪にお風呂にお酙……。

色々なことが目まぐるしく起こりすぎて現実味が無い。かえつてそれがより恐怖を煽る。

「怖い……」

誰に言つわけでもなく呟いて唇を噛む。

すると突然天井から駆け抜けるかのような足音が聞こえて、思わず裏返つた変な悲鳴をあげると、心臓と一緒にになって飛び上がった。乱暴に内側から叩く心臓。激しく上下する胸をおさえて息を潜める。

天井の一部がゴトリと開いた。籠のすみに背中をおしつけて一心に天井を穴が開くほど見つめ続ける。

なんだろう。何が起きるんだろう。

瞬きもせず、目を向け続ける。やがて四角い闇の中から一つの小さな光が何度も瞬いたのを田にしてゴクリとつばを飲み込む。

風呂敷を抱えた子鬼が一匹、宙返りをしながら狭い闇から降りて

きた。きこきいと鳴きながら私を警戒するよつに一警し、風呂敷を畳の上に降ろす。

警戒したいのはむしろ私のほうだよ。と、心の中でぼやくが、恐ろしい妖怪ではないことに幾らか緊張をといた。

「お田覚めになりましたかあ」

籠の近くの襖が開いたのを田の端でとらえ、さつと素早く田をやつた先には、脱衣所にいた魚の人、がそこに立っていた。相変わらずのそのそ歩いて籠の手前まで来くると、やつて天井から降りたばかりの子鬼から風呂敷を受け取り、濃い紫の風呂敷を丁寧に広げていく。中には真四角の桐箱が置かれていた。

あの箱はなんだろ？

興味がでてきて格子のそばによる私。

まじまじと見つめる私の目の前で箱の蓋が開かれ、魚さんが箱の中に水搔きのついた手を入れて何かを引き上げた。箱の中から白い袴と褐色に黒斑点の着物が次々と出てくる。

一体どんな仕組みなんだろ？ 興味津々にその様子を眺める。

「あのま……お名前はあ？」

「え……」

突然声をかけられ、思わず声を漏らす。

箱から田の前の暗い青に視線を移すと、相変わらず淀んだ目が見つめ返してくる。少しばかり居心地悪く感じて身じろぐが、黙つているわけにもいかないので「紗枝です」と名乗る。

その途端、魚も子鬼も目をカツと見開き、ぶるぶる震えだした。

「な、なんと……恐ろしい」

「恐ろしい？」

子鬼がきょろきょろと辺りを落ち着かない様子で見渡しながら、  
私に何か文句を言つてくる。そつはいつても私の耳には「きこきこ」  
としか聞こえないので首を傾げるしかない。

私の名前がなんで恐ろしいんだろう。  
きょとんとしている私に、魚さんが籠に近寄つて手をバタつかせ  
ながら口を開け閉めして言つた。

「そのような名前……おお、鬼様が？」

「え？ いえ……違います」

ワケが分からず、眉をひそめる。

魚さんが突然格子を勢いよく掴んできた。あれだけビクともしな  
かつた格子がしなる。驚いて思わず後ろへ飛びのく私は魚さんは声  
を押し殺していった。

「宜しいですか……ワタクシはあ……その名を聞かなかつたことに  
しますっ！ 良いですか！？」

「え？ ……ええ、分かりました」

田をぱちくじとさせながら、魚さんの剣幕におされて、ワケが分  
からないながらも何度も頷いた。

その様子に魚さんはほつと安堵の息を漏らし、脱力したよつこず  
るずる格子に寄りかかった。

「一体何だつて言つのだろ？？」

「俺は聞いたがナアー」

言つが早かつたか子鬼が『ギイー』という金切り声を上げた。魚さんも私もそれぞれ短く悲鳴を上げて飛び上がった。

一番むこうの襖には紅い影。手にはさつきまで籠の近くにいた緑の子鬼の頭を驚掴みにしている。

いつの間に……。

驚いている私を妖しい紅が睨み、チラリと魚さんへと視線を滑らすと

「さあて……なにが聞こえた力ナア。おい、そこの魚。言つてみろ」

気がつくと、いつの間にか籠のそばで、土下座して震える魚さんが目に映つた。震えが格子を伝わって、私の格子に触れている肌に波紋のように響いた。

魚さん達は、ただ単に紅い鬼が怖くて震えているわけじゃない。私が何かいけないことを口にしてしまつて、鬼の機嫌が悪くなつたから一人とも怖がつているんだ。でも一体なんで？

「口がきけないわけじゃあ、ないだろウ？」

「な、なにも聞いて……お、おおりません」

たたみかける鬼に震える魚の人。震えるたびに鱗が水面のようにキラキラと光る。魚さんの声には震えと怯えが混ざつていて、哀れな雰囲気をより漂わせていた。

紅い鬼は歩を進め籠の手前までやつてくる。緑の子鬼は観念したように手足をダラリと垂らして震えていた。見ていて痛々しい。キロツと妖しい紅が私を捉える。その瞬間背筋に悪寒が走つた。

「なあ、お前サン。お前はこいつ等に名乗つたの力？ 一体なんて名乗つたんだ？教えてくれないカナア」  
「こいつと口の端がつりあがる。そこから鋭い牙が覗く。

「あ、その……」

声を詰まりせ、目を泳がせる。なんて言えば良い？ 名乗つてないと嘘をつく？ダメだ。鬼は聞いていたみたいだから嘘はつけない。だから怒っているんだろうし。

そういうえば子鬼達は私の名前を聞いてひどく青ざめていたみたいだけれど、いけなかつたのかな。でも他に名前なんて……。

「名を忘れたのカナ？」

意地悪そうに笑う鬼。じんわりと額に汗が浮き出る。

口は笑っているけれど目が笑っていないとは、まさに今の鬼の様子そのものだ。状況は良くない。早くなんとかしないと。

焦つてもつれた紐のようになつてている頭の中を必死で解くと、ふとある記憶がよぎる。

そういうえば昨日、鬼に名前を付けられていた気がするけれど、もしかしてその名前？ なんて名前だつけ。

確か、鈴なんとか。えつと……鈴音？ そうだ、鈴音だ！

「あの、鈴音です」

上ずつた声だけれど、きちんと鬼の耳に入るよつて少しばかり大きな声で答える。これで違つた名前だつたらどうしよう。それこそ逃げるしかない。ああ、だけれども今は籠の中で逃げるに逃げられないし。

一人で焦つている私をよそに鬼は面白くないと言わんばかりに鼻

を鳴らして、今まで掘んでいた子鬼を放した。

子鬼は何かを叫びながら壁を伝い、四角い闇の中へ飛び込んで天井裏へと一田散に消えていった。

「おい、魚。お前も下がれ」

「は、ははあ～」

時代劇で偉い人に頭を下げるお侍さんみたいな返事をする魚さん。鱗をキラキラと輝かせながらそそくさと直ぐ近くの襖から部屋を出て行つた。鱗が光っていたのは汗が出ていたからなんだろうか。残つたのは私と籠越しに睨んでくる紅い鬼。鬼は腕組をして仁王立ちし、無表情でいる。

……この鬼は何でこんなに不機嫌なんだろう。まったく見当がつかない。

つくとしたら名前なのだらうけれども、それすら怒る理由がよく分からぬ。

気まずいのと怖いのが絵の具のように混ざつてひたすら俯く。

「危なかつたナア鈴音」

「え？」

「もしお前サンがもう一度違つた名を言つもんなら、舌を切り落として塩漬けにでもしようかと思つたんだがナアー」

「舌を！？」

慌てて両手で口を押さえて、舌を口の奥へ引っめる。

舌を切り落とされたりしたら死んじやう！

鬼はニヤリ笑うとその場にいささか乱暴に座り、頬杖をする。たくましい胸元からみえる鎖骨が何故か妖艶に見えた。こんなに厳つい鬼なのに、そう見えるのは物の怪だからなんだろうか。

「良いか、鈴音。他の名前を一度と口にするなよ。人間の世界にいた時の話も一切無しダ」

ドスの利いた低い声でぴしゃりと私に言い放つ。  
私は必死に頷く。ほかに出来ることも無いのでとにかく素直に頷いておく。

「よし。わかれば良い」

胸を反らし満足げに笑う鬼。とりあえず機嫌はよくなつたようだ。

「そうれじゃあ、鈴音。お前さんはこれからは俺の言つことによく聞いて、そうだな、しばらくな酌でもとつておけ。俺が呼んだらすぐに、ダ」

「は、はい」

嫌だと言えるわけがない。

取つて喰われるより、塩漬けにされるよりずっとマシだ。

鬼はこの後も延々とあれをしろこれをしろと言い続け、一向にその紅い口がとまる気配はない。

怖さがある程度薄らいだ頃、鬼の話がいつになつたら終わるかと、そればかり考えてしまう。とにかく鬼の話が学校の校長先生並みに長いのだ。いや、それ以上かも。

最初は眞面目に返事をしていた私だったが、いい加減疲れてきた。

集中力を切らさないよう奮闘する私とは裏腹に、鬼が自分の昔の武勇伝まで話し始めた。

その様子に私は気づかれないよう、こっそり小さくため息をついたのだった。

## 第九怪 赤く染まる

日の光とは違う明かりに顔を照らされ、目を開ける。

籠の向こうにある灯籠が、眠る前に小さくした灯を元の明るさ戻したようだ。

眠い目をこすって上体を起こす。今ので何回目の起床だったかな。一つ一つと指折り数えてだいたい十一回目。

この部屋には窓も時計も無い。

なので今が朝か夜かの区別がつかないし、一日経過したのかも分からない。

でも鬼の話を聞く限りではこの世界は常に夜のようなので、昼か夜かを知るに限っては例え窓があつたとしても意味は無いのかもしれない。

やや小さめの布団一式を籠の隅に片付け、薄い生地の浴衣からもう何度か着たことのある緋色の着物に着替える。未だにもたつくけれど、最初の頃に比べればマシになつたものだ。鏡がないので、視点を変えて自分の目で確認する。一応、きちんと着れているみたい。

ただ下着類を何も身につけていない為、心なしかスースーする。この感覚はやっぱりまだ慣れないなあと一人呟き、手ぐしで髪をといていると子鬼が部屋に入ってきた。

その小さな両手で抱えている桶には、濡れた手拭いとクシが入つていて、子鬼がそれらを取り出すと、格子の間から私に手渡した。

私は受け取つた冷たい手拭いで顔を拭き、クシで髪をとかす。それを格子の向こうから眺めてじつと待つ緑の子鬼。その小さな身体なら無理をすれば入つて来ることも出来るのだろうけれど、どうやら紅い鬼から籠の中に入ると言われているみたいだ。

「ありがとう」

お礼を言つて手拭いとクシを返す。子鬼はそれを受け取ると小走りで部屋から出て行つた。

私はそれを見送り紅い鬼を待つ。

今日はきちんと来てくれるだらうか。本当なら顔を合わせなくてすむのなら大喜びするところなんだけれど、そうもいかない事情が出来たのだ。

廊下のほうから床がきしむ音がする。

それが次第に大きくなると襖が開かれ紅い大きな手が見えた。

「起きている力ナ？」

苦手な鬼の瞳とは、やはり目を合わせることが出来ない。とりあえず軽く頭を下げておく。

部屋に入った鬼の手には懸盤かけばん。その上には質素だけれどちゃんとした和食が並んでいる。

私が鬼に会わないと困る理由はこれ。私の全ての食事はこの鬼が握っているのだ。起きている間に一回。起床してから直ぐと、お酌をした後だ。

鬼は何度か私の食事を忘れた。

一昨日もお酌の後に食事を与えられないまま籠の中に戻され、昨日の就寝前になつても紅い鬼は私の前に現れなかつた。

その間私は食事を与えられず、ずっと空腹と不安に襲われていた。動いていないとはいっても、起きている間は多少の緊張状態が続く。その上一食足りないので、なおの事お腹の減りが早かつた。

「いやいや。すまなかつた力ナ。すっかり忘れていてナア」

鬼が懸盤を下ろし籠の鍵を開ける。

久しぶりの食事。やつどご飯にありつける。

すっかり餌付けされている自分に嫌悪感を感じるが、食べなければ食え死にしてしまう。

死ぬのは嫌。鬼は怖いし嫌いだけれど、やっぱり酷い目に遭うのも嫌だった。

ふらつきながら籠から出ると、置かれたた食事の前に座り手を合わせる。懸盤の上には白い飯に具のないお味噌汁、焼き魚と漬物が並んでいた。

私が食べ始めると同時に子鬼が天井から降りてきて、手には薄い紫色の巻物を握つており、一度宙返りをすると畳の上に着地した。紅い鬼は私に『構わず食べろ』と合図し、子鬼から巻物を受け取るとするりと広げ、しばらく黙つて眺めた。

私が食事を半分ほど食べ終えた頃、鬼が視線を巻物から外さずに口を開いた。

「ん……他には? なにか言つことはナイカ?」

その言葉に子鬼は申し訳なさそうに首を左右に振る。紅い鬼は不機嫌に鼻を鳴らすと子鬼に巻物を投げた。

器用に子鬼がそれを空中で受け取ると、壁を這つて天井裏へと戻つていった。

何かあつたんだろうか。ここのことろ、頻繁に何かを調べているみたいで子鬼が来るたびに『何かないか』と訊いている。前に見た夢も気になっていたせいで、根拠もないのに『友人達になにか関係があるので』と勘ぐつてしまつ。

しかしそうに頭を左右に振つてその考えを否定した。

縁起でもない事を思い浮かべるのはよそう。無事に逃げたんだか

ら。だから私はここにいるんだから。

そう自分に言い聞かせて黙々とご飯を食べる。

「なあ、鈴音」

突然の呼びかけに思わずむせる。口を押さえながら咳き込み、胸を押さえながら汁を飲む。

鬼は気にせず言葉を続けた。

「まだ元の所へ帰りたいと思つてこるのかナ?」

まだ軽く咳き込みながら、どう答えていいのか分からず田を泳がせた。

正直に『帰りたい』なんて言つて良いのだろうか。なにか引っ掛けるつもりなんだろうか。

答えに悩んで私が黙つていると、鬼は興味が失せた様でごろりと懸盤の向こうに寝そべつた。

この状況にまたもやどうして良いのか分からずしばらくなつたが、鬼が何も言わないので静かに食事を再開する。

「ひとうそりまでした」

両手を合わせて軽く頭を下げる。目の前の横たわっている鬼を盗み見るが先ほどから微動だにしない。

寝ているんだろうか。顔が懸盤に隠れてよく分からない。

確かめようかとも思つたがそんな勇気はなく、正座して鬼が動くのを待つた。

「鈴音」

どれくらい経つんだろう。

鬼は相変わらず横たわったままの状態で、突然口を開いた。名前を呼ばれてビクッと肩を震わす。

鼓動が激しくなるのを感じて胸の辺りを手で強く握った。ゆっくりとした動きで上体を起こすと、鬼は私をまっすぐ見据えた。私は反射的に目を逸らし俯く。

「お前は俺の眼が恐ろしい様だなあ」

終えた食事を間に挟んで、向かい合つ。

鬼は腕を伸ばすと手の甲で私の頬を撫でた。

「それで良い。お前は俺を畏れ、怯えていれば良い」

目を閉じてなされるがままにする。

鬼はそれを満足したように笑むと立ち上あがつた。

「さあ鈴音、籠の中にお戻り」

籠の入り口を開けて手招きする。

今出たばかりなのに。心の中で不満を口にするが鬼に背中を押されて大人しく従う。

籠に入ると背後で鍵のしまる音が聞こえ、振り返ると格子の向こうに紅い鬼がこちらを向いて手を振つた。

「俺はちょっと出かけてくる。お前はそこでいい子にしてるんだ。帰つたら構つてやるからナ」

鬼が部屋から出て行くのを絶望にも似たような感覚で見送る。

私は一体いつまでこんな空虚な日々を続けることになるんだろ？  
鬼の気まぐれで食事を『えられ、籠から出され、お酌をひたすら  
する。それ以外何もない。

外にも出られないし、窓もない。自由に飲める水さえない。ひた  
すらせまい籠の中ですと過ごす。

ため息を吐きながら畳まれた布団の上に腰掛け、ひざを抱えた。  
遠くから喧騒が聞こえてくる。子鬼たちが忙しく働いている音な  
んだろうか。

自分だけなんだか別の次元にいるみたいで無性に心細くなつてま  
た溜息をつく。灯籠の色が柔らかな桃色から黄色い光へと変わつた。  
部屋も照らしている光が変わつたせいか、雰囲気を少し変えた気が  
する。

「……え！？」

ぎょっとして田を見張った。

自分の左手の色がすこしへかり違つて見えたのだ。見間違いでは  
ないかと田を凝らしてよく見る。

右手と比べると、左手は灰色がかつた桜色になつている。  
どうして？なんで肌の色が……。

そう思つてを思い切り左の袖をまくり上げる。

うそ。肩までもが変色している。

突然の異変に、急に怖くなつて立ち上がつたが、すぐによろめい  
て転ぶ。痛みに顔をしかめると、次の瞬間また恐ろしい事実に気が  
ついた。

「まさか……足が……弱つてゐる？」

籠に入れられ、お酌をして。今考えればずっと座りっぱなし。  
足が弱つても無理もない話しだつた。

私は途端に焦つた。

このままこんな生活をしていたらいずれ満足に歩けなくなる。  
そしたらどうなる？ 動けなくなつた私をあの鬼はどう扱う？  
考えるだけでも冷や汗が出た。早く何とかしないと……。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやあ～今日も上酒力ナ」

嬉しそうに笑う紅い鬼。隣にいるのは正反対な面持ちの私。  
あれから色々策を考えたものの、何一ついい案は浮かばなかつた。

「どうした鈴音。暗い顔をして」

「いえ、なんでもないです」

差し出された盃にお酒を注ぐ。  
お酌なんかしている場合じゃないのに。焦りと苛立ちで顔が歪む  
が鬼に悟られないよう顔を伏せる。

「そうかそうか。それならいいガ」

上機嫌に酒を飲み干す紅い鬼。

今日は随分、機嫌がいいようだ。その様子に少しほつとする。  
何度目かのお酌の時、鬼がいささか不機嫌だつた事がある。  
無表情でお酒のすすみも悪く、こちらをじいっと探るように見て一  
言も話さなかつた。結局何も無かつたのだが、あの時は本当に生き  
た心地がしなかつた。

ふと、ある考えが浮かぶ。

考えといつても大変危ない考え方のだが、賭けてみる価値はありそうだと思つ。

鬼は今この上ないくらい機嫌がいい。そのうえ酔つてゐる。今ここで上手く交渉して『外で少し歩きたい』とお願いし、許可が下りれば足腰が弱るのを防げるのではないのだろうか。

一応、この鬼は酔つても記憶がとぶことはないみたいだから、後日『記憶に無い』という心配もない。

……約束を守るかどうかは別だけれど。

でも、何もしないでこのまま歩行不能な状態になるまで待つなんて絶対嫌だ。多少の危険を冒しても動かないと！

横目で紅い鬼を盗み見ると、『くりと生睡を飲み込む。酒瓶を掴む手に力が入る。急に緊張してきて心臓が激しく鼓動してきた。

なんだか息苦しい。

「どうした？顔が赤いみたいダガ

鬼がへらりと笑いながら盃を差し出す。

目は焦点が定まっておらず、危険な輝きは見えない。よし、言つのなら今だ！

「あの、お願いが……あるんですが

「ほう、珍しい力ナ。言つてみナ」

うん、鬼の反応は良い様だ。もう一度唾を飲み込む。

緊張で顔が火照り、手と顎がガクガクするが、一度息を吸い込ん

でぐつと震えを抑える。

「あの、や、とこ」

お酒を注ぎながらさりげなく言いつもりだったのだが、うわすつて上手く言葉が出ない。お酒の入れ物と盃が小刻みにぶつかって何度も小さな音を立てる。

乱れそうな呼吸を悟られないよう、一度息を吐く。  
そして『言うんだ!』と自分を叱咤して鬼に顔を向けた。

「あの　つ」

言いかけて止まる。

顔を上げた先には、いつの間にかすぐ目の前に紅い鬼の顔があつた。

口元は笑っているが爛々と輝く妖しい紅は笑っていない。

「あ、の……」

鬼と目が合つた状態で固まる私。

紅い鬼のほうは特に何も言わずにじっと見返し、溢れそうになる盃で酒瓶をゆっくり起こす。

「あ……の……」

田を逸らしたいがまるで固定されているかのように動かせない。  
鬼は視線を外さないまま顔を離し、片方の眉を吊り上げ首をかしげる。

「なにカナ? お願いがあるんダロウ?」

「あ、あ……の」

「おひ、なんダ」

「えつと……そ、とこ……」

「さつさと書わないかな」

ああ、もつ！

言つんだ、わたしつ！！

ぐつとお腹に力を入れて声を出す。

「あ、あのー外に！そ……と、と、トイレに行つてもつ……えつと  
……い、イイデショウカ……」

「[ ]」

しばらく沈黙が続いた。

鬼は珍しきよとんとして目を何度も瞬かせた。一方私はとくに  
と隣の紅い鬼も驚くぐらい顔を真つ赤にさせていた。

「あー……つと」

鬼はしばらく思考をめぐらすと何かを悟つたようで、手を叩いて  
子鬼を呼んだ。裸から遠慮がちに子鬼が顔を覗かしたのを確認すると

「子鬼について行きナ」

どこか拍子抜けした感じで私に言い、子鬼を指差した。  
私は耳まで真っ赤になりながら鬼の言葉に黙つてうなずいた。

「はー……何をしてるんだろう。私

薄暗い個室の壁にもたれかかりながら、ため息を盛大に吐く。  
すぐ疲れた。その割には何の成果もないのだから更にぐつたりする。

緊張に耐えられなくなり咄嗟に出た言葉だったけれど、とりあえず怒らせなくて良かつた。本当に良かつた。

深呼吸を繰り返しているうちに気がつく。

そのまま『外に出たい』なんて言つてもあの紅い鬼のこと。すんなり出してくれないんじやないだろ? か。ん~、だけれど他に案なんて浮かばないし……。

仮に『足が弱っているから』と説明を付け加えて話したらどうなるのだろう? 考えられる反応を思い浮かべる。

考えられる可能性その一。『なるほど。それもそうだな』と、案外あつさり承諾する。

これは楽観的過ぎると思ひ。まあなにか。

その二。『知らない力ナ』と、放置。

これはあり得る。食事まで忘れるくらい興味がない時があるみたいだし案外これが一番可能性が高いんじやないかな。

その三。『ぶわかめえ! それなら喰つてやるまでダア!』

……

特にいう事はないし、言いたくない。想像したくもない！

扉が激しく叩かれる音に我にかえる。

子鬼が『まだか』と催促しているみたいだ。

慌てて扉を開けると、行灯を持つている子鬼がきいきいと文句を言つ。手に持つた行灯が揺れて光が踊る。

「「めんなさい」と頭を下げる子鬼は鼻をふんと鳴らし歩き出した。

暗い長い廊下を子鬼と進む。子鬼が足元を照らしてくれているおかげで、暗くても何とか歩ける。行灯を持つていなければきっと真っ暗闇になるんだろうな。この廊下を何度も通つたが辺りを見回してもやはり窓らしいものは一つもない。

故に光がどこからも入らず、時折見かける鬼火と子鬼が持つ行灯以外、廊下を照らすものはなかつた。窓がないのは屋敷の中心部だからなのだろうか。

お酌をしている部屋も時代劇に出てくるお城みたいに外を見渡せる部分があつても良さそうなのだけれど、生憎両戸のような分厚い板が並んでいるだけで外は見えない。

私は籠に入れられてから一度しか外を見ていなかつた。ここに残ると決めてから間もなく通された露天風呂。漆黒の空にあの線香花火のようなぼんやりとした赤い月。綺麗に整つた和庭園。あの光景には恐怖すら忘れた。

ちなみにあれ以降、お風呂はといと一畳ほどの狭い石畳の部屋に連れて行かれ、そこでお湯の入つた大き目の桶と手拭いを渡され、それで身体を洗えといわれたのだった。文句を言つわけにもいかず、それできつと身体を洗つていた。

「あつ」

露天風呂という言葉を思い出して、ある案が頭に浮かんだ。

あの露天風呂からみえた庭園を褒めたおして『もう一度見たい』  
とお願いしてみよう。そう、『ざざり』『まみ殺』。

とお願いしてみる、そんすにはりてほめ殺した

大変単純な作戦だけれど、曾祖母に聞いた話では、鬼は虚榮心が強いらしい。それを利用すればうまくいくかもしない。

ナニヤ

よし、そうと決まれば！ と拳を作り、見えてきた金色の襖に顔を向け、一人奮い立つた。

「先ほどは失礼しました」と、手をついて頭を下げる。

それを紅い手がひらりと応えると手招きした。

座り酒瓶を手に取つた。

いつ、どうやって話をしようか。なんの脈絡が無いままいきなり褒めだしたらおかしいし……。頭の中で「こちやこちや」と考へていると、鬼の大きな手が酒瓶を持つている手を瓶ごと掴んできた。驚いて後ろにのけぞるが、肩に腕を回され阻まれる。

「酒はもういい力ナ」

酒瓶がするりと手から離れる。

紅い手が瓶を脇に置くと、空中を小さくなぎ払つた。すぐ何が起るんだらうと部屋を不安げに見渡した。す

何か起るんだと部屋を不安げに見渡した。すると部屋がだんだん薄暗くなり、部屋の向こう側がハツキリと見えないぐらい明

るさが落ちた。薄暗い部屋の中ではつせり見えるのは対の妖しい紅のみ。

「鈴音。お前さん、やつせは違つ話をしようとしていたんじゃナイ力？」

何の前触れも無くかけられた言葉にせくつとする。  
急激に上がる心拍数。そんな自分に落ち着けと言ふ聞かせ、首を振る。

「いえ、そんなことないです。全然、そんな」

「そおかー。いや、美味しい酒を飲んで気分がいいもんだから、せつかく聞いてやるつかと思つたんだがナアー。いやいや、そりや残念だ」

言葉をさえぎり鬼がふうーっと息を吐く。心なしか鬼の吐いた息が煙草の紫煙にも見える。

鬼の言葉に一瞬思考が止まり、頭の中が真っ白になった。見え透いた鬼の態度にも関わらず、何故か私は慌てて口を開いてしまった。

「あ、あの、ただ、外に出たくて」

「なんだ、やつぱり違つじやないか」

またもやせりれた言葉にぐつと声を詰まらせた。それを一やりと見て笑う鬼。今度もまたふうーっと勢い良く息を吐く。

馬鹿だ。本当に私は馬鹿だ。

自分の単純や……とこつか馬鹿を睨い、ギリリと奥歯をかみ締

める。

「ほお、そ、うか。外にでたい力」

肩を抱く腕に力が入り、鬼のほうに身体を寄せられる。  
鼻に癖のある香りがまとわりつく。何か吸っているんだろうか。  
激しく鼓動する心臓を鬼に気づかれまいと、鬼と自分の間に腕を入れる。

「な、んで外に出たい？ 何か気になる事でもあるのカナ？」

「あ、いえ。ただ籠の中にいてばかりでは、足が弱つたり」

「足が弱つてるの力？」

きょろきょろと紅い目が面白そうに私を眺めるのを見て、慌てて言葉を付け足す。

「い、息も詰まるんです。何もすることができないので。だから、ほんの少しでいいから外を歩きたいんです。外がダメならお屋敷の中でも構わないです」

早口で訴え、鬼の返事を待つた。

鬼は向こうの闇を見つめてしばし考えると、両の口端をにいつとつり上げた。それを見て背中に寒気を覚えた。ぶるつと身震いする。

「そ、うだなあ。聞いてやれないこともないが、ただ聞いてやるのも詰まらんナア」

そう言つて私の耳元に顔を寄せてくると、ひつそりと声を潜めて

囁いた。

「どうだ？ これから少しの間、お前サンが身動き一つしなかつたら籠の出入りを自由にしてやるとこつのは？」

だらしなく開けている懷に手を突っ込み、いつか見た青い砂時計を取り出すと、ぐるりと空中で一回転させる。

『少しの間動くな』って？  
いかにも怪しい。むしろ怪しげしか感じない。さすがの私もこの条件に眉を寄せた。

「あの、『少しの間』といつのまじれくらいですか？」

「ん~」と少し唸り

「茶を一杯飲むくらいだな、大体。別に無理強いはしないゾ？ やりたくないなら、それはそれで構わんヨ」

今度は『お茶を一杯飲むくらい』だつて？ はっきり何分とか何秒とか言つてくれないの？

その事を聞こうとしたが、鬼はそつぽを向いて『返事はマダか』という雰囲気を作っている。まだ一つしか質問していないのに。どうしようかと悩んだ挙句、この疑問に対する答えで決めることにした。

「私がじつとしている間、何をするんですか？ 痛い目に遭わせるんですか？」

「また質問か。まあ、手は上げないカナ。そんな色気のないことはない。もう問い合わせには答えんゾ」

とりあえず乱暴されることはないみたい。それでも不安が完全に払拭されたわけではないのだけれど。

紫煙の息を思い切り吐くと鬼が私を見下ろした。

「どうする？ してみるか？ それともしないか？」

「……し、しますっ！」

考えてたって仕方がない！せっかくのチャンスだもの。奮い立ち、挑むように鬼を見上げる。そこにはどこか満足げな紅い鬼の顔があつた。

## 第十一怪 灰梅に染まる

自分の足元を紅い鬼火が囲み、円を作る。

円の中には私。円の外には青い砂時計を持った紅い鬼。

「よし、じゃあ始めるゾ」

鬼がクルリと砂時計をひっくり返す。

細かい真つ青な砂が上から下へとこぼれ始めるのと比例して、私の心臓の脈も次第に早足になる。

円の近くに砂時計を置き、鬼が一、三歩後退して小さく手をなぎ払う。まるで墨汁が水に零れたみたいに闇が広がり、辺りは真つ暗になつた。

紅い鬼も襖も天井も闇に溶け込み、見えなくなる。足元の鬼火だけが目の端でぼんやりと光つているのが見えるだけだ。

両脇に下がった手で、ギュッと着物を握り締める。

これさえ耐えれば籠の自由を獲得できるんだ。がんばらないと。

闇の向こうで何かか動くのが見えた。目を凝らしてよく見るとチラチラと光る、鶏のようなものが見える。首を前後に動かしてこちらへくる。

なんだかおかしい。輪郭がぼやけているせいかと思つたが、全体がハッキリ分かる頃に、ようやく違和感の原因が分かつた。鶏はこちらに近づくにつれてどんどん大きくなり、目の前にきた時にはダチョウほどの大きさになつていた。

トサカはかすんだ赤で、目は人の目玉みたいにギョロギョロ動く。くすんだ茶色の羽を盛んに羽ばたかせて、紫色の長い尾羽が畠の上を引きずつっていた。

もうこれは巨大な鶏というよりも怪鳥にしか見えない。見たこともない恐ろしい怪鳥を前に、足が震えるのを我慢しながら息を呑む。

鶏が目と鼻の先まで顔を寄せ、私をひと睨みした後、つんざくような鳴き声をあげた。老婆が断末魔の叫び声を擧げるような金切り声が辺りに響く。耳を塞ぎたいのを我慢してぐつと耐える。しかし頭の芯が叩かれた鐘のように震え、お腹の中が滅茶苦茶に搔き回されたような変な感覚を覚える。

き、気持悪い！頭が痛い！

普段の自分ならすぐさま降参しているところだ。だけれども、今は自由が掛かっているのだ。すぐさま音を上げる訳にはいかなかつた。

やつと鶏が叫ぶのをやめると、突然何の前触れもなく、鶏が紅く燃え出した。そしてグルグルと私の周りを旋回してひと鳴きし、顔すれすれのところを横切つていく。熱いものが耳を掠めて声を上げそうになるが、それもなんとか我慢した。

通り過ぎた鶏は後ろからもう一度叫び声をあげながら横切ると、闇に消えていった。辺りは先ほどまでの騒音がまるで嘘のように静かになる。

ちらりと足元の砂時計を盗み見る。砂はさらさらと下へ零れて、上の砂は中心に穴をあけるほどになっていた。

あともう少し。あともう少しだ！

思いのほか早く終わりそうだと気を抜いたその時。視線を田の前に戻すと紅い鬼が不敵に笑つて田の前に立っていた。

「ほひ、なかなかやるナア。意外と耐えるじゃナイカ」

嬉しそうに目を細める鬼を目にして身構える。

今度はなにがくるのかな。砂時計を見た感じ、あと十数秒。本当

にあと少し！

興奮のあまり酸欠状態になる。頭がくらくらして、全身が脈打つているのを感じる。

きつと今、自分の顔は興奮しているせいでトマトみたいに赤くなっているんだろう。頬が火照っているのがよく分かる。

突然何の前触れもなく鬼がガシリと顎を掴んできた。

一気に身体が強張る。乱暴はしないんじゃ…？ と口の代わりに心の中で悲鳴をあげる。

妖しい紅がまた三日月のように細くなると、薫色の顔を近づけてきた。口の端から見える牙に『食べられる…』と恐怖し、ギュッと目をかたく閉じた。

口が何かでふさがれた。

一瞬、窒息すると慌てたが、鼻で息をすることを思い出し自分を落ち着かせる。

次に唇の間になか生暖かいぬめりとした物が強引に入り込んできた。両手で拳を作つて暫く耐えたが、それが歯列を舐めたのでたまらず目を開けた。

目の前には薫色とその上を走る朱色の線があるだけ。

他には何も映らず呆然とする。

この光景は一体何？ 真っ白な一瞬の後、唇の裏に何かが食い込んだ。

そこで初めて自分の身に何が起つたのか分かつた。

そう、鬼に口付けされただけでなく、唇を噛まれたのである。

過去今まで出したことも無いような大絶叫を上げる。

反射的に挙げた手を、鬼は「おつと」と言つてヒラリ避けた。

私は肩で息をしながら口を手で押された。  
何か言いたいのだけれど言葉にならない。何が起きたかもよく分  
からない。

ただひどく、ショックなことが起ったのは確かだ。その場にへ  
タリと座り込み、田からはみ出る。

鬼はそんな私を見てどこか子馬鹿にした口調で言った。

「大げさだナアー。甘噛みしたダケじゃあナイカ。痛くなかったら  
う？」

『そういう問題じゃありませんっ！』と、叫びたかったが、やはり  
口元が震えて声にはならない。心臓がばくばくいつてあまりの激し  
さに吐き気まで覚える。

「惜しかつたナア。あと少しばかり時間が残っていたみたいだ。百  
歩譲つて円から出なければ良い事にしようとしたんだが、それもダ  
メみたいだな。残念デシタ」

紅い手が砂時計を拾い上げ懐に閉めた。

ようやく呼吸の乱れが治まり始めた時、鬼の馬鹿にした物言いに  
カチンときて睨みつけると『手を出さないって叫つたじゃない！』  
と、非難の声を上げる。

鬼はそんな私にひょこと肩をすくめて

「いやいや。『手をあげない』とは言つたが『手を出さない』とは  
言つていないと。ま、どっちもあんまり違わないガナ。それに乱暴  
はしていいだろ？』

「噛んだじゃない！ 嘘つき… 鬼… 悪魔…」

「そりゃ、光栄力ナ」

今思いつく限りの悪口をありつたけ言つたつもりが、紅い鬼はどこ吹く風。いつものニヤニヤした笑みを浮かべながら腕組する。

「大体なんでそんなに騒ぐ？ 嘰われるよりかはマシだろ？ なんだ？ もしかして口付けが初めてだった力ナ？ なら、今度の飯は赤飯ダナ」

「なつ……なつ……！」

今の言葉に完全に恐怖と怒りの数値が逆転した。すつと立ち上がり、鬼のほうへとツカツカ近寄る。そして思い切り平手で鬼の頬を打とうと手を振り上げたが、いつも簡単にその手を掴まれる。

「よしとけ。逆にまた怪我をするゾ」

「放してっ」

紅い手から逃れようと、掴まれていないほうの手で、鬼のゴツゴツした手を引き剥がそうとする。鬼はかまわず私の腕を引っ張り自分がほうへ引き寄せると、空いている手で顎をつかみ、顔を上げさせる。

「お前は本当に、活きの良い雛鳥力ナ」

深紅の瞳が妖しく光る。目を細め、獲物でも見るかのような残酷な眼を向けてくる。

私は一瞬にしてその場に縫い付けられた。

恐怖に駆られたのではなく、鬼の目に魅せられ、視線を外せなくなつたのだ。

鮮やかな妖しくも美しい鬼の瞳。炎のように揺らめく紅。鳶色の肌を朱色の幾何学模様が広がっている。その光景がまた目の前に迫つてくる。

「いい子ダ

ただ呆然と眺め、目と鼻の先まで来た時、紅の瞳が閉じた。

その瞬間私は我に返つたと同時に、自由が利く手で鬼の頬を打つた。

辺りに小気味良い音が響く。

「い、痛つ！」

と言つたのは私だつた。

相手の頬に平手を打ち付けた時に、鬼の牙で指を切つたのだ。薬指から鮮血がこぼれる。綺麗にスッパリ切れたみたいで、ずきずき痛む。涙目になりながら指を押さえていると、はあと呆れた溜め息がすぐそばで聞こえた。キッと溜め息がした方へ目を向ける。あれだけ思い切り引っ叩いたのにケロリとしている。うう、なんだか悔しい。

「だから言つたろつ。どれ、見せてみろ

「いいですつ

伸ばされた手から隠すように指を引っ込める。また何かされたんじや、堪らない。

「おお、そうかい。鬼の牙でつけた傷はそこらのとは違つてなかなか塞がらない。甘く見るなヨ。小さな傷でも放つて置けば、どんどん血が流れ続ける。失血死しても俺は知らんゾ」

し、失血死する？

確かに言われてみれば出血量が多い氣もする。でも今までこんなに深く切つた事がないので、多いのか少ないのか見当がつかない。

「おい、濡れるぞ」

肘まで血が垂れてきたのを見て、鬼が袖をまくつた。そして何かに気がついたように眉をピクッと動かす。不思議に思つて鬼の表情を読み取ろうとした時、紅い目には私の灰がかつた色をした左腕が映つていた。私は見せてはいけないものを見せてしまつた気がして、慌てて袖を下げようとした。

「よせ。血がつく」

鬼は私の腕をひっぱり、肘まで垂れた血を舐めあげ、切れた指を口に含んだ。その光景に嫌悪感を感じて目を背ける。そして痛みが引いた頃、鬼は指を放した。

しげしげと放された薬指を眺める。まだ指が濡つている氣がして無意識に渋い顔をしてしまひ。

後で手を洗わないと……。

感謝そつちの氣で心中でかたく誓つ私。ふと、鬼が左腕をじつと見ているのに気がつき、疑問を思い出して腕をかざして訊いた。

「あの、これは一体なんですか？ 病気なの？」

「……いや。ここに来た人間がよくなる変化ダ。この世界いるに限

つては特に問題はナイ。肌の色が変わるだけ

一瞬何か考えたように見えたが、すぐにいつもの軽い口調で言った。特に問題がないのなら別にいいけれど、でも、あまり良い色とは言えない。血色が悪すぎて気持悪い。

鬼が手を三回鳴らすと部屋から闇が波のように引いて、元の明るさに戻っていく。気がつけば足元にあった鬼火も消えていた。

「さて、鈴音。そろそろ籠に戻ろうか。飯の用意もするからナ」

「……」

私は口をへの字にして、顔いっぱいに不満を表した。  
まったく、鬼に口付けされるわ、籠には出れないわで散々だ。まだ怒りの虫が治まらない！ 良い事と言えばご飯にありつけたくらいだ！

「あつ、そうだ」と、ご飯といつ単語で思い出して声を出す。

「ん？ 何力ナ？」

「（）飯は、絶対絶対お赤飯は勘弁して下せー」

## 第十一怪 見えた檀染（はじやめ）

紅い鬼が出て行つた後、灯籠の灯が小さくなる。

うつすらと物の輪郭が見えるくらいの明るさの中、浴衣に着替えて布団を敷く。梅が小さく咲き誇る敷布団に身体を横たえ、ふうと息を吐いた。

さつきまで怯えを忘れて、鬼と話をしていたのが嘘のようだ。なんだか不思議な、もやもやとした物が先ほどから胸の辺りで燻ぶつていてる。

結局籠の出入りも自由にならなかつた上に、鬼に口付けされた。しかも初めてのを、だ。

思い出すと腹立たしくなつて意味がないのに手で口を何度も拭い、それでも何か足りなくて布団にパンチを繰り出す。掛け布団はボフツと殴られたところをへこませる。

まつたく！ 等と言つて、目を閉じて頭まですっぽり布団をかぶると、またふうと息を吐いた。

……この世界に居続けるのなら、積極的に鬼と仲良くすべきなんか。気まぐれな鬼だからいつ機嫌が悪くなるか分からぬし、殺されてしまうより、喰われてしまうより、息が詰まる事を良しとして、鬼の顔色をみて従順に大人しくしているべきなんだろうか。

今回だつて、鬼の機嫌が悪ければ弄り殺されていたかもしれないのに。

今思えばよくあんな口がきけたものだ。

それにしても静か……。

いつもだつたら子鬼達の鳴き声や話し声が聞こえてくるのに。

そう、いつもなら布団に入りしばらくすると、喧騒が消えて、子

鬼達の鳴き声に紛れてひそひそ話しが聞こえてくるのだが今は何の音も聞こえない。

なんだか寝苦しくて寝返りを打つ。いやに落ち着かない。

体は疲れているのに、頭が妙に冴えている。

嫌な感じだなと思ったその時、なんだかカサカサという微かな音が耳に入った。

天井から、籠の向こうの置から、何かが這うような音が小さく聞こえた。聞き間違えかと思い耳をそばだてる。

……

ううん、聞き間違えなんかじゃ無い。  
やつぱり何かいる！しかも複数だ！

身の危険を感じて上体を起こすと、頭から被った布団をどけた時だった。いきなり粘着質の何かが目を覆うようにかぶさってきた。

反射的に目を閉じたのでその何かが直接目に触れる事は無かつたが、突然のことには頭が混乱し、手足をバタバタさせる。

叫び声を上げようとしたが、喉元に先の尖った物を突きつけられた感覚を覚え、慌てて口を閉じる。気がつけば身体のあちこちにも、同じ感覚があった。

微かに動いただけでも鋭い何かが肌に食い込む。

身動きが取れない！

やだ……どうしよう！

だ、誰なんだろう？ 何をしようとしてるんだろう！？

小さく震えていると、籠に何かがぶつかる音がする。

その音に合わせて体を押さえている尖った物も動いている。

何者かが籠の外から私を刃物で押さえつけているんだろうか。

だとしても、なんの為に？

体を横向きにされる。そして刃物が首の後ろに入り込むと、グイッと覗き込むように襟を引っ張る。次に胸元を開けられ、両袖もまくり上げ、裾も上げられる。

今は恥ずかしさよりも恐怖のほうが上まわり歯がガチガチ鳴つた。一体何がしたいんだろう。もしかして何かを探しているんだろうか。

気がつくと、さつき聞いた這うような音が次第に近くなり、自分を囲むように四方から聞こえてくる。時折、その音に混じつて『ギチギチ』という歯軋りするような音が聞こえてくる。

「痛つ　ーー！」

何かが一斉に私の体に噛み付いた。全身に激痛が走る。思わず叫び声を上げたが喉に刃が食い込んで声を詰まらせた。

呼吸が乱れ、息も絶え絶えになり、激しく胸を上下させている間にも痛みと共に何かをすする様な音が聞こえてくる。

なんとか逃れられないかと体を捻ろうとすると、噛まれた所から痺れと這うような痛みが広がってきた。それが全身に蔓延すると、自分の口から声にならない悲鳴が上がる。

体が、頭が痛い！　胸が苦しい！　吐き気がするー！

痛みに耐え切れなくなり、声を上げようとすれば刃が喉に食い込み、噛み付く何かを振り払おうと身動きすれば、全身に刃が突き立てられる。まさに地獄の往復だった。私はひたすら悶え続けた。

一体どれくらい経つんだろうか。

私は精も根も尽き果て、痛みを感じても指一つ動かせなくなつて

いた。口からは『うう』という呻き声しか出でこない。

顔の表面を刃が撫でると視界を遮っていた物を剥ぎ取つた。重いまぶたを上げるが、見えた景色は既に霞んでいた。黒い星が散りばめられ薄暗い部屋がより一層暗く見える。

その霞んだ視界の半分を占領している大きな一つの丸いものが見える。くすんだ黄色い玉が一つ、闇の中からこちらを睨んでいる。でもすぐにその光景も黒い星で埋め尽くされていく。

もう、何も見えない。私は死ぬんだ。

あっけなく訳も分からぬまま死んでいくんだ。

いつしか身体中の力が抜け、唇まで痺れ、最後には呼吸も止まつてしまつた。

辺りに残るのは私をむたぼる音だけだつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

闇の中に横たわる身体。

肌はどす黒い紫で覆われ、半分開いている目は何も見てはいない。これならあと少しもすれば死に至るだろう。

もう死んだも同然。

噂通りなら、これで紅い鬼も動くだろう。

そしたらあの田障りな奴らを殲滅してくれるに違いない。

長年の夢もこれで叶いそうだ。

もう遠くなつた耳に何か大きなものが天井へと消えていく音が聞こえる。

残るのは死を目前にした私と、それをむさぼる何か達。目には何も映らないし、もう痛みも感じない。耳もほとんど聞こえない。

死ぬつてこいつを感じだつたんだ。

色々やりたい事はあつたけれど仕方がない。  
両親には悪いけれど、友達を救えて死ぬのなら……

でも私が死んだら契約は無効になつちゃうのかな。  
そしたら友達みんな連れ戻されちゃうのかな。  
意地悪な鬼だから何を思いつくか分からないし。  
しかも最初で最後のキスが鬼なんて嫌だ。  
最後ぐらい大好きな人したい。  
というより、せめて人間が良いつ！  
こんな所で死ぬなんて冗談じゃないつ！

自分の中で何かがはじけ、ギリッと歯を食いしばった。すると口の中がほんのり熱くなっているのに気がつく。痺れる舌で熱い部分を舐めてみる。どうやら脣の裏から熱が出ているらしい。次第に熱くなつてくる。

熱が口いっぱいに広がると、それが喉を通り四肢に流れ、やがて体中に広がり、ボッと発火する音がしたかと思うと、女性のような悲鳴がいくつも重なつて部屋中に響いた。

布団や畳の上に小さな影がいくつも転げ回る。

突然、襖が蹴破られた。耳に入ってきたのは複数の子鬼の鳴き声。雄たけびを上げながら子鬼達が次から次へと部屋に入り、棒のようなもので影を叩き始めるのが聞こえる。

「派手にやられたナア」

少し前に聞いたばかりの紅い声。  
騒音の中、静かな音が異様に耳に響く。  
ゅつくりゅつくり近づいてくる足音。

「可哀相になあ、鈴音え」

足音が耳元で止まると、無骨な手の甲で頬を撫でられる。目を見開くが何も見えない。

今のは私には肌の微かな感覚と耳から入る音だけが、今の状況を教えてくれるみたいだ。大木のような硬くてがつしりとした鬼の腕が膝の裏と肩に回ると、一気に浮上した感覚を覚える。下の方から子鬼達が雄たけびを上げ、何かが悲鳴をあげる音が聞こえる。

「お前さんたち、ほゞほゞにじとけ。後片付けは任せたからな」

鬼の声に子鬼の威勢のいい返事が返つてくる。  
その鳴き声にはどこか嬉々とした物が混じっているかのように聞こえた。

## 第十二怪 紺碧を飲む

視界いつぱいに埋め尽くされていた黒い星がよつやく取り除かれただようで、視界中央に薄暗い木の天井が映る。多少ぼやけてはいるが、まったく見えないワケではない状態まで、なんとか視力が回復してきたみたいだ。

起き上がろうと身体に力を入れる。しかし金縛りにあつたみたいに指先すら動かない。鈍い感覚の中、目を足元へ向けると、自分が呼吸するたびに布団が上下しているのが見える。

ここはどこだろう。

出来る範囲内で辺りを見回す。

だだつ広い畳の間に、見たことのない虎の襖に鷹の掛け軸。他には何もなく、殺風景だ。どうやら籠の中ではない、どこか別の部屋で寝かされているようだ。

「生きてる……」

私はどこか他人事のように呟いた。

頭がぼうつとして少し胸が苦しく感じるが、あんな目に遭つたのにも関わらず、こうして穏やかに息をしているのが信じられなかつた。

見たわけではないのに空想上の化け物が自分に喰らいついている姿を浮かべてぶるつと震える。

私は何で襲われたんだろう？ 何に襲われたんだろう？

鬼にばかり恐怖していたが、他の何かに襲われるだなんて、まったく思つてもいなかつた。

すぐそばの襖が開かれる音がする。微かに動く頭を音のしたほうへずらすと、紅い筋肉質な足が見えた。大股で近付き、鬼が私を覗

き込んできた。

「おお、だいぶ良くなつたみたいダナ」

鬼はドカッとその場に腰を下ろすと、あぐらをかいた。相変わらず口には笑みを浮かべている。

何度か目を瞬たいて、鬼の顔を見る。

深紅の瞳は穏やかで鳶色に走る朱の模様が今は波紋のように見える。

しばらく見詰めても恐怖を感じない。放心したみたいに心が何に対しても反応しないようで、なんだか胸が空っぽになつたみたいだ。

鬼の大きな紅い手が額に触れる。

いつも熱いと感じていた手の平は今ではほんのりと暖かい。

「少しばかり熱があるようだナ。鬼火の後遺症だろつ。じきに良くなる」

「……鬼火？」

「お前に仕込んだ俺の鬼火ダ」

「仕込んだ？」

何のことだろつと動くはずも無い首をかしげる。

ああ、だけれど、思い当たることが一つある。

……思い出したくもないので。

鬼と籠の自由をかけた勝負をしたときに、唇の裏を鬼に噛まれていた。おそらくその時に仕込まれたんだ。

実際何かに襲われていたとき、そこが熱くなつて私を襲つていた

何かが、悲鳴を上げていた。そつか、あれは鬼火だったんだ。

「私は……どうなったの？ 何かに襲われたの？」

「ああ」

「誰に襲われたの？」

「ん~、田星はついたカナ」

私は田を閉じて、なんとなく田を覚ました時から抱いていた考えを口にするかどうか迷った。金魚のように口を何度も開け閉めした後、おもむろに田を開けて鬼に視線を戻した。

「あの、もしかして、こうなる事が分かっていたの？ 分かっていたから、だから鬼火を私に与えたの？」

鬼はひとりと私を揺れる紅で見つめ、黙つた。

そして一息ついて「そうだ」と頷いた。

両目で鬼の表情を探るように見詰める。

相変わらず笑つてはいるがその表情はどこか田々しい。

別に鬼に何かを期待していたわけではないが、ひどくつらい感情が沸き起つた。

なんというか、喉の奥が詰まつて、そこからドクドク心臓の鼓動が直接鳴り響いているような……胸がちぎれるような苦しい感じ。

今まで鬼のせいで散々ひどい田に遭つて来たけれど、こんなふうに仕組まれて危うく殺されかけるだなんて思つてもみなかつたし、ここまでこんなひどい仕打ちを受けるだなんてやつぱり思つてなかつた。

やつぱりここは物の怪の世界で、鬼は鬼なんだ。

「鈴音。 そう泣くな」

鬼が私の目元をなぞり、離れた爪が濡れているのを見て、自分が泣いているのを初めて知った。

それを呆然と眺めている私を爪を舐めて鬼は笑った。

「人間は弱いナア～。命を落としたわけでも手足をもがれたわけでもないのに、メソメソ泣くのか。忙しいヤツ」

嘲笑の声に感傷的なもやもやしたものが少し引っ込む。多少ムツとしたので、首を鬼のいない方へ思い切り向けようかと思ったが、生憎まだ体の自由が利かないで目だけを動かす。

言い返さないのかと田には映らないところから声が聞こえたけれど無視した。

「まあ、完治するまで大人しくしてれば良い。じばらくはここを使え。籠の部屋は血と毒で汚れて使い物にならんからナア」

鬼の言葉に籠の光景が容易に想像できてゾッとした。

鼻につく血の香りと異臭がまた匂つてきた気がして軽く吐き気を覚える。

嫌なことを思い出せないと呻いた私に鬼はまたしても笑うだけだった。

「そつだ鈴音。この薬を飲め」

よれた着物の裾から何かを掴み、私の目の前に差し出した。

突然視界に現れた鬼の手にぎょっとしつつも、鋭い爪先でつままれた何かを凝視しする。晴天の空のような色をした丸い粒が三つ、

宝石のように煌いていた。

「これを見れば体に残る毒氣が完全に消える。飲め」

「まだ体に毒が残っているの？」

「蜘蛛の毒はしつこいからナア。鬼の俺でも吸いきれなんだ。さあ、いい子だからお飲み」

「私、蜘蛛に襲われたの？」

ああうるさいと言わんばかりに、物の怪の割には整った眉を寄せると、私の口の中に粒を素早く押し込んできた。

「ガタガタ言つてないでさつさと飲め」

まだ二回しか質問していない！ と抗議の声を上げようとするが、鬼の太い指が猿ぐつわと同じ効果を發揮していて、むぐむぐといふ変な音しか口から出でこない。

何度もかむせて、ようやく小さな粒を飲み込んだ。

鬼が指を突つ込まなければもつと簡単に飲み込めたのではないかと思つたが、妙にぐつたりとしてしまい言うのをやめた。

くあつと大きな紅い口が開き、氣の抜けた声が漏れたの耳にしてそこに視線をなげる。

「さあて、俺はそろそろ行こうかね」

片膝を立てておもむろに立ち上がり、うんと伸びをすると、紅い体から小気味よいポキポキという音が鳴つた。そして首をぐるりと回しながら鬼は言った。

「休んでいる間は暇だらうから、子鬼を遣わしてやう。それで退屈しのぎでもしてれば良い。用件もそれに言え」

大またで歩き、襖をいつものように足で開ける。

行儀が悪いなあと顔をしかめる私に、何か思い出したようで肩越しに細めた紅を私へ投げると

「ああ、そうそう。

お前サン、外に出たいだなんて言つていたが、外にはお前を襲つたような奴等がウヨウヨいるゾ?

これを良い機会に考え方改めたほうが良いカナ」

「え?」

素直につなずきかけるが、何かひっかかりを覚えて止める。

今聞いた言葉を何度も頭の中で繰り返し、ある考えが浮かんだと同時に自分の顔が青ざめた。

「まあか……だから?」

「さあ～ナア～」

曖昧な返事でじゃあなと紅い手がヒラリと舞い、妖しい紅を最後に襖の向こうに消えていく。

私が外に出たいなんて言つたから、襲われるのを知つていて黙つていたつて事?

外に出たいだなんて一度と思わないよ?」「たつたそれだけの為に?」

私は鬼が去つた後も  
馬鹿みたいに口を開けて呆然とするしかなかつた。

## 第十四怪 縁の子鬼の紙芝居

田の前の子鬼が手振り身振りで時折拳をふるつてひたすら熱弁している。

けれども、どう聞いても『きいきい』といつ古いドアが鳴るような鳴き声しか聞こえなくて、ただただ苦笑いするしかない。

「きいー！」

真面目に聞け！と言つているのだろう。

か細い縁の指をむけられ、やれやれと姿勢を正す。あのお、そろそろ足痺れてきたんですけれど。

紅い鬼に命じられて小さな一本角の縁の子鬼がやつてきたのは大体今から一時間くらい前。

暇だらうからと、何かを仕切りに話してくれているみたいなんだけれど、何を言つているのかさっぱり分からない。

もう良いよ、ありがとう。

そう言つても帰つてはくれず、子鬼が所狭しと跳ね回つたり、一人々やんばらを演じて見せたり、落語のような真似をしたりと忙しくしている。

ため息をして視線を逸らす様なら盛大に金切り声で責められる。

ちょっと前には『よよよ』と泣き崩れて掛け布団の隅っこで涙を拭いたかと思つたら、突然大音量で泣き出したのだ。

慌てふためいて『ごめん』と謝つたが声は大きくなる一方。

しまいには他の子鬼まで何事だと天井から降つてきて、なぜか私が怒られたのだった。

「あ、あのね」

高いトーンで歌を歌いだした子鬼は、私が声をかけた途端に低い声に変え、両肩を落として睨んできた。

今が良いところだつたのに！ 足を鳴らして抗議するその様子に、まあまあと両手を振つてなだめる。

「あのね、さつきから言おうと思つていたんだけれど、私、あなた達の言葉が分からないの。だから、無理してお話したりして付き合つてくれなくて大丈夫だよ」

本当はもつと早く言いたかったのだが、なかなかタイミングが合わず言いそびれていた。ということも付け足しておく。

子鬼は腕組し小首をひねる。そして一人ちゃんとばらで使つていた細い棒を私に投げ、自分は小さな両手を熊みみたいに構えて唸つた。小さい子が戦いごっこをやるつー、と誘つているように見えて思わず噴出しそうになる。

そんな私を見て怪訝な顔を向ける子鬼に笑いをかみ殺しながら言った。

「ねえ、それよりもこの世界のことが分かる本とかないかな？ 今いるこの世界のことを、もつと良く知りたいの」

あの紅い鬼は何か隠している。  
私には知られたくないことを。

外に出したくないのも、元の世界の話を禁止するのもきっとそれが絡んでいるんだと思う。

もちろん紅い鬼の単なる嫌がらせかもしれないし、全然別的事情でそうするのかも知れないけれど。

それでも何も知らないでいるよりも、知つておいたほうがいざといふときに役に立つはず。

今のところ分かっているのは『名前』が重要つてこと。

他の鬼達の様子を見たところ、名前が悉くと鍵になつてゐるに違いない。

とにかくまざまざの世界のことをもつと知らないと、何も分からぬ気がする。

「別に本でなくともいいんだけれど。あ、本つて分かる？ 卷物とか、こう、紙に書いているものなんだけれど」

この物の怪の世界では時代劇のような物ばかりで、近代的なものは何も見ていなかつた。なので『本』といつて言葉が通用するのかどうかも分からぬ。

そういえば、紅い鬼に『トイレ』といった時もきょとんとしてたよね。

まあ、ただ呆れていたつていうこともあるんだらうけれど。

私の言葉に鬼が顎に手を当てて、唸る。

しばし考え込んでコクリと頷いた。

善は急げと言わんばかりに、ちやんばら棒や扇子や、その他色々な小道具を灰色の風呂敷にせつせと仕舞い込み、何かを私に言つて天井裏へと戻ってしまった。

分かつてくれたのかな。

布団の上で膝を抱えて子鬼を待つことにする。

それにしても、あの紅い鬼は何を考えているんだろう。

傷を治してくれたかと思つたら、襲われるのを知つて黙つてるとか。でも最終的には助けてくれるとか。

意味が分かんないよ。

なに？ 餅と鞭つていうことなの？

これからも何か気に触るようなことがあつたら、またあんな怖い

田に遭わされるのかな。

「 つ

別に寒くもないのに無意識に腕をさする。  
なんだか怖い。

今回のこと改めてあの紅い鬼の異常性を知った気がして、消えかかっていた恐怖と不安がよみがえって来る。  
結局、籠の中にいようといまいと、鬼に囚われる『籠の鳥』ということには変わりはないのだ。

鬼の機嫌を損ねないように、ひたすらさえずるしかないんだろう。  
でも、だとしたら先程子鬼に頼んだことは意味がないんだよね。  
鬼の隠していることを突き止めるより、鬼の機嫌を損なわない為にはどうしたらいいのかを考えなくちゃいけない。

第一なんで私は鬼が何か隠していると決め付けているんだろう。  
さつき思いついたように、本当に嫌がらせしているだけかもしれないのに。

だんだん自分が何をしたいのか分からなくなってきた。

私はどうしたいんだろう。  
何を考えているんだろう。

大人しく従順に飼われて身の安全を確保したいのか。  
それとも鬼の考えている事をハッキリ突き止めたいのか。

両手で頭を抱え込む。

こんなに悩んだこと今までなかつたから、どうしたら良いのか分からぬ。

つうん違う。

自分が何をしたいのか分からぬんだ。

「……っ」

必死で頭を左右に振る。

チラリと頭の中を通り過ぎたモノに対して嫌悪し振り払う。

考えたくない。

そんなふうに思つなんて最低だ！

大勢の前で閻魔様に断罪された気分になり、罪悪感にさいなまれる。

「違う。そんなふうに考えてなんていないつ

一人必死で掠めたものを否定した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何の音も聞こえなる時間帯。

「なあ、なあ」と自分に呼びかける声と揺さぶられる身体。

目をうつすら開けると灯籠の明かりは小さく、部屋は暗かつた。どうやらいつの間にか眠つてしまつたらしい。

寝ぼけ眼で身体を起こすと、先ほどの子鬼が目の前にいた。

「なあに？」

子鬼はしつと口の前に指を立てて

「音無しの時間は音がよく響く。静かに話せ」

「え？」

思わず大きな声をだして直ぐに慌てて口をつぐむ。

子鬼が話した！

その事実に目を丸くしてしまつ。

「俺達の声は小さいから、この時間帯でなければ人間には聞こえない」

「もしかして、たまに聞こえるひそひそ声は君たちなの？」

「やつれ」

なぜか誇らしげに言つて胸を張る。

「俺様がここに来たのはお前が殊勝なことをこつから、わざわざ絵までこじらえてきたのだ」

「絵？」

「ああ」

風呂敷から厚紙を数枚取り出して私の前にかざした。じゅやらお手製の紙芝居のようだ。

「今から紅い鬼様の話をする。この世界を知るにはまず紅い鬼様の

事から始めなければ話にならない。黙つて聞いているんだぞ」「

うんうんと頷いて布団の上で正座する。

ちょっと眠いけれど、わくわくして仕方なかつた。

「よし。じゃあ、始めよ。『ほん』

子鬼は小さく咳払いをすると語りだした。

広い暗闇の中、人間の世界から帰つてきた百鬼夜行の鬼達が宝を抱えて帰つてきた。

金銀財宝に、刀に着物。

沢山の宝を煌かせながら広い広い常闇を歩いていた。

先頭には山ほど大きな赤い鬼が牛車に乗つて、今回の自分の手柄を周りの鬼達に自慢していた。

真つ赤なその鬼はとても乱暴で、なんでも自分の物にしたがるが直ぐに飽きてしまい、なんでも壊してしまつた。

他の鬼達は赤鬼を好いていなかつたが、強さは鬼の中でも指折りに数えられる鬼だつたので、誰も逆らわなかつた。

今日も部下の宝を根こそぎ奪おうと田を光らせていくと、一匹の鬼が目に入った。

その逞しくも華奢な鬼は、他の鬼と比べて紅葉のよつに鮮やかな色をした鬼だつた。

その鬼の手には美しい緋色の反物が握られていた。

「おこ、ヤシのやせつぱつち。お前のその反物をよこせ」

「いえいえ、赤鬼さま。これは俺の物です。こんな反物より貴方様の持つている反物のほうが美しいではないですか」

「当たり前だ。俺様のものだからな。さあ、それをよこせ」

「いえいえ。こんな薄汚れた反物を献上するわけには参りません」

「汚れていても構わん。よこせ」

赤鬼はのらりくらりと話す紅い鬼にだんだん腹が立ち、ついに財宝の中にあつた刀を取り出して紅い鬼に切りかかった。

紅い鬼は力はなかつたが素早く、赤鬼の刃を何度も見事に交わした。

「赤鬼さま、分かりました。反物を差し出すので刀を納めてください」

「最初からそうすれば良いのだ」

「無礼を働いたお詫びに、このお酒でもいかがでしょう。なかなかの銘酒です」

「おお、そうか。それならすぐ飲むとしよう」

赤鬼は紅い鬼が差し出したお酒をたらふく飲んで、いつしか寝てしまつた。

そのスキに紅い鬼は赤鬼の刀を奪つて、赤鬼を細かくバラバラになるまで切り刻んだ。それを見た他の鬼は、紅い鬼に慌てて言つた。

「お前はなんて馬鹿なんだ！ 赤鬼様は身体を切られても死ないし、人間の陰陽師すら怖がる呪いを持っているんだぞ！」  
目を覚ましたらもう一度術で身体をくつつけて、お前を殺してしまうぞ！」

「そうだ！ 地獄の業火ですら燃えないといわれる赤鬼さまの身体だぞ！ だから今まで誰も逆らわなかつたんじやないか！」

口々に喚く鬼達を見渡し、紅葉の鬼はにやりと笑つた。

「せうかそうか。切つても繋がるし焼いても燃えないか。  
ならこいつしてしまえば良い！」

そう言つと紅い鬼は、切られてもなお、未だに生きている赤鬼の身体を次から次へと口の中へ運びむしゃむしゃと食べていつた。  
これには他の鬼達も目を見張り、赤鬼を食べてしまつた紅い鬼を畏れの眼で皆見つめた。

「どうだ。これなら貪欲の赤鬼様とて、もう生き返れまい」

紅い鬼が胸を張ると、突然身体が褐色に変わり始めた。  
それは紅い鬼の美しい紅の肌を侵食し、どんどん広がつていつた。

「赤鬼様の呪いか！」

「やはり、ただでは済まないんだ！」

もうだめだと他の鬼達は口にしたが、紅い鬼は涼しい顔しながら鋭い爪で自分の身体に様々な模様を書くと、次第に肌は薺色になり、

爪の傷で描かれた模様は美しい朱色となつて輝いた。

不敵に笑つた妖しい紅の瞳を持つた鬼を見て、周りの鬼達は「新しい貪欲の鬼様だ！」と口々に叫んだのだった。

-----

「どうだ！ よく出来ているだろ？ 僕様が作つたんだ

緑の子鬼が得意げになりながら

紙芝居の後ろからひょっこり覗いて笑つた。

「うん。良くな出来ているけれど、君が作つたのは話してくれる前に  
聞いたよ」

苦笑いして子鬼に遠慮なく言つ。

子鬼は少しだけ眉間にしわを寄せたが、すぐに気を取り直した。

「まあ、とにかく。我らの紅い鬼様は、鬼は勿論、他の妖怪からも  
『鬼喰い』として恐れられているのだ。

しかも前の赤鬼様と違つて、どうしても欲しいもの以外はやたら無  
闇に手を出さないし、変に威張り腐はない。だから皆、前の赤鬼様  
よりも慕つているのだ」「

ちょっと変わっているお方だがな。そう言つて子鬼は締めくる  
が、私の「なるほどねえ」の呴きに、本当に分かつてゐるのかと子  
鬼が眉を寄せた。

「あ、もしかしてあの変な口調は呪いの後遺症?」

「あー……だと思つ。以前は普通に話してたみたいだし。ちなみに赤鬼様の持つていた財宝はそのまま紅い鬼様の物になつたんだ。誰も怖くて異を唱えなかつたし、当然の権利だしな」

絵本とかで見たことのある鬼とは、随分違う鬼だなとは思つたけれど、まさかそんなにきさつがあつたなんて。

鬼が鬼を食べるという話も聞いたことがなかつたし、子鬼が言つたちよつと変わつてゐるという言葉にもうんうんと頷いた。ふと、ずつと気になつてゐた事を思い出す。

すぐさま田の前の子鬼に身を乗り出して訊いてみた。

「ねえ、名前のことなんだけれど」

「ば、馬鹿!」

全部言つ前に子鬼に怒鳴られる。

子鬼はあたりをすばやく見回し、何も無いと分かると牙をむき出しにして私に詰め寄り、ドンと足を鳴らした。

「名前の話はするな! 誰かに聞かれたらどうする!..」

「だから、なんで名前の話をしたらいけないのか知りたいんだって」

「知らんでいいつ!..」

これで話は終いだと吐き捨てて、私の制止を無視して天井裏へとさつさか上つていつてしまつた。

あたりは何の音もなく、しんと静まり返る。

私は一人小首をかしげた。

なんであんなに名前の話を避けたがるんだろう？

不思議に思いつつ、やっぱり名前になにかあるみたいだと、子鬼の反応を見て私は確信した。

なんとかして名前について調べられないかな。

でもどうやって？

子鬼の消えた天井を見上げるが、そこをいろいろ見つめても答えは出てこなかつた。

灯籠が明るくともる頃、紅い鬼の代わりに子鬼が食事を持ってきたのを見計らつて、子鬼に昨日のことを謝つた。

「もつ名前の話はしないから、また音無しの時間にお話がしたいの！ お願い」

子鬼の細い腕を掴んで懇願した。

一人で居ると嫌な考えが頭の中を占領して耐え切れなかつたし、それに子鬼と険悪なまで居るのも嫌だつた。

なんだかんだいって私の世話をしてくれているのはこの小さな縁の鬼だけ。紅い鬼みたいに酷いこともしないし仲良くなりたかつた。私のした事が意外に思つたのか、子鬼は大きな目を見開いて驚いた。そしてちょっとともつたいたぶつて、考えるしげさをきつかり十秒した後、威厳を持つて大きく頷いた。

「良かった！ ありがとう」

思わず満面の笑みを浮かべる私に、鼻をふんと鳴らして食事を押し付けてきた。

乱暴な態度だけれど、それでも私は嬉しかつた。

音無しの時間。

前と同じように揺さぶられて私は目を覚ました。子鬼が風呂敷を抱えてこちらを覗き込んでいる。

「今日は面白いヤツを連れてきたぞ」

「え？ どーに？」

布団から身を起こし、辺りを見回すけれど、部屋には私と子鬼以外誰も見当たらない。

緑の子鬼は風呂敷を丁寧にそつと畳の上に広げ、中にあつた木箱から陶器を出すと『ここつだ』と私に差し出した。

上品な色をした薄紫の急須。

結構な年代物みたいだけれど、四足が付いている以外は特に変わつたところはない。

私が首をかしげると、唐突に声をかけられた。

「あらまあ、人間じゃないの。珍しいこともあるじゃない

ひやっと声を上げて飛びのく。

「急須がしゃべつた！」

「そり、付喪神だ」

付喪神って、あの、百年経つた道具とかが動いたり話したり出来るって言う妖怪？でも、目の前の急須をみると、妖怪って言つより、なんだかファンタジーチックな気がするな。

無意識に、二口二口していたみたいで、子鬼に嬉しそうだなと言われてしまう。

「ただの急須じゃあ、ないわよ」

急須から優しい大人の女性の声が聞こえる。

囁くような品のある口調。

クスクス笑うたびに蓋が鳴つた。

「淡藤局<sup>あわふじつばね</sup>つてみな呼んでる。なんたって氣位が高いからな、こいつ……いてつ」

「子鬼は口が悪くてイヤになるわ」

蓋に思い切り噉まれたらしく指を口に含んで唸る子鬼。  
そんな子鬼をよそに力チャリと畳の上に飛び降り、甘い声で囁いた。

「人の子、名はなんと申す?」

「あの、鈴音です」

未だに涙目になつてゐる子鬼がおいつと私をつづいた。  
そんなに痛かつたのかな?と思いつつ何故つづかれたのか分から  
なくて、『何?』と子鬼に眉を寄せた。

「あら。可愛らしいお名前をもらつたのね。  
ねえ、この子に名前のこと教えての?」

今度は淡藤局をねめつけて子鬼は唸つた。

「まつたくじいつもこいつも…名前の話はダメだつて。  
紅い鬼様に聞かれたらどうする?」

「何故ダメなのかを教えなれば腑に落ちないものよ。ねえ?」

「は、はいー」

なんだか思わぬ展開になつたみたい。  
この淡藤局さんという急須が教えてくれるのかな。  
期待が膨らんで身を急須へと近づける。

「あのね。名とこつのは魂を示す」とでもあるの

「魂？」

「そつ。だからやたら無闇に教えるものじゃないわ

「でも、名前がないと不便じゃないですか？」

「ええそつね。だから相手が勝手に名前をつけるの

「あだ名つてこつ」と…」

そつそつと淡藤局は頷いた。

「でもね、貴方は特別。紅の鬼様から『えられた名前だからね。  
今みたいに見慣れない妖に名を教えてはダメ。

その名を使って悪さをされるかもしれないわ』

「悪さ？」

「そつよ。その名をつけた紅い鬼様も、『えられた貴方にも害が及  
ぶかもしない。だから教えたり、話したりしないよ』

そんな大事なことなんで鬼達は教えてくれなかつたんだろう。

子鬼はそんな私の視線を感じたのか、ジロリにらみ返してきた。

「どちらにしろ」トイツには外出禁止令が出ている。

他の妖怪どもに会つことないし、紅い鬼様に使えている我らは皆、名を訊いたりはせんからな」

「でも」の年頃の子はなんでも知りたがるものよ。隠せば隠すほど気になつてしまふから……ねえ？」

光沢のある体を斜めにさせて、彼女は声でこちらに笑いかけた。この淡藤局さんはなんだか茶目っ氣がある。

大人の女性という氣がしてなんだか憧れちゃうな。

……あれ？ でも待つて。

「あの、それだけじゃないんでしょう？」

私の発言に子鬼と淡藤局が顔を見合わせる。姿勢を正して二人に向き直った。

「前に紅い鬼は本名を名乗っちゃいけないって言つてたけれど、今みたいな理由なら隠す必要はないよね？」

だつて、別に紅い鬼に何か不利な事が起つるわけじゃないんだし」

「紅い鬼様だ！ 様つける！」

いいか？ お前はあの紅い鬼様の物なんだ。頭のてっぺんからつま先まで。

なににお前の本名を他の者が

そこまで言つて『しまつた』と子鬼が口を押さえた。

「な、なに？」

思わず前かがみになつて子鬼に詰め寄る。  
小さな頭が左右に揺れるのを見て、両手で縁の肩を掴み激しく揺  
わぶつた。

「おーしーえーでーよーー！」

「や、やめんかあ！ 頭、頭が揺れるつ」

「せひせひ」

淡藤局が間に入つてきたので私は手を止めた。

放された子鬼の目はグルグルと回つて足元もおぼつかない。

「私たちが教えられるのはここまでよ。

これ以上はお叱りを受けてしまつからね。貴方もただじやすまない  
わ」

優しい声でたしなめられ、これ以上何も言えなくなつてしまつ。

「こつか紅い鬼様が直接お話しになられるわ。

もう少し先の話になると思つけれど。

いまちよつと面倒なことになつてゐるみたいだから

「淡藤局さんは……鬼が何を隠してゐるのか知つてゐるの？」

「ええ」

呟いて黙った。

私は淡藤局さんが無い田を伏せた気がして、綺麗な淡い藤色が哀しげに映った。

「これからずっとここに留まる事になるんだから、仲良くなっちゃうね」

まるで独り言のように小さな声で囁く。

「それに焦る必要は無いわ。急いで知る必要なんて無いんだから」

「でも」

「逃げるわけではないんだから」

「え？」

一瞬沈黙する。

見られているわけではないのに、視線が田の前の急須から逸らせない。

長い沈黙のあと、子鬼が私たちを見比べている中、淡藤局さんはふふっと笑つた。

「答えは逃げなにして事よ」

「あ、ああ……。うう、ううですね」

「わざ、お喋りせぬ終い。もつ寝たまつがいいわ。お肌にも良くないしね」

そう言つて淡藤局さんは子鬼のところへ行き、子鬼は丁寧に彼女を抱えると最初来た時と同じように木箱の中へ閉まつた。ふたが閉じられる直前、彼女がおやすみなさいと囁く。

「おやすみなさい」

私も返して、また天井裏へと消えていく子鬼達を見送つた。

## 第十六怪 紫煙漂ひ

「お前知っているか?」

子鬼が淡藤局に問いかけた。

「人間んどこには、遠く離れたやつとでも話が出来る板があつてな。念波を使つて話せるらしい」

「おや。まだ神通力を使える人間が沢山残つているのね。それは知らなかつたわ」

「それ、念波じゃなくて……電波だよ」

「……。

「じゃあ、真夜中だらうが真昼だらうが開いている店を知つてingか? なんでも揃つていてな。その名も『根氣元』って言つらいいぞ」

「なんとまあ。

なぜそのような風変わりな名をしているのかしら」

「そりや、根氣に商売しているからだ」

「い、『根氣元』じゃなくて、コンビニ……」

「ああ、もう、だめ!..」

私は今までこらえていたものを、ぶはつと噴出した。

あーおかしい！

子鬼の持つている人の世界の情報が、いちいちおかしくて仕方が  
ない！ おかしそぎる！

笑い転げる私に子鬼が憤慨の声を上げる。

「やかましい！ 俺は他の奴等から聞いたまでだ！」

「あはは、そう、そうなんだ」

ふ、腹筋が痛い！

こんなに笑つたのは本当に久しぶり。

「じばらく音無しの時間に起きて、子鬼と淡藤局さんとの三人  
でずつと雑談していた。もっぱら話題になるのはこの物の怪の世界  
と、人の世界についてだった。とは言つても、私は紅い鬼から人の  
世界の話することを禁止されているし、この世界を知らないので  
聞き役にしかならないのだけれど。

子鬼達の話では、私が今いる世界は常闇じいやみと呼ばれる闇の空間。と  
ても広くて限りが無いのだけれど、住む場所には限りがあるらしい。  
そこで妖怪やら物の怪が集まり、住みやすい土地を作りあげたら  
しい。

「でも驚いた。まだ妖怪とかが私達の世界に来てたりするんだね」

「昔と違つてお上からの許しが出ないと基本的に行けなくなつたみ  
たいだがな」

「なんで？」

「住処や戻る場所がなくなつた奴等がこの常闇に来て、均等が崩れ

たのぞ」

「きんとうへ。」

「えーっと『ばらんす』 つてやつだ。

ま、それで今までなかつた常闇の勢力争いや縛張り、小競り合いなんかの問題が増えたんだ。それで人間の世界じや今まで睨みを利かせていた妖怪なんかがいないせいで、そこでいがみ合つている奴とばつたり遭遇。そして大揉め。下手すりや殺し合いだ」

「うわ、なんだかす」ことになつていてるんだ。

「戦国時代の話みたい。

でもなんだかややこしいなあ。

「えつと、ようするに、常闇でケンカしている相手がいて、その相手と仲裁者のいなくなつた人の世界で、思いがけず出会つてしまつと、そこで最悪大喧嘩してしまつから、偉い人の許可が必要。こういふこと?」

いまいち分からなかつたので、自分なりの解釈を子鬼に話してみる。子鬼が頷いて『俺の説明が良かつた』と一人満足げだ。

ほんと、自惚れ屋さんなんだから。

「あつ

突然、淡藤局さんが声を上げた。

そして子鬼も素早く顔を上げ、あたりを注意深く見回すと顔をひきつらせた。

「な、なに?」

二人のただならぬ様子に、びくびくする。

「紅い鬼様だ」

さつと顔が青ざめる。

顎がわなわなと震え始め、鼓動も早くなる。  
なんで？

なんでこの時間帯にあの鬼が来てるの？

「今日はここまでのような。私たちがいては邪魔だわ」

淡藤局さんが小さく言つと、子鬼もそれを合図に彼女を手に取つた。

「待つて！」

子鬼の小さな肩を掴み、引き止める。

「一人にしないで……」

さつきまで大きな声で笑っていたのが嘘のよつた、情けない声で子鬼達に懇願する。

子鬼は左右の手をきょろきょろと動かしたが、するりと私の手を離れ、『すまん』と呟き、天井へと逃げるよつに行ってしまった。

一人取り残され、しばらく緊張の糸を張つていろと、むせる様な香りに鼻腔をくすぐられ、くしゃみが出た。

なんだろう？煙草のよつなおいがする。

鼻をすすりながら匂いの元を捜すと、それは襖の向こうから漂つてきているみたい。小さな隙間から奇妙な帯が空中を漂い、薄暗い部屋の中をさ迷つている。

「具合はどうだ？ 鈴音」

紫煙の元から紅い声が掛かる。

私はびくりと一切の動きを止めた。口を真一文字に結んで恐る恐る紫煙が漏れている隙間を凝視する。

蜘蛛に襲われた一件からというもの、私は鬼と関わるのがより嫌になつていた。そしてそれと同時に、より恐ろしく、理解しがたい存在だと感じていた。

「まだ、良くないです」

私は蚊の鳴くような声で嘘を吐いた。  
掛け布団を引っ掴んで頭までかぶり、膝を抱えてぎゅっと目を瞑る。

とにかく今は鬼に会いたくなかった。

間もなく静かに襖が開く音が聞こえる。

私は身体を小さくしながら、自分のいやに響く心臓の音を聞いていた。その音が緊張の糸をさらに張り詰めさせた。  
だんだん畳を踏む音が近くなり、私の真横まで来ると、布が擦れる音と静かに座る様子が耳に聞こえて来た。

「どうした？ なんで布団など被つているの力ナ？」

布団を通してぐもつた紅い声が聞こえる。

「ひらりの返答を待たずに鬼はかまわず明るい口調で私に声をかけ  
てきた。

「安心しろ鈴音。お前が良い子にしているんなら、とつて喰いや  
ないし、死なせたりもせん」

「……」

「約束は守つてやるう力ナ」

ふうーっと息を吐く音が耳に入る。  
やつぱり鬼の考えている事はよく分からぬ。

そんなふうに言つのなら、何故あんな酷い目に遭わせたんだろう。  
外に出したくないにしても、もつと他にやり方があつたんじゃない  
のかな？ あれじや、トラウマになつちやうよ。

お互に黙つたまま刻々と時間が過ぎた頃、おもむろに鬼は声をか  
けてきた。

「なあ、鈴音」

耳をそばだてて次の言葉に構えた。

しかし声をかけたきり鬼は何も話さない。

暫く間があつたので、思わず布団から覗こつかと思つたとき『い  
や、やはり良い』と投げやりな言葉が耳に入つてきました。  
鬼が躊躇つなんて珍しい。

「なんですか？」

好奇心も後押しして思わず訊いてしまう。  
するとちよつと間を空けてから鬼は口を開いた。

「お前の人のお名の事なんだがナア。鈴音は覚えているんだろう?..」

人の名前? 私の『紗枝』という本名のことだらうか。  
とりあえず『はい』と返事をする。

「リリに来る前の記憶も力?..」

「……? はい、覚えてます」

なんでもまた、そんなことを聞くんだろう。まるで私が記憶喪失に  
でもなったか確かめているようだ。

とりあえずまた『はい』と返事をすると鬼は再度黙り込み、なん  
どか紫煙を溜め息のように深く吐いて、何かにトントンと指を鳴ら  
している音が響いた。

鬼の反応に目を瞬かせて黙つてしまつ。

なんだかもやもやする。

言いたいことがあるならハツキリ言つて欲しい。  
気になるじゃない。

私は焦れてしまい、我慢できなくなつて鬼にたずねた。

「あの、なんで名前にこだわるんですか?..」

「……」

返事はなかつた。何の音も返つてこない。  
聞こえなかつたのかな。

「友達は……無事帰つたんでしょうか」

話題を変えて、ちよつと大きめの声で訊いてみる。  
やはり返事はない。

もしかして聞いてない、といつより無視してる?  
気持少しだけ布団をめぐり、鬼の様子を伺つ。

すると突然、母親がなかなか起きない子供の布団を『早く起きな  
さい!』とでもやるかのように思い切り引き剥がされた。

突如露になつた身体を反射的に丸めて顔を赤くする。

なんで急に掛け布団をはがされると恥ずかしいんだらう。そう思  
うのは私だけかな。

まあ、そんなことはどうでも良くて、慌てて身体を起こして素早  
く身構えた。

「なんだ。ずいぶん元気そうじやない力」

「な、何をするんですか?」

布団を片手に、鬼は笑みを浮かべながら、すぐ脇であぐらをかい  
ていた。そして鬼が面白そうにこちらを呼び指したので、それが乱  
れている浴衣を指していることに気がつき、慌てて整える。

「それだけ動けるなら、もう大丈夫だらう」

布団が畳の上に無造作に投げられ、紅い手は私の腕を掴んだ。  
ゆつたりとしだ動作だが有無を言わせない力に引っ張られる。

「さあ、鈴音。籠にもどれ。

さつま部屋が片付いたんだ。もういいじ居なくて良い」

「ちょっと待つて下さい！」

足を突つ張つて踏みとどまつた。あんなところに戻るなんてもう嫌。逃げることも歩くことも出来い場所になんて一度と行きたくない！ なんとかして時間を引き伸ばさないと。

「鬼さんは何か、隠しているんじゃないですか！？」

「は？」

しまつた！

「こんな単刀直入に切り出すつもりじゃなかつたのに言つてしまつた。

馬鹿だ。私は大馬鹿だ！

紅い鬼は二つの紅を見開き何度も瞬かせたが、すぐに笑い出した。私の腕を放し、腹を抱えて笑っている。ワケが分からず立ち尽くしている私に鬼は目を細めた。それはどこか嘲つたような残虐性のある眼差し。

「何を言つ出すのかと思えバ。俺が隠し事をしているつて？」

「いえ、その……」

「もーじもー」と濁して私は俯き、淡藤局さん達の話をするわけにもいかないし、なんて言いワケすればいいのか分からず焦つた。しかし鬼から発せられた次の言葉は意外なものだった。

「まあ確かに隠してはいる」

今度は私が目を見開く番だった。

あつせつと言つた鬼を信じられないと驚いて顔を上げ、『じゃあそれつて』と言いかける。

「が、お前さんが望んでいるやつなもののじゃない力ナ

「え？」

名前の話じやないの？ と訝しい顔をする私に、鬼は開けていた紅い口を閉じるとこいつと両端を吊つ上げた。

「鈴音。お前、本当は約束を破つて逃げたいんだろう？」

思わぬ言葉に心臓が強く鳴つた。

予想していなかつたことに頭が真つ白になる。

意味が分からないと鬼の顔を探るよつに見つめ、つぶしたえた。

「今まで言わなければ分からぬのかナ？」

鬼はクッと喉で笑い、目をさらに細める。

「自分が犠牲になつて契約をしたことを本当は後悔してゐるんだが、やだ、なんで動搖してゐるんだがう私。

「うひー。」

言葉が詰まつた。

そして自分のそんな反応に驚く。

腕組をして鬼が一步踏み出し、私も反射的に一步後退する。

やだ、なんで動搖してゐるんだがう私。

言い返そつと口を開くが、言葉が出てこない。

「だから俺の隠してゐる事を知りたいんだが？」

無意識にぎゅっと胸の前で拳を作る。そこで自分が肩で息をしていりに初めて気がつき、心臓はひどく早鐘を打ち鳴らしていた。

「俺の隠している事」をが帰る為の唯一の逃げ道だと。やつ思つているんだ口ウ？」

逃げ道。その言葉をきいて微かに頭を左右に振り、否定する。一瞬頭の中を、また嫌なものが霞めて血の気が引いた。

鬼は片方の眉を吊り上げて嘲るように鼻で笑つた。

「なんだ。自分で分かつていらないみたいだナア。なら教えてやうつ力？」

その先は聞きたくない。

私の制止の動作を無視して、鬼は早口にまくし立てた。

「お前は友を返せたと喜んでいるがそれは一瞬で、もうすでに後悔している。

しかし、それを受け入れられないお前は、俺が隠し事をしていると気が付つくと、すぐさまそれを逃がした奴等と関係があると思い込んだ。

だが、本当に思い込んでいるのは、自分が逃げるための何かだったんじゃないのか？」

「 」

「もつと分かりやすくなつてやうつ力？」

必死で首を横に振る私を面白そうに眺め、鬼は腕組を解いて、ま

るで勝利宣言でもしてこぬまい、高らかに言い放った。

「お前は後悔していないと思つてゐるが、いやいや……それは嘘力ナ。

お前は本当は後悔している。自分が犠牲になつたことをナア！」

違つ。

「友を思つぶりをして、本当は自分が逃げる道を探してゐる」

やめて。

「その浅ましさに田を背けて自分を騙してゐるんだろ？」

やめて。

「団星か？鈴音え」

「やめてー！」

両手で耳を塞いで絶叫した。

その場につづくまゝ、膝に顔をつづめて涙を落とす。

やめて……

やめて……

何度も頭を掠めた考え。

そのたびに振り払つてきたけれど、まさか鬼に言われるだなんて。こんな形でまた突きつけられるだなんて。

「可哀想にナア 鈴音。苦しいだろ？？」

もう聞きたくない。

これ以上聞きたくない。

なのに紅い声は塞いだ耳に直接響いてくる。

「俺がその苦しさから助けてやろうか？」

耳を塞いだ手の上に鬼の大きな手が重なる。  
ゆつくつと顔を向けさせられると、そこには残酷な優しい紅い笑  
み。

「お前に帰り道なんぞ、無い。

俺との契約は破れない。

苦しむだけ無駄力ナ」

## 第十七怪 真つ赤な嘘

鬼にはつきりと指摘された。

自分が今まで田をそらし、否定してきたことを。

籠の中で布団も敷かず、四肢を投げ出す。

蠟燭の火を消されたようになんとも虚しい雰囲気が自分を包んでいた。

友を思っている振りをして

本当は自分が逃げる道を探していたんだろう

契約を破つて家に帰りたかったんだろう

呪いが掛かつたかのように、何度も何度も鬼の言葉がこだまする。目頭が熱い。

泣きすぎたせいかな。頭がガンガンする。

頭も視界もぼやけ、疲れきった心に普段払い退けていたものが忍び足でやってきて、耳元で囁く。

鬼の言うことは腹立たしいくらい当たつている。

私は逃げたかった。

紅い鬼との約束を破つて。

後悔なんてしていないと、何度も自分に言い聞かせて、自分の本心を黙らせようと必死になつていた。

でも本当は後悔していたんだ。

自分で決めてくせに、なんでこんな目に遭わなくちゃいけないんだろうつて、思つている自分が居たんだ。

そう、自分を支えていたものは真つ赤な嘘。

友達に何かあつただなんて心配する振り。  
後悔なんてしていないと英雄気取りの振り。  
保身のために鬼と仲良くする振り。

目尻から熱いものが零れる。

重い両手で顔を覆うと、関を切つたように、またとめどなく涙が溢ってきた。

きつく結んだ口からは途切れ途切れに、嗚咽が漏れる。

私は最低だ。

最低の人間だ。

妖怪よりも浅ましい。

卑劣な存在なんだ。

「おーい」

天井裏から声をかけられた。

意識は鈍く反応したが、視線をそちらに移す事はしなかった。な

んだが、それすら気力の要る作業に感じて、億劫に思えた。

乾いた音を立てて子鬼が籠の向こうに降り立つ気配がする。交差

した腕の隙間から見える視界の端に、小さな縁が映る。

「おい、大丈夫か？」

籠に触れる音と同時に子鬼の声が向けられる。

「なあなあ。お前もさ、元気出せよ。

良かつたじやないか。紅い鬼様に気に入られたみたいで」

私は黙っていた。

今は何も話したくない。

「だつてよ、あの『鬼食い』の異名を持つ鬼様に御執心されているんだぜ？ 名誉なことじやないか」

名誉？

一体何が？

「邪な考えなんて誰しも持ち合わせていいもんだ。

なんでそんなに塞ぎ込んじまうのか俺には理解できん」

「お願い……一人にして」

喉の奥から声を絞り出す。

カラカラに乾いて掠れた声。

そのままの声すらも頭に響いて痛みが広がる。

「なんだつてそんなに気落ちしてんだ？  
逃げられないことにか？ それとも」

「やめてっ！」

叫んだ。

もう何も聞きたくない。

誰の言葉も耳に入れたくない。

「怒鳴つてごめん……でもお願い。今は一人にして欲しいの」

籠の外で小さく息を吐いた音が聞こえた。

それからしばらくすると、また部屋は静寂に包まれた。

今まで張り詰めていたものがあっけなく切られてしまつたみたい。私はその後も起き上がるこどが出来なかつた。籠で息を詰めていたときは比べ物にならない虚ろが私を蝕んでいる。

私はこれからどうなるんだろう。

どうするんだろう。

それすらも、今となつてはどうでもよく思えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私はずっとふせつていた。

なにをする氣も起こらず、ひたすら横になり続けた。

時折、子鬼や淡藤局が来て声をかけてくれたこともあつたけれど、どうしても話をする氣になれなかつた。

頭の中は深い霧がたちこみ霞んでいて何も考えられない。ただ、ふとした時に鬼の言葉がしつこく私を責め続けた。

まるで言葉の拷問。

意識がはつきりする間もなく、紅い言葉が私を蝕む。

それが終われば、今度は自責の言葉が容赦なく襲い掛かる。

ヤクソクラヤブツテ

嘘吐き

トモラオモウフコ

偽善者

ホントウハニゲタイ

卑怯者

ずっとその繰り返し。

食事をする時も、寝る時も、体を洗う時も、ずっと幽霊のようすり、もう覚えられなくなっていた。今この瞬間ですり、すぐに煙のようすに消えてしまっている。

記憶の変わりに残るのは自身を呪う言葉だけ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「鈴音」

籠の外から声をかけられる。

「 今日も飯を抜かす気か?」

食事?

そんな事いつしてた?

それとも、いつからしていなかつたんだっけ?

籠がしなる音が聞こえる。

鬼が籠の中に入ってきたようで、すぐそばで置を踏む音が聞こえた。

「おい。いい加減食べたらどうだ？」

私は返事をしなかつた。  
なんだかどうでもよかつた。

鬼の『喰つてやる』という齧しを聞いてもなにも感じなかつたし、鋭い牙も爪も、全くといっていいほど恐怖心を呼び起させなかつた。自分の心になにが起つたのか知る事もえ、今の私には面倒に思えた。

何もかもどうでもいいの。  
ひどく氣だるくて、仕方がない。  
食べるなら勝手にして欲しい。

「お前ナア、意地を張つてたつて仕方ないと思つゾ？  
そんなに己の醜さに落胆したのカ？」

分からぬ。

声に出さず、心の中で呟く。  
今の私は空っぽだ。  
悲しくも嬉しくもない。  
心が凍つたみたいに動かない。  
一体どうしたつて言つんだろ？  
でもそんなことはどうでも良い。  
どうでも良いのだ。

紅い腕が私に伸びる。

まるでテレビ画面をみているような、他人事みたいに映る視界。

鮮やかな鬼の大きな手も、今は白黒。無抵抗な身体はそれに掴まれ、ゆるりと起こされる。

熱が出たようじてぐつたりとする身体。

今のは、頭も心もお腹も空っぽ。

振ればからころと音が鳴るんじゃないのかな。

そんな考えに笑みが零れた気がしたけれども、生憎私の顔の筋肉は反応しなかった。

ゆらゆらと揺り籠のようにつるれる私。

どうやら紅い鬼が赤ん坊を抱くように、私を抱きかかえて、揺らしているみたいだ。それにどんな意味があるのか分からないし、やはり興味は沸かなかつた。

紅い鬼は怒つても笑つても居ないけれど、どこか寂しげに見える。きつとそれは空っぽな私の気のせいだわ。

空っぽだから、そう見えるんだ。

「鈴音。どうだ取り引きしないか?」

のぞき込むように紅い視線を私に落としあもむろに鬼は言った。

「お前の本当の名前。それを俺によこせ!」

……名前を?

私の紗枝という名前を鬼に?

でも、どうして?

「名前を名乗り、俺に渡すと告げや」

名前を渡す？

私の声にならなかつた言葉に、一つの紅がゆらりと動き、頷いた。

「そしたらお前を守つてやうつ。

外にも連れ出してやうつ。俺の創り上げた街だ。

欲望と快楽を満たすこの上ない街力ナ」

潜めて、耳元で囁かれる。

自分のカラカラに乾いた喉が動くのを感じる。

しかし声は出ない。

鬼は紅い声でまた私に囁く。

「名を名乗れ」

樂になりたい。

樂になりたい。

辛いのはもう嫌だ。

でも、だけど……。

「どうした？ 樂になりたいんだ口ウ？」

ボヤケる視界に細い深紅の瞳。  
炎のように揺らめく妖しい紅。

「鈴音。俺は」

「きこつ……」

そのとき、激しく襖を叩く音と同時に子鬼の叫ぶような鳴き声が部屋に飛び込んできた。

紅い鬼が睨みつけたんだろう。一瞬息を呑んだような音がしたが、すぐに持ち直してしきりに何かを叫んでいる。

「ああ、来たか」

すつと紅い陰が動いた。

そして何か子鬼に指示をだしている。

何を言っているか分からぬ。しかし例え聞こえたとしても、私は聞く気にならなかつただろう。

鬼は私を畳まれた布団に頭を預けるように寝かし、額を撫でる。ふと、鬼が籠を出るときに少し立ち止まつた。視線を感じちょっとした沈黙が流れたが、紅い鬼はそのまま何も言わず部屋を出ていつた。

## 第十八怪 白晝夢

何の音も届かない耳。

田を閉じて視界に映るものも拒絶する。

心の闇が広がり、意識もそこに呑まれていく。

深く、深く。

「ふぜけんなよー、全部お前のせいだぞー！」

「やめなよー、これは事故でしょー！」

闇の中、怒鳴りあう陽炎が五つ。  
どこかで見た光景。

そつと田を見開き、また田を閉じる。  
開けても閉じても同じ光景が見える。

「でも、一体どうなつてこるの？　ヒーヒーヒー」

「分からぬ」

鈍い光が人の形になつて闇の中ではずくまつてゐる。

次々に輪郭がハツキリしてくる。  
見覚えのある顔、顔、顔。

「これからどうなるのかな……」

「「めんね、紗枝ちゃん」

「ううん。大丈夫だよ。かならず一緒に帰ろうね！」

五つの光が揺らめき、煙に変わる。混ざつて一つになり、今度は大小二つの影を作ると、鬼と少女の形をなしていく。

「ずいぶんお前は威勢がいいナア。

どうだ？ 僕と取引をしないか？」

「と、取引？」

「ああ。お前がここに一人残るんなら、ほかの奴らを帰してやっても良いゾ」

「私を？ 私一人残れば、みんなを帰してくれるの？」

「そうだ」

「わ、私一人で良ければ。うん。分かった。こ、ここに残ります」

「そうか。分かった」

ふつと風に吹かれたように流される光。

くるくると、つむじ風のように回って、また五つの人影を作り上げていく。

「なあ、鍵。開いているぞ」

「なんで？ 閉め忘れ？」

「罠かもしれないわ」

「でも今しかなこよー。今の「ひ」に逃げよ「ひ」。」

「ああ、なんだ。」

「座敷牢から逃げ出してきた時の場面だ。そう、そこからみんなで逃げ出したんだよね。」

「ねえ、ばれけやひよ。」

「あー、その扉に入れひー。」

「鍵かかってるー。」

「じつじよひー。」

「あー、もしかして、それ鍵じやない?。」

「でも、なんでこなとこひ落がてるの?。」

「なんでもいいよー。それ使えー。」

「あ……。開いた」

「馬鹿だなあ、扉の前で鍵落とすなんてよ。」

思わず鼻で笑つてしまつ。

馬鹿は私たちなのに。

紅い鬼がみてるなんて知らずに。

「誰もいないね」

「大広間で宴会やつているみたい。さつきあの子鬼が言つてた

「え！ みつちゃん鬼の言葉が分かるの？」

「紗枝ちゃんは分からなかつたの？」

そういうえばみつちゃんは、音無しの時間帯でもないのに、鬼の言葉が分かっていたみたいだつた。靈感があるようなことも、小学校の時に話してくれてたけれど、あまりそれについては話したがらなかつたから、ずっと忘れていた。

もしかして、だから鬼を呼び出すことができたのかな。

五つの光が氷の上を滑るように流れる。  
必死で駆け抜ける人影たち。

「ねえ、あそこ」

「門番のくせに寝てやがる

「静かに。起こさないよつにね」

闇の中からまた別の光が湧き出ると、瞬時に大きな扉を形作る。私たちが吸い込まれた扉。ここへ連れて行かれたときに通つた大きな扉。

「やった！ この扉の扉だ！ 帰れるぞー。」

「や、追っ手が来る前に行ひー。」

古の扉のむかひには、ここへくる前の薄暗い木々が広がっていた。我先にと駆け込む男子。そのあとを追いかける他のクラスの女子。

「や、みっちゃん行ひー。」

「ひと……」

「どうしたの？」

「……紗枝ちゃん、『めんね』

「もう、気にしないでつたり。悪い夢だつたと思つて帰つよ

「……うん」

私の影が彼女の影を押す。

そして彼女が扉の向こうへ足を踏み入れ、私も扉へと近づいた。

「どこへ行くつもりカナ？」

扉に手をかけた私の影が凍つた表情で振り返る。大きな紅い目をした影がニヤリと笑い、振り返った私を包み込み、闇の向こうへと消えた。

気持ちよび開いた扉。そこから小さな顔が覗いている。

「みつちゃん……」

彼女の凍つた顔が見える。

光は惜しむように、徐々に徐々に暗闇に溶けていく。

最後に怖い思いをさせちゃっていたんだね。

「ごめんね……みつちゃん。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

真つ暗闇の中に、幽靈のように人魂が浮かび上がる。  
黄色い、淡い光が私を照らしている。

これは夢なのかな。

それとも幻なのかな。

さつきの光景もこの人魂が見せたのかな。

でも、これを今更私に見せて、どうしろというの？

もうあの頃みたいに、動く気力も生きる気力も、今の私にはない  
といつのに。

## 第十九怪 金色の来訪者

灯籠とは違う明かりがまぶたを照らす。

うつすらと目を開くと籠の向こうに黄色い人魂。優しげな光を放っているのにどこか儂げだった。

人魂は籠のそばに近寄り、しばらく宙に浮いたまま微動だにしなかつたが、私が上体を起こすと籠へとゆっくり移動した。私を誘っているんだろうか。

籠の入り口に近づく。

紅い鬼が鍵をかけ忘れたんだろうか。出入り口は空いていた。白い格子を潜り、籠から出ると、陽炎のように揺らめいている人魂に近づいた。

それは音も立てず、吸い込まれるように籠の向こうへと消えていく。

私は襖の取つ手に手をかけ、横へと襖を開けた。一切の光も射さない闇がそこには広がっていた。

その中をコラコラ黄色い灯が私を誘うように、足下を照らしながら闇の中を進んでいく。私は空っぽの気持ちでその後をついていった。

た。

長い長い廊下を黄色の人魂と進んでいく。

いくつかの角を曲がり、まっすぐ進んだかと思ったら、また右へ左へと曲がり角を歩いていく。

どこに連れて行く気なんだろう。

漠然としつつも小首を傾げる。

しばらく進むと、狭い廊下に差し掛かり、膝丈の觀音開きの扉の

前で人魂は止まつた。そしてまた、その奥へと消えていく。私はしやがみ込み、両手でその扉を開いた。

湿気を含んだ空気が頬を掠め、鼻を突いた。目を細めて凝視すれば、そこはひどく狭い物置のようだつた。大小様々な箱が置かれてあり、人魂の光に照らされて幾つもの陰が私を囲んでいた。

「一体どうこうおつもりか」

小さな部屋に響く声。どこから聞こえているのか分からず、目を閉じて耳を澄ます。

まぶたに人魂の黄色い光を感じる。誰かが話をしている声が聞こえてくる。聞き入るうちに、だんだん覚醒してくる感覚。夢から覚めていくような、自分に憑いていた何かが波のように引いていく。ずっと私を照らしていた人魂は、何かを悟つたように大きく揺らめくと、私がはつきり意識を呼び覚ましたときには、その花のように黄色い火を小さくさせて萎んで消えてしまった。

今のは一体何だつたんだろう。

「少しば落ち着け。土蜘蛛」

はつとして身を手近な置物に潜める。

人魂のことも気になるけれど、今はそれどころじゃない。どこから声が聞こえるのか分からない。

キヨロキヨロと見回すと、ふと、暗闇に一筋の光が床に小さな円を作っていた。辺りを警戒しながらその落とされている光に近寄る。その光の筋をたどると、壁に小さな穴があいていた。のぞき穴かな?どこの部屋なんだろう。

片目を閉じ、息を潜めてのぞき込んだ。

「何故、そのようにゆるりとされているのか。紅い鬼殿が飼われている人の子が襲われたのですぞ！ これでは矜持に関わる事ではないのか？」

広い豪華な部屋に寝そべる紅い鬼と、隅に控える緑の子鬼たち。そして、もう一人。部屋の中央に見慣れない人影があつた。黒い胸当てに虎の腰巻き。金色の獣の耳が左右に設えてある兜を被つて、厳めしい顔を紅い鬼に向け、仁王立ちしている。

「ずいぶんと耳にするのが早いなあ。群から追い出されているクセに」

「ふん、それが我ら蜘蛛の強みよ。そんなことより襲つた輩は分かつているはず！ 何故、討伐に向かわれない？」

「討伐……と？」

私を襲つた蜘蛛のことかな？

狭い視界から二人の物の怪の顔を交互に見比べる。どうやらあの虎の腰巻きをしている妖怪と思わしき人物は私を襲つた蜘蛛のことを知つているみたい。

紅い鬼の態度にイライラしているのか、蜘蛛の人人が声を荒げた。

「そうだ！ その輩は人の子を飼つて間もなく紅い鬼殿に会つている。そう、女郎蜘蛛の奴よ！」

あ……あの時の女人？

この世界に残ると決めた日。私を見て美味しそうだと笑つた遊女。今思い出してもあの黄色くくすんだ目を思い出しだけで身震いする。あの女人が私を襲つたつていうの？

「女郎蜘蛛ねえ」

「間違いなどない。紅い鬼殿も知つていただろつー。女郎蜘蛛が風呂でうたた寝していた人の子に手を掛けようとしたことは、烏天狗からも知らせが届いているはず」

嘘……。

その時から、ずっと、狙われていたの？  
力が抜けて壁にぶつかりそうになり、慌てて体制を立て直す。今  
気づかれたら逃げられない。なるべく静かにしておかないと。  
気を取り直し、また小さな穴をのぞき込んだ。

「なるほどナア」

「こまこそ女郎蜘蛛共を根絶やしにすべき。貪欲の鬼にまでこのよ  
うな無礼千万を起こすなど狂氣の沙汰ぞ！」

「まあまあ、そう熱くなるナ」

紅い手がヒラヒラと蝶が羽ばたくように踊る。  
それを見て蜘蛛の人人が一步鬼に近寄り

「何故動かぬ！ それでも『鬼喰い』と云われた鬼ではないのか！  
虚仮にされたのだぞ！」

そう怒鳴り散らした。

ちらつと紅い鬼へ視線を移す。  
鬼は相変わらず寝そべつたままニヤニヤしていた。 一体何を考え  
ているんだろう。

「何故動かないって？」

ゆったりと体を起こし、顎に手を当て目を細める。

「そりゃあ、知ってるからや」

すっと長い指を目の前の金色に向け、口の端を釣り上げた。

「お前があれを襲つた当人だからヨ」

長い沈黙が流れた。

誰も微動だにせず、ただただ時が流れた。

そんな重苦しい空気を破つたのは蜘蛛の笑い声だった。

「なにを馬鹿げた事を！ 腹が痛くなるではないか！」

「ほつ、 そاعかい」

「ああ、 まったくだ。 一体なぜ私が襲わねばならない。 私が人の子を襲うのにいつたい何の利益があるというのだ。 しかも貪欲の鬼の物を」

「もちろん、 ただ闇雲に言つてはないサ。 おい」

「……何のつもりだ？」

紅い鬼のそばの襖が開かれ、髪の長い、女の子がしずしずと入ってきた。綺麗な朱色の着物に包まれた彼女は紅い鬼のそばに座り、

「「つと微笑んだ。

あの子は誰だらう?

見たところ私と同じ年みたいだけれど。

「襲われた時、鈴音がお前を見たといつんだが。なあ、鈴音」

思わず『えつ』と声を漏らしてしまつ。

鬼の言葉に、彼女は呼ばれた名前通りの鈴の音のような可愛らしい声で『はい』と応えた。

「何を馬鹿な。嘘を申すな」

「いえ。私は確かに見ました。あの恐ろしい出来事を鮮明に覚えております。あの思い出すのもおぞましい光景の中、土蜘蛛様の姿を捉えました」

きつぱつと蜘蛛へ言つ。

「紅い鬼殿、何を考えておる? こんな偽者を使つとは」

「偽だと?」

「ああ。鈴音殿は死んだハズ。こいつは偽だ!」

紅い鬼はこれ以上内ほど笑みを深くして大笑いした。

「なぜお前がこいつを偽者だと知つているのだ?」

「そ、それは子鬼共が死んだと噂していたのを耳にしたまで……」

「ほほつ」

「それにだ。私には襲う必要がないと先ほど言つたハズだろつ。何故紅い鬼殿を敵に回すようなことをせねばならんのだ」

「はん。どーせ、女郎蜘蛛とのいぢりを俺に尻拭いさせるつもりで、女郎の子蜘蛛をけしかけたんだろう。そうすれば、あいつを直接襲つた子蜘蛛みて、女郎蜘蛛が襲わせたと思うはずだからナ」

ぎりりと歯を食いしばる蜘蛛。白目の部分がかすんだ黄色に変わり、紅い鬼を見る目は危険な炎が燃えている。

「馬鹿なことを…」

「それに、女郎蜘蛛が来たと言つたが、あれはお前だろ」

「……なんだと？」

「女郎蜘蛛に化けて、これから襲うと匂わせる。そんな魂胆だったんだろ？ 風呂場の件もわざと他の奴等に見えるようにして」

「……」

「だが、間抜けだナア。気付かなかつたのか？」

女郎蜘蛛は白目は黄色にならんのだよ。お前は自分の習性も知らんのか？ それにお前は子鬼共が噂してゐるなんて言つたが、子鬼がそれを言つるのは可笑しな話ダ。あいつは死んでいない

紅い鬼はこれ以上ないほど意地の悪い笑みを浮かべてニヤリ笑つた。背筋が凍るような、狂喜の光がその妖しい紅の中に溢れていた。

蜘蛛のほうはとこりと、紅い鬼にと回じよつて黄色い田を爛々と燃  
やし始めていた。

「お前の思惑は外れ力ナ」

## 第一十怪 茶番劇

えつと、ちよつと待つて。  
頭がこんがらがつて……一度話をまとめてみよう。

あの男の人は土蜘蛛の妖怪で、いがみ合っていた女郎蜘蛛を邪魔だから潰そうと考えていた。そこで、紅い鬼が私を飼うと知つて、自分が女郎蜘蛛に成り代わり、私を襲うことで紅い鬼の怒りを買わせて、女郎蜘蛛を根絶やしにしてもらおうと考えた。

で、お風呂場で私を襲つて、目撃者を作る。

今度は私が寝ている時に再度襲つた。でも既に紅い鬼に見破られていて、結果的に失敗。今に至ると。大体こういうことかな。

正直まだピンとこないし、分からぬことだらけだけど、土蜘蛛の計画はつましいかなかつた事と、私を襲つたのはあの男の人だつてことは確かみたい。

のぞき穴からまた息を潜め、片目で紅い鬼と土蜘蛛の表情を見比べる。

「おのれ……」

土蜘蛛の目は濃いくすんだ黄色に染まり、体中を震わせている。その気迫に私は壁の向こうで縮み上がり、ようやく気づいた。

あの黄色い目。私を睨んだ目と同じ色をしている。紅い鬼が言うことが本当なら、やはりこの人間の姿をした人物が、私を襲つた物の怪なんだ。

「ばつかだナア。なんて茶番だ！ 間抜けにも程がある力ナ！  
俺があの時、『土の姫さん』と言つた呼びかけにも普通に返してい  
たしナア！ ほんとアホ極まりない」

今にもブチ切れそうな閻魔顔を目の前にして、紅い鬼はグラグラ笑っている。

なんというか、あれだけ怒っている人（というか妖怪）を前にしてよくあれだけ笑えるわ。青筋立て、目が血走っているのに。土蜘蛛は張り詰めた口のよう口をわななかせていたが、ふつとそれを緩ませると、口角を上げた。

「はつ！ お前などに言われたく無いわ！ 僕は知っているぞ、紅の鬼！ 小娘の名も奪えんとはなあつ！」

ピタリと鬼の笑い声が止まる。

部屋は静まり返り、誰も声を発しない。

え？ 何？ 名を奪う？

今の言葉はどう言う意味なんだろう？

壁にへばりついて一人の様子をうかがう。穴の向こうで、紅い鬼はもう笑つてはいなかつた。冷たい視線を蜘蛛に向けるだけで指一つ動かさない。気のせいか、不穏な空気が鬼を包んでいる。

土蜘蛛はそんな鬼みて、嘲りを含んだ視線を向けて言い放つ。

「貪欲の鬼も墮ちたものよつ！ たかが人の子の契約も果たせぬとはなあ！ 大方、一匹逃がし損ねたんだろう？」

「ほう？」

「群れから離れたとはいえ、この俺の網を甘く見るな！ お前が捕られた人の子を逃がして、あの娘を手にしようとしていることは知つていてる。だが残念だつたな！ 一匹逃げそびれたようだ！」

え？ それって、誰かがまだこの世界にいるっていうこと？ 鬼は約束を守っていなかつたの？

疑問だらけで、私はすっかり混乱した。

今のは本当なら、あの時誰かが逃げそびれたって事になる。でも確かに、あの時みんなあの岩の扉をくぐつていた。私が一番最後だつたんだから、逃げそびれたはずがない。

蜘蛛は相変わらず紅い鬼に怒鳴り散らす。その声に我に返り、視線を蜘蛛へと戻す。

「逃げた人の子は他の妖怪どもに持つていかれ、今頃屍にでもなつているだらうよ…」

「そんなつ」

はつとして口を両手で口を塞ぎ、後ろに仰け反る。ギイと足元の床が鳴いた。

「ん！？」

その瞬間、突き刺すような二つの視線が私の喉を締め付けた。思わず尻餅をついて震え上がる。

もう目には薄暗い壁しか見えないはずなのに、そのむこうからハツキリとした視線が私を拘束していた。

「丁度いい」

聞こえたが早いか否か、何かが壁を突き破り、着物を裾を引っ張られ、あつというまに鬼達のいる部屋へ引きずり出される。

遠ざかる大破した壁。流れる畳の縁。

そしてあの時と同じように、するどい何かが私を押さえつけた。  
畳に身体が痛いほど食い込む。

「……あつ」

田を見開き、体を強ばらせた。男がいた所には人の姿は無く、代わりに象のように大きな蜘蛛が一匹、黄色い牙をむき出して私を見下ろしていた。

その顔は蜘蛛ではなく、鬼と虎が混ざったようなおぞましい顔だつた。鉄のような真っ黒な硬い鉤爪で、私の顔をグイグイといたぶる。

「まさか生きていたとは。なかなかしづとい人の子よ。この紅い鬼に飼われたのが運の尽き」

人と獸が混ざつたような、ざりざりとした声が上から響く。

紅い鬼のそばに座つていた女の子がすつと立ち上がる。ふるふると身震いすると、次第に緑の肌に変わり、三人の子鬼に姿を変えた。あれは子鬼達が化けていたんだ。

ぎろり。土蜘蛛が鋭い視線を私から紅い鬼へと移した。今にも切り込もうとしている子鬼達を紅い鬼が待てと、手を振る。

「紅の鬼よ。我らと手を組もうではないか。そうしたらこの人の子を返してやる」

「……」

「田の前でせつかく捕られた雀のはらわたを、お前は見たいのか？」

一瞬だつた。

田の端にぱつと赤い物が弾けた。

それが雨のように畳に降り注ぎ、なにかが目の前を転がつた。今さつき見たばかりの、虎の顔を持つた蜘蛛の化け物。その黄色い目はより霞み、もはや目の前にいる私を見ていなかつた。

ぐらつと意識が揺らめいて、視界が回る。気絶しかけた私を鮮やかな鮮血にも似た腕が、鉤爪のついた足から抜き取る。

ガクガクと膝が笑う。気絶しなかつた自分を褒めてあげたい。首を落とされても蜘蛛の体は固まつてゐるかのように倒れもせず、ただ血を流してそこに佇んでいた。

その光景に、畳の上に下ろされた後も、腰が抜け立上がることが出来なかつた。

「あ～あ。部屋が台無しだ」

つんと爪先で、鞠のよつに土蜘蛛の首を転がす。口から耳から血が止めどなく流れ、畳に赤い水たまりを作る。

呆然とそれを眺める私に、鬼が近寄り傍にかがみ込む。

「怪我はないか？」

鬼が私の顎をとらえ、目を合わせる。  
私は微かに、顔を上下に動かした。

「し、死んだの？」

「ああ」

「逃げそびれたつて……」

「余計なことを話してたナ」

鬼は顎を離すと立ち上がり、盛大にため息をつく。しかしその顔にはどこか笑みを浮かべて、皮肉った表情を作ると呟いた。

「まつたぐ。とんだ茶番劇だつた力ナ」

赤く濡れた紅い手がひらりと舞う。すると一瞬にして、裸に赤い実が幾つも実った。

## 第一十怪 茶番劇（後書き）

前回に引き続き、分かりづらかったかと思います。  
がんばりましたが私の文章力の限界でした。  
でもめげずに書いていこうと思います！  
お付き合い頂いた方、どうもお疲れ様です。  
ありがとうございました。

## 第一怪 金糸雀

「鈴音。何か欲しいものはある力?」

「欲しいものはないので、外に出してください」

「それは出来ない力ナ」

にべもなく鬼は言つ。

蜘蛛の騒動が終わり、私はまたもや籠生活を余儀なく送つていた。友達が一人逃げそびれたという事実はどうやら本当らしく、鬼はそれに関わる話をするとひどく不機嫌になつた。それなのに、ここ最近は欲しいものはないかと訊いてきたり、色々なものを私に贈るようになつた。

かんざしや、手鏡、扇子。子鬼が言つには、どれも上品かつ、一級品らし。

これが鬼からじやなかつたら、どんなに嬉しかつたか。

いや、そもそもかんざしとかしないから、いくら豪華でも馴染みが無いため、イマイチな反応しか出来ないのだけれど。

「まあ、良い。お前にこれをやろう」

手に持つていた包みを広げ、小さな化粧箱を格子の間から私に差し出した。漆塗りの上等なものだと鬼は言つ。

「お前もあと少しすれば、女になるからナ」

「……」

ねえ、ちょっと。それはどういう意味？

私がまるで女じゃないみたい。失礼だわ！ そりや、胸はまな板同然だけど。

でも、あと数年経てば胸だって顔だってもつと女らしくなるはず。

いやいや、今はそんな事よりも大事なことがある。

「友達はどうなったんですか？」

「……」

今度は鬼が顔をしかめる番だった。

口をへの字にして私を睨みつける。思わず息を呑んでひるんでもうが、今はびびっている場合じゃない！

「私は鬼さんと契約しました。知る権利があるはずです」

権利なんて大層な言葉を使つたことはなかつたけれど、今はあえて使う。鬼は大きく息を吸い込むと、威嚇するように胸を反らした。私を睨む目がより一層鋭くなる。

ま、負けないんだから！

「契約成立していないつて事ですよね？」

震える体を、両手で抱えるように押さえつけながら言った。

「まあ、な」

片眉を上げて目を細めて、鬼は顔満面に不機嫌だと表す。しかし

すぐ口元をにじりとつゝ上げ、こひらひ笑みを向けてきた。

「だが、それも直に片が付く。お前の友の居場所は分かってるからナ」

「え！ そりなのー？ なら、会わせて！ 無事かどうか確かめたいの！」

「だ・め」

ペんりと真っ赤な舌を出して意地悪く笑つた。私が抗議の声を上げようとするが、ペシッと額を軽く叩かれる。

「もうお前を籠から出せや。いい子にしなかつたんだからナア」

「だつて、聞いてましたよー！」

「でも出て良いとは言つていないハズだろ？」

「つゝと言葉が詰まつた。

ちなみに私は人魂の事を鬼には話さなかつた。あれは鬼とは関係のない、全く別の意図があると思つた。  
もしかしたら淡藤局さんあたりが仕掛けたものかもしれないし、下手なことは喋らない方が良い。

「今後は食事も風呂も俺が直々に世話を。ありがた〜く感謝するように」

するわけないでしょー。

心の中で言い返す。

やつぱりまだ鬼が怖いと思つてゐる自分がいる為、そつ何度も鬼に噛みつぶ勇氣はなかつた。

「ああ、せうだ。もう一つ。ここつもやべり」

籠の中に何かを放り投げる。

投げられた物を手にとつて広げてみると、淡い黄色に裾の方になるに連れて、綺麗な黄緑色が芝生のよつとに広がつてゐた。

「金糸雀の羽色に似せた長襦袢だ」

「あんじじやく？」

「ああ」

羽つてこつべらだから鳥の名前かな。  
この色使いを見たところ、カナリアとかインゴベリイしか思いつかないけど。  
にしても、綺麗な着物。  
手触りも良いし、色も明るく優しい。

「金糸雀は良い声で鳴くらしへ。お前もその鳥のよつて、せべぢり方でも覚えたら良い」

鬼のいらない一言で、せつかく綺麗な物を見て氣分が良くなつていたのに、すぐさま嫌な気持ちになる。

「要りません。今頂いている分だけで足ります」

そつぽを向いて鬼に突き返す。

「まあそつ言ひナ、鈴音。活きが良くなくては飼つていっても面白くないからナア。前のように俯抜けられてもつまらん」

なるほど。そういうこと。

色々贈り物をくれるのも、欲しいものがないかと訊くのも、おもちゃの電池切れを防ぐ為つてことね。

「結構です」

「ま、お前の好きにすればいいカナ」

鬼はおもむろに立ち上がり、籠の鍵を開けた。そして座っていた私の腕を掴み、立つよう促す。

「久しぶりに酌でもしてもらおうか。今日は外で花見でもしようか」

「外に……出るんですか？」

見開いた目で鬼を見る。

外に出るしがなかつた私からすると、とても魅力的に聞こえた。そしてそれと同時に、あの蜘蛛のことも思い出す。

あんな危ない妖怪がうろうろしているかもしれないのに、お酌なんて暢気なことしていられない。しかも、私が今着ているのは動きやすい服装ではなく、お雛様みたいな服装で（十一单ではないけれど）大変動きににくい。逃げるビンゴか走ることすら難しい。

「ああ。闇の花見も、なかなかのモノよ」

良い酒も手に入つたしなと、上機嫌に笑む鬼。私はそれを、内心複雑な気持ちで見上げた

## 第一怪 枝垂れ紅梅

まあ、ね。籠から出さないと言つたそばから外でお酌なんて言つから変だな、とは思つていたけど。まさか『籠』こと『外』に出されるとは思わなかつた。

鬼に腕を掴まれて立ち上がる。鬼はそれを確認すると、大きく腕をなぎ払つた。

足下から紅い火が大きな波紋のように広がり、轟音が鳴り響くと同時に、畳が波を打つて揺れた。よろける私を腕で支え、鬼が手をひらりと舞わせる。紅い火が燃え上がり、視界を覆つた。

なに！？  
何がどうなつてゐの！？

怖くなつて両手で顔を隠し、指の隙間から辺りをうかがう。炎の波が向こうの闇に広がつて消えていく。途端にしんと静かになつて、何の音も聞こえない。

目を瞬かせてみるけれど、指の間から見えるのは闇だけだつた。

「良いところだらう？」

「え？」

鬼は私の両手を顔から下げる、前を向かせる。目に映るのは夜より深い闇があつた。あのお化け屋敷独特の湿つた空氣と匂いがそこに充満していく、背筋がすうっと寒くなる。そして目が暗闇になると、籠の向こうに広がる星のない真つ暗な空と、すぐそこにあ

る真っ黒な沼が目に入った。

籠の格子を掴んで沼をのぞき込む。底の見えない沼の水面からは、蓮のような花が優げ光を放つて咲いていて、それらを見下ろすのは刃のような深紅の三日月だった。

「……」

「ぐくりと生睡を飲み込む。

はつきり言つて、幻想的といつより不気味だった。

沼の周りは草が生い茂つていて、他には何も見えない。時折、風が湿つた空気を運ぶと、むこうの暗闇の中に山々が姿を現し、また闇に沈むのを繰り返していた。

「や、酌をとつてくれ

鬼がひょうたんを押しつけてきたみたいで、びんと背中に衝撃を覚える。

ややややと鬼に顔を向けると、震える指で辺りを指さした。

「あ、あの、ここここは大丈夫なんでしょうか？」

「んあ？ 何のことカナ？」

「いかにも何か草むらから、出でてきたなんですか？」

「ああ、たまに蛇や河童が出てくるナア」

「蛇に河童あ！？」

叫んで、格子から離れる。

静かな水面は鏡のように紅い月たちを映すだけだが、突然なにかが飛び出しあたら堪らない。四つん這いになりながら籠の中央に移動する。

「なあ～に、安心しる。お前が酌してればなにもないぞ」

「嫌ですつ。」こならあの部屋に戻つた方が良いです！」

ぶんぶん首を振つて鬼の着物の裾を必死に摑む。

「かかか、帰りましょう！」

「お前なア……」

ため息をつくと、口の口とその場に寝そべり私の着物を強く引いた。突然の事に私は小さく悲鳴を上げて、鬼の腰の上に倒れかかり鼻を強く打つた。

もう、低い鼻がさらりと低くなるじゃない。

「せ～つかく鈴音のワガママをきいてやつたのに

紅い長い指で私の眉にかかつた前髪をかきあげると、口角を上げた。

鼻をさすりながら鬼の指から逃げるよつて、上体を起こす。

「た、確かに言つましたけど、まさか、こんな、心靈スポットみたいな所だなんて、思わなくて」

虫の鳴く音もなくただ風が草木を撫でる音しか聞こえない風景を見やり、私は震え上がつた。先ほどからじわじわ嫌な汗が背中を濡

らし始めていて、悪寒をさらに強めている。

ああ、もう、早くここから逃げたい。

「だから言つたの？ 考え直した方が良いつて」

「だつて、お風呂場から見えた景色は素敵だつたから……」

がつくつと肩を落とす。

籠より外の方が気分転換できると思ったのに、これじゃあ気分が滅入つちやう。露天風呂から見えた月も、今見上げればホラー映画の蝙蝠でも横切りそうな気味の悪い三日月にしか見えない。でも露天風呂が素敵だつたからと言つて、外が素敵だと安易に考えるのも悪いか。

はあと溜息を吐いてまた肩を落とした。

「おー、鈴音」

ちょいちょいと、再度落とした肩をつつかる。

「酌。いい加減に酌をとれ」

振り返つた胸にすこいつとひょうたんを押しつけられ、両手で受け取る。

本当にここで、お酌するの？

信じられないと眼差しで訴えてみる。

「そり、しゃあ〜〜

「ででで、でも」

「それとも俺にこの場で塩漬けにされる力？ だったら」

「やつめす」

鬼の言葉を遮つて半ばやけ気味に手を挙げた。  
もう一つ、ありますよ。

やればいいんでしょ……

「美味しい酒だナア。お前も飲むか？」

「まだ未成年です」

差し出された盃に一瞥して首を振る。

辺りは相変わらず静かだつた。草木も眠る丑三つ時つて、こんな感じなのかな。やつきから何度もかの溜息を吐いて辺りに田配せをする。

私が住んでいるところは山が見えるし、都会じやないけどコンビニもあるし、街灯だつて道行く道にきちんとある。こんな真っ暗闇な所じゃない。

籠の白い格子から何度も目を凝らして空を見上げても、星一つ見つけることが出来なかつた。見えるのはたまに紅い三日月を横切る黒い雲だけだつた。

「静かですね」

氣を紛らわすように声をかける。

静かすぎて自分の落ち着きのない鼓動がよく聞こえてくる。

「ああ。たまにほんのいい酒の田も良い力ナ」

本当に殺風景な光景。

ほのかに灯る蓮の花も、空の闇に押しつぶされて今にも消えそうだった。

嫌な風景だなあ。全然落ち着けない。

「あの、 ほの常闇はどうまで広がっているんですか？」

ふいに浮かんだ疑問を口にしてみる。

「んん？」

「どうまでも真つ暗なんですか？」

「お前は面白ごとをきくなあ」

そう言つてのんびりと体を起こして、盃を差し出してくる。そこにひょうたんの口を傾けてお酒を注ぐ。

「ほんはな、人の闇ほど広い」

ぐいっとひと飲みして、鬼は言つた。

「人の闇？」

「ああ」

「それってどうこつ意味ですか？」

「そのままの意味力ナ」

意味が分からぬ。

マイナスな感情つてことかな?

私の腑に落ちない表情を見てか、鬼がまた口を開いた。

「今もなお、広く深く、この常闇は大きくなつてゐる」

「今も?」

「ああ、善い奴ほど鬼が……つてナ」

「え?」

また意味が分からなくて首を傾げてみるけど、鬼はお酒を一口飲んでそれ以上何も言わなかつた。

私はただただ口をつぐんで、膝の上においた両手を結んだ。

また息の詰まる空気が流れる。えつとほかに話題は……。

「あ、そういうば、お花見するんじゃなかつたですか? どの木を見るんですか?」

沈黙に耐えきれなくなり私は口を開いた。そしてきょろきょろ辺りを見回して目を懲らすが、見えるところに木らしい木は一本もない。枯れ木すらない。

どこにお花見できる木があるんぢろつ。

「ん? ああ、そつだつたナ」

カツツと乾いた音が響くと、鬼が牙で盆をくわえて立ち上がり、ゆつたりとした足取りで籠から外へ出た。

「なあ鈴音。お前は梅が好きか?」

「梅、ですか?」

梅は好きだけれど、特別好きってわけじゃないし。でも、突然なんでそんなこときくんだろう。

小首を傾げながら鬼の動向を見守る。何かするつもりなのかな? 鬼は水面に近寄り、口にくわえた盆を手にして、その上にもう片方の手で拳を作った。

一体何をしているんだろう。

田を細めて凝視しても、よく見えない。鬼が盆を傾けさせる。すると闇の中に水音が響いた。鬼が何か沼に落としたみたい。

「あの、何しているんですか?」

紅い瞳がちらりと私に向かられる。長い指を少しすぼめた唇の前で立て、ニヤリ笑んでみせる。

その仕草が妙に艶っぽく見えて思わず心臓が鳴る。

唇から指を離し、水面に向けて伸ばす。手のひらを上へ向け、ゆっくりゆっくり、手招きするように上げていった。

暗い水面にいくつもの紅い星々が浮かび上がる。それらが勢い良く水しぶきを上げて、空の紅い月へ伸びた。

沼から生えたそれは鬼の背を越え、ぐんぐん伸び、私がめいっぱい見上げるとここまで背を高めるとやっと止まった。

それを見て私はようやく、それが紅い小さな花を雨のように降らせる梅の木だと分かった。滝のように水面にまで降り注ぐ紅い花が、辺りの不気味な雰囲気をがらり変えて神秘的な空気を漂わせている。

「これ、枝垂れ桜じゃなくて、枝垂れ梅?」

「ああ。綺麗なやつだろ」

腕組みして得意げに言った。

大きな大きな、雨のよつに紅い花を散らす梅の木。籠のそばに寄つて見上げ、溜息を吐いた。

「す、い、綺麗……」

枝から雪がこぼれ落ち、沼の水面に波紋をつくる。風が木を撫でると、長い枝が女性の髪のように紅く、艶やかに流れた。

その光景にもつと近くで見たい衝動に駆られ、籠の出入り口に手をかける。

こんなにすごい梅の木を見たことがない。桜や藤の花を見て感動したことはあつたけれど、梅の花がこんなにすごいなんて！ 今、手元にデジカメがあればいいのに！

「あ、あれ？」

白い格子を押すがビクともしない。  
押す場所を間違えたかな？

辺りの格子を見比べるが、きちんと出入り口部分を掴んで押している。それに今は鍵なんてついていない。

「なんで開かないの？」

「お、鈴音」

呼ばれて、さつと顔を上げる。

梅の下で紅い目が細くこぢらに視線を投げている。

「お前は籠から出るんじゃない

「せつかく綺麗な梅なのに。もつと近くで見たいです！」

「だ・め・ダ」

「でも」

「コイツを見れただけでも有り難いと思え」

「だからって籠の入り口に呪いをかけるなんて、ひどいじゃないですか！」

わざわざ籠に私を閉じ込める術をかける程、鬼は外に出したくな  
いの？ 本当に一生、ここから一步も出さないつもりなの？ 何に  
したつてひどい！ まさかお風呂も籠ごと移動するの？ そんなこ  
としたら畠が傷むじゃない！

「ん？ 篠に呪いなんぞかけてないが？」

え？

罵る言葉を考えていた頭が、ピタリと止まる。

呪いをかけていない？

嫌な予感を覚え、そろり、足下を見やる。

暗がりな足下の格子に、小鬼とは違つ縁の塗れた手が、がしりと  
出入り口部分を掴んでいた。

その手元をたどり、沼から伸びた苔色の腕に目を向ける。

よせばいいのに理性に反して沼に視線を移すと、そこに広がる無数の小さな黄色い目がなんどか瞬きした。そしてそれらとバツチリ目が合つた私は、あつと言う間に失神したのだった。

どこからか、三味線の音が聞こえる。

雅な音楽に睡魔を呼び寄せる長唄。なんだか懐かしい。おばあちゃんの優しい声も聞こえてきそう。

そんな事を思い出しながら心地よく眠っていたのに、誰かがゆらゆら自分の体を揺さぶっている。

もう、よしてよ。自分を揺らす何かを手で払いのける。なんだか手がべつたりする。気色悪いと思いながら、うつすらと目を開く。

「うつわあああ

変な声を上げて、私は大きく飛び退く。格子の外から黄色く光る小さな丸い目が、螢の群のように自分を囲んでいたのだ。まるで珍獣でも見るかのよつた、そんな好奇の眼がふんだんに自分に降り注いでいる。

「な、な、な

「おお、目が覚めた力」

声が聞こえると同時に、格子の外の黒山ならぬ緑山がすっと退いた。退いた先には鬼が梅の根本であぐらをかいて、誰かとお酒を飲み交わしていた。

「さすが旦那。ずいぶん活きの良いのを飼っていますな」

高い猫なで声で、誰かが鬼に酌をしている。目を細めて隣の人物

をよく見てみる。

水搔きの付いた手に深緑の体、とがつた口に頭の上には丸いお皿。そして口元に筆先のような髪が伸びていた。あれはもしかして、河童？

そこから視線を外して、上目遣いで辺りに視線を走らせる。いつの間にか沼を河童たちが囲つて宴会を開いて盛り上がつていた。歌い踊る河童がいれば、相撲を取つたり、お酒の飲み比べをしている河童もいる。そんな緑の中に一人、河童とは違う人影が見えた。沼の側で腰掛け、三味線を鳴らして艶やかな口からは長唄が流れている。生暖かい風が吹けば、そのしなやかな長髪がなびいた。

「いや本当に元気の良い人の子だ。尻子玉抜いても良さそうだし、孕ませても良さそうだ」

孕ませ……！？

素早く不穏な事を言った河童へと振り返る。こちらには見向きもせず、せつせと鬼に酌をしている髪の河童。確かに今、この老河童が孕ませてどうのつて言った！

一応、孕むつて言葉は知つていたけれども、それを耳にする場面に出くわした事が無かつたせいか、いやに動搖してしまつ自分がいた。なんだかすごく不愉快というか、生理的に受け付けない。真つ青になつて鳥肌がたつている腕をさする。なんだか気分悪い。

「こいつはまだ子供だ。それに孕ませたら面倒になるだけ力ナ」

「ははは。左様で」

髪の河童は相づちを打ちながら鬼の盃にお酒を注いだ。うーん。安心して良いのか、怒つて良いのか。とりあえず、そういう対象になつていないことにはっとする。

「鬼様。人の子も良いですが、わたくしの唄も聞いて下さいな」

凛とした声に、その場にいた全員がそちらへ振り向いた。沼のそばで三味線を弾いていた髪の長い女性が、にこりと鬼へ微笑んでいる。

「聞いているわ。唄の君」

「うたのきみ？ あだ名……だよね。きっと。

その人が青い着物をゆらりと揺らして、幽霊のように沼の上をつうつと滑るように渡る。鬼のいる岸についたとき、彼女の影を見て、思わず「えっ」と声を漏らした。

着物の裾からは見えるはずの足はなく、代わりに太くて青い蛇の胴体が見えた。どうにかして人魚の見間違えと思ったかつたけれど、鬼とそのそばにいる河童を長い胴体で囲むのを見て、改めて蛇だと認めた。

「蜘蛛の一件、聞きましたわ。もう金輪際、蜘蛛なんかおよしになつて、わたくしの歌声をもつとお耳の近くで囁かせて下さいまし」

艶っぽい声と眼で鬼の方に白魚の手をかける。しかし、その横で青い鱗を彌々しげに叩く老河童。

「おい、濡れ女。邪魔だ！ 今ワシが酌をしていたんだぞ」

「臭い老いぼれ河童はだまつて頂戴」

ひと睨みして鬼と河童の間に無理矢理割つて入る。その際河童からひょったんをちゃっかり拝借して、鬼の盃に注ぎ、また微笑む。

「お酌ならわたくしが」

「おお、すまない力ナ」

「今度は是非、わたくしの所へも通つて下さいな。近頃お屋敷へのお招きがないので、寂しいですわ」

彼女の表情はまさにウツトリという言葉がぴったりだった。

なんというか、あの口裂け鬼のどこが良いんだろう？ ただ単に媚びを売っているだけなのかな？ それとも本当に好きなのかな？ 青白い顔なのに、頬だけをほんのり赤らめる彼女を眉を寄せて眺める。ちらり鬼の方も見てみるけど、鬼もまんざらじやないみたい。

「なあなあ」

「わっ」

裾を引っ張られ、反射的に飛び上がる。

私の着物の裾をむんずと掴んでいる手元を見て、目を見開く。今裾を掴んでいる一人をのぞいて、四、五人の河童たちが格子の中に手を入れ、私の着物を掴もうと伸ばしていた。慌てて羽織っている着物を脱ぎ捨てて、手の届かないところへ逃げる。

「逃げるなよお」

「もつと近くに来いよ」

「お前、人間だろ。触らせててくれ」

無理！ それに怖い！

気が付けば、映画で見たゾンビみたいに、前後左右から無数の腕が自分に伸びてくる。必死に腕で体を抱えて小さくなるが、河童の指先が自分の体に何度も掠める。

「へらー、よさないか！」

手を鳴らす音が河童たちの動きを止めた。腕を伸ばしていた河童たちが、そちらをむいて拗ねたように不満の声をあげる。

「だつて頭あ。俺たち、人間をこんなに間近で見たことないんすよ。頭達の代は良いけど、俺らはいつも遠巻きにしか見ていないんだか」

「ら

「お前はまだ良いよ。俺なんか、常闇から出たことないんだぞ」

そーだそーだと、格子の周りにいた河童達が騒ぎはじめたが、鬼の横に座っていた老河童が立ち上がり、雷鳴のように一括すると皆黙つた。

「紅い鬼様の人間だぞ。怯えさせるんじやないつ

このひと言で、しぶしぶ河童達が格子から腕を引っ込める。それでも名残惜しそうにきょろりと動く眼達が私を捉えていたので、ほつとする事が出来ない。

それによっても人間を見たことない妖怪がいるんだ。以前子鬼が話していたみたいに、人の世界に行くには偉い妖怪の許可がなければいけないみたいだから、生身の人間を見たことが無い妖怪がいてもおかしくはないと言つことか。

「ちえつ。尻子玉抜」いつと思つたの?」

振り向きざまに私を見ていた一人の河童が呟く。

「お前みたいなドジが出来るわけ無いだろ」

「なんだとお!」

格子のすぐ側で取つ組み合いが始まり、周りの河童達がやんやとはやし立て、二人を取り囲んだ。これでやっと注意がそれた。ふうと小さく息を吐き出す。

ふと、思い出して紅い鬼へと視線を移すと、鬼の肩には下半身蛇の女性がもたれ掛かり、何か話しているみたいだつた。ずいぶん積極的な女人の人なのね。

鬼は皮肉そうな笑みを浮かべて、休まず口に酒を運んでいる。ちらりとこちらを見ると、にいつと口角をあげた。

なにその人を馬鹿にした笑みは。腹立たしい感じがして、むつとしてしまつ。

「人の子」

「え?」

振り返るとすぐ後ろに、紅い鬼の横に座っていた老河童が佇んでいた。

「うわああ

何度もかの叫び声をあげて、立ち上がる。その声に一斉に周りの河童達がこちらを見た。

「あ！ 頭あ、 ずるいっすよお」

「俺も入れてくれえ！」

「黙らんかつ！ まつたくイタズラ小僧どもめ」

老河童はぶつぶつ文句を口にしながら、足下に落ちている私がさつき脱ぎ捨てた着物を拾つた。

「ほら、羽織れ。風邪をひかれては、まずいからな」

苦い顔をしながら私の胸に突きつけた。

人間が嫌いなのかな。私が着物を受け取ると、ふんと鼻を鳴らして籠から出でていく。そして格子から覗いていた河童達を猫でも追い払つかのように、しつしと手を振つた。

「さて、そろそろ行こうかな」

鬼があもむろに立ち上がり、盆をくわえた。

「もうお帰りになられるのですか？」

「ああ」

「そんな。寂しいですわ」

すがるように鬼の腕に体を寄せる。その俯き加減が本当に悲しそうで、今にも伏せた目から涙がこぼれそうだった。そんなにこの鬼

と離れるのが嫌なの？ 私には理解しがたかった。

「お願いです。もう少し、お側においてくださいまし」

「唄の君」

すつと長い指で彼女の顎を上げる。

「すまないが、人の子をそろそろ連れて帰つてやらねばいけないんでナア。続きはまたの機会にしてくれ」

「そんな」

はらはらと彼女の目から透明な雲がこぼれた。

もしかして、本当にこの鬼のことが好きなのかな。話の流れから久しぶりに会つたみたいだし。なんだか可哀想。

「じゃあ、な」

□元をつり上げながら、白魚の手からするり、鬼が離れる。彼女は紅い腕が離れた後も、名残惜しそうに宙に残つた手をそのままにし、やがてそれを胸の前で堅く結んで、整つた唇も同じようにした。鬼は振り向きもしない。お酒を飲んで上機嫌に鼻歌を歌つている。なんて非情なんだろ？！ ああ、見てられない！

「あのー」

思い切つて、だけれど遠慮がちにその一人に声をかけ、手を挙げる。

「私だけ帰つても良いですよ」

鬼ばかり見ていた瞳が、初めて私に向けられる。ぽかんとしている彼女に、私はなるべく親しげに言った。

「私は先に帰りますから、遠慮せずお姉さんは鬼さんと一緒に飲んで下さい。鬼さんも……」

言いかけて、突如喉が閉まるような感覚に襲われて黙る。目の前から刃物の切つ先を突きつけられているような視線を感じて、体が強ばる。気が付けば鬼が顔をひきつらせて、こつちを射殺さんばかりに睨みつけていた。

な、なにかまづい事言つたかな。気を利かせたつもりだったんだけれど。

「お前さんがいつたい、ど～やつて帰るんダア？」

ずんずんこちらへ大股で歩いてくると、格子越しに私を見下ろした。あまりの凄みに体が縮こまる。

「歩いて帰るのか？ 泳いで帰るのか？ それとも飛んで帰るのか？ ん？」

「すいません……」めんなさい……

俯いて震える。

しばらく誰も音を起してなかつたが、鬼が小さく息を吐くと声を上げた。

「すまんナア、唄の君。躰がなつてなくてナア」

梅の根本で佇んでいた彼女が呆然とした表情で、一瞬なにを言われたのか分からなかつたみたいだが、すぐにまたにこり笑みを浮かべる。

「いえ。お可愛らしいですわ」

口元を袖で隠し、ふふつと声を漏らしながら応えた。

鬼は沼の側で座つていた河童にも向きなり、ひらりと手を振つた。

「今日は楽しめた。また飲み交わそう」

「今度は邪魔など入らんよ、ワシの川でおもてなし致しましょう。ではまた後ほど」

周りの河童を促しながら、頭を下げ、他の河童達も彼に習つて頭を下がた。

鬼が人差し指を立て、大きく息を吹きかける。そこから紅い炎が梅の木へまつすぐ走ると梅の木は大きな火柱になり、竜巻のように渦を巻いて沼の中へ消えていった。

鬼は無言で籠の中へ入ると、私の腕を勢いよく鷲掴みにした。すごい力で掴まれたので、痛みに顔を歪ませる。痛いと声を上げそうになつたけれど、鬼の憤怒の表情を前にして飲み込む。

ここへ来たときと同じように鬼が大きく腕をなぎ払うと、紅い炎が籠を覆い、視界いっぱいに広がる。やがて次第に炎が消えて静かになると、灯籠の柔らかな光が白い籠と閻魔顔の鬼の横顔と、そして情けない顔をした私を照らしていた。

「鈴音え」

底から響いてくるような低い声に肩が跳ねる。横を向いたまま、鬼が紅い目だけをこちらへ向けてくる。腕を掴む力がさらに強まる。い、痛い……。

「いつたい、どうこうシモリだあ？」

痛みと恐怖で視界が歪む。

そんなにあの女性に言ったことが悪かったのかな。

「「めんなさい……」

顔と同じくらい情けない震える声で謝り、目頭を熱くした。

鬼は乱暴に私の腕を放すと籠から出て、また乱暴に出入り口を閉め、見慣れた南京錠をかけた。

「お前は今日は飯抜きだ！ 分かつたな！」

吐き捨てるように言って、鬼は部屋から出でていった。閉じられた襖の向こうで、どすどす大股に歩く鬼の足音が闇に消えていくのを感じた。

私は安心からか、恐怖のためか。その場に倒れこんで一人静かに泣いたのだった。

## 第四怪 青息吐息

お腹減つたなあ。ぐうと唸るお腹を抱えて、何度も目かの寝返りをうつ。今現在、私は余計なことを言つた為に、食事抜きの刑に処されている。

なんとか口に入れるものが欲しくて、試しに子鬼を呼んでみたけれども何の返事もない。あの黄色い人魂のことも気になつていたから、淡藤局さんも呼んで訊ねようと思つていたのに。

仕方ないので横になつて眠ろうとするけれども、空腹のために寝ることもままならない。よりによつて今日はいつも以上にお腹が減つてゐるらしく、お腹が何度も抗議の声を上げている。

ちらりと部屋の隅に目を向ける。灯籠はまだ明るくならない。どうしようつ。ああ、お腹減つた。大きく息を吐いて目を閉じる。

「お腹減つたあ……」

先ほどから何度も口にした言葉を呴くと、お腹が応えるようにぐうと鳴る。灯籠が明るくなつたら鬼の機嫌も直つてゐるかな。じゃないと辛すぎるので、お風呂もちゃんと入りたいし。

大きく息を吐いたその時、ふと無性に視線を感じてパツと目を見開く。すると目の端に格子の外から見下ろす紅の瞳があつた。

「わつ」

ガバッと起き上がり、目を見開いた。鬼は市松模様の赤紫の浴衣を着て、腕組みしながら格子の外に立つていていた。慌てて布団から這い出で、貰つたばかりの長襦袢を羽織る。これを使うのはちょっと癪に障るけれど、薄い浴衣のままでいるのは気が引けた。

「い、いつの間に。黙つて何しているんですか」

「腹が減つたのか?」

「にいつと意地悪く笑む。

「口は災いの元だナア」

皮肉げに言つて、格子に顔を寄せた。

「何しに来たんですか?」

鬼の態度にむつとして不機嫌な表情を露骨に浮かべた。

お腹の減つてているときに、わざわざ嫌味でも言いに来たつて言つ  
の? 亂暴な感情が湧き出でてくるけれども、あの鬼の怒つた顔が頭  
を過ぎつて、すぐに引っ込める。

もう怒つていないんだろうか? 探るように鬼の顔を見るが、今  
はいつも通りのニヤニヤ顔をしていて、怒つている様子はない。こ  
つそり安堵の息を吐いてしまう。

「いやなに、ちよいと可哀想に思えてナア」

白い格子に近づいて、見下ろすように私の顔をのぞき込むと

「どうだ鈴音。また勝負しない力?」

「勝負……」

勝負、ね。頭の中にはあの視界いっぱいの紅い光景が浮かぶ。う

「ん、嫌な思い出しがない。意図せず渋い顔をしてしまつ。それを察したのがどうかは分からぬけど、鬼は勝手に話を進め、ある提案を出してきた。

「お前が勝つたら、そつだナ。せりんと三食飯をつけてやる」

「三食も…？」

いつも一食だったのが三食も…！　ぱっと勢いよく顔を上げるが、鬼は人差し指を立てて私の前に突きつけると「ただし」と付け加えた。

ぴたりと喜んだ顔が強ばる。ただし？

「今日は俺が勝つたら……」

勿体ぶるように鬼は一度そこで区切つた。にやにや笑うばかりで先に話そつとしない。何なんだろ。ひ。

「勝つたら、なんです？」

焦れて鬼に先を促す。やうやく深紅の瞳が妖しく光ると、顔を近づけて囁いた。

「心を縛らせてもらひ」

心を？　眉を寄せて鬼を見つめ返す。

心つて縛れるものなの？　不可解な表情を浮かべる私に、鬼は無表情に小さく頷いた。なんだか怪しい。怪しそぎる。

「嫌です」

訳の分からぬ取引はしたくない。私は首を横に振った。第一心を縛るなんて、出来る出来ないはともかく、ろくなことじやない事だけは確かだ。私はもう一度絶対にといふ言葉を取り付けて嫌ですと繰り返した。

「ほお？ ジャあ、いつ飯が出てこなくなっても良いんだナ

「や、そんなのずるいですワ」

口をどがらせて、呟く。しかし私の思ひとは裏腹にお腹がまたぐうと鳴る。

「一ん前に腹は代えられないってこのこと？ でも、『』飯だけで訳の分からぬ約束するのもちょっと……。田を泳がせて両手をもじもじさせる。少しの間考えていると、ふと、ある案が思い浮かぶ。

「あの、一つ、追加しても良いですか？」

「うん？」

「もし私が勝つたら、三食の『』飯と、残っている友達が誰なのか教えて下せ。そして会わせて下せ」

これで無理なら断る。私は決心した。見上げて鬼の返答を待つ。ふむと鬼は顎に手を当てて目を閉じた。そしてしばらく考えをめぐらすと、口角を上げて目を開けた。

「よし、分かった

鬼はにやり笑い、紅い目を細める。

「お前が勝てば、飯と友を。俺が勝てば心を。それで良いな？」

「はい」

両手で拳を作つて領いた。

鬼はぐつと突き出した手のひらを上に向け、開いた。紅い手の中にあつたのは、大豆ほどの白と黒のサイコロが一つ。

「お前、賭博を知つてゐるか？」

「え？」

鬼はまた懐から黒い、鬼の片手ですつぱり包めるほどのがい飲みを取り出し、目の前に掲げて、まるで品定めするように眺めた。

「丁か半かを賭けるんだが」

「ああ、はい。知つてます」

おじいちゃんと一緒に、何度もテレビで時代劇を見ていた。悪党の根城は賭博か悪代官と相場は決まっていて、その後には正義の御老公か、お侍様からお仕置きされるのだ。丁か半を賭けるシーンも何度も見てている。

ひとりと鬼を見、唇を結んで、顎を引く。覚悟は出来た。

「ああ、念のために言つておくが、このサイコロは術が一切効かない。負けたからって言いがかりはきかんぞ？」

言いつながら鬼は私に座るように促し、自分も畳に腰掛けた。

「やつらなんですか」

まっすぐ見つめて言い返し、私も格子のそばに正座する。そんな私にほんの一瞬、対の紅が目を見開いたが、すぐ猫のよひこ細め、カラカラとサイコロを手のひらで踊らせた。

「では

言つて下さい飲みの中にサイコロを放り込み、一、二回下さい飲みを鳴らすと、バンと強く畳に打ちつける。

「ああ、丁半賭けナア」

「ぢつちだらう。丁度か半端か。ぐつと着物の裾を掴んで無意識に歯を食いしばる。ぢつちだらう、ぢつちなんだらう。逆さになつたぐい飲みを見つめるが、中のサイコロが見えるわけもない。

「まだカナ？」

視線の上から声をかけられる。

「丁か、半か。半か、丁か。丁と半。

……うん、よし。決めた。顔を上げて口を開く。

「半でー。」

深紅の瞳がゆらめくと紅い手が動いて、黒のぐい飲みが傾く。じつと瞬きも忘れてそれを見つめ続ける。  
まずぐい飲みの陰から現れたのは白い三。じくつと喉が鳴る。そしてもう一つは……。鬼がぐい飲みを畳から離す。紅い陰から出て

きた黒い数字は、五。丁だ。

「ま、けた？」

さあつと顔から血の気が引く。手足と口が、わなわな震え、喉が閉まる感覚を覚える。

「いやあ、残念だったナア」

ちらり上皿遣いで鬼がこちらを見やり

「俺の勝ち、だな」

そう言つてサイロロを回収した。

はあつと大きく息を吐いて、うなだれる。負けた。負けちゃつた。せつかく友達に会えるかもしけなかつたのに。これでご飯も友達も無しだ。震えてきた喉を誤魔化すように、また深くため息を吐いた。

「そんな顔をするな鈴音」

大きな紅い手が自分の頬に伸ばされる。

「悪いようにはしない」

頬にあつた手は頭にまわされ、猫の背を愛撫するように何度も髪の上に滑らした。

「友には会わせんが、飯はきちんと呑む」

「え？」

「その度胸に免じて、飯は用意しようつカナ」

信じられない」と田を上げる。どうこう風の吹き回しだらう。意外な言葉に田を何度も瞬かせ、両田で鬼の顔を穴が空く感じやないかと並びぐらじ見つめ続ける。

「だが」

ぐいっと私の顎をあげ、額をあわせると

「心は縛らせてもらひ」

鈍く紅が煌めき、目が離せないと気づいた瞬間、私は甘い感覚の波に突如飲まれた。大きな目眩を覚え、危うく格子に頭をぶつけるところだったが、外から鬼が体を支え、それを防いだ。

紅い手が改めて私の顎に添えられ、視線を合わされる。映る視界は水面のように歪んでいてよく見えない。それでも妖しい紅だけは鮮明に映つた。その下で八重歯の見える口が動いているのが見えるけれど、そんなことはどうでも良い。

綺麗な紅。どうしてこんな素敵な紅を恐ろしいだなんて思つたんだろう？ 花も宝石も霞んで見えるぐらじ美しい美しすぎる妖しい紅。それがずっとこちらを見つめ返してくる。思考が停まつて睡魔にも似たような恍惚が広がつてくる。

そう言えは、この感覚は前にも一度あつた。鬼に連れ戻され、名前を奪われそうになつた時に、この甘い霧が自分の中に立ち込めて自分を飲み込んでいく感覚。今回もまた、それと一緒にだつた。底なし沼の上に立つてゐるよつに、ずぶずぶ恍惚に沈んでいく。

「めんね……。

え？

聞こえた声と一緒に、甘い霧の中に鋭くて冷たいものが横切った。火照った意識に冷水がかけられ、一瞬にして霧は退いて視界が晴れていく。

「え？」

一気に現実に引き戻され、恍惚という熱が引いて正氣に戻った私は呆然とし、固まった。

今のは一体なんだつたんだろう。小さな、だけれどハツキリ聞こえた声。聞き覚えはあるんだけど、声が小さすぎて、その上意識が朦朧としていたせいもあって、誰だか思い出せない。すっかり混乱して思考が停まるが、鬼の顔がすぐ目の前にあるのに気がついて跳ね上がる。

「今、何したんですか！？」

距離をとろうとして体を引くが、顎を驚掴みにされて阻まれてしまう。私は鬼の大きながしりとした紅い手を掴んで、剥がそうと必死にもがく。そんな私を無視して鬼は呆れたようにため息を吐くと

「これもダメとはナア。ちよいと氣を抜きすぎた力」

一人じりちて顎から手を離し、腕組みした。私は捕まれた顎をさすつて、上田遣いに鬼を見る。

「何をしようとしたんですか？　といつか、今は何だつたんですか？」

「うん？」

「呪いを、掛けていたんですか？」

「ま、そんなものだ」

そんなものって……。身構えて訊いた私の質問に、肩をすくめて  
気軽げに鬼が言つたので、どこか拍子抜けしてしまつ。鬼はぽんと  
自分の足を叩き、立ち上ると大きく伸びをする。

「とにかく飯は用意しよう。今日はもう寝ると良いかな」

踵を返して、二つもの襖に向かおうとした鬼に慌てて声をかける。

「ちょっと待つてや。今もう寝ないんですか？ お腹ペコペ  
コなんです！」

「ああ、分かった分かった

振り返らず、紅い手をひらひらとさわる鬼。本当に分かっているの  
かなあ。眉を寄せて顔をしかめる。

それにも、せつのある感覚、あの声。あれは一体……。  
様々な疑問と不安を抱きつつ、私は襖を開ける紅い背中を見送つ  
た。

「いりそつ様でした」

両手を合わせて頭を下げる。今日のメニューは鰻の蒲焼きと白いご飯に豆腐のお味噌汁。最近はご飯が贅沢になるとさもしばしばつた。相変わらず籠の中ではあるが、今のところ鬼の反感を買つことなく穏やかに過ごしている。

鬼が私の声を合図にぐら寝をやめて起きあがる。鬼の大きな紅い足に朱色の着物を踏まれないよう、ちょっとだけ裾を引き寄せる。

「俺は今から出掛ける」

言いながらかけ盤を片手で持ち上げ、鬼はぽんぽんと私の頭を軽く叩く。それを不愉快に感じてその手を払いのけたかたが、そんなことが出来るわけもなく、ぐつと我慢してなされるがままになる。

「暇かもしれないが、まあ、のんびりしていれば良い力ナ」

言つだけ言つて鬼は籠の出入口へと向かつ。慌てて私はその背中へと口を開いた。

「待つて下さい。あの、子鬼を呼んでも良いですか？」

「ダメだ」

鬼は首を横に振り片手で籠に鍵をかける。

私は肩を落とした。テレビも本もパソコンもないのに。一人では

何も出来ないじゃない。まだ子鬼がいれば色々話を聞けるし、淡藤局さんも呼んでもらえるのに。そしたらあの人魂のことも何かしら分かるかもしないというのに。

ふうと息を吐いて、手元の朱に視線を落した。

「帰つたら構つてやう。それまでいい子にしていろよ」

肩越しにニヤリ笑んで襖を足で開けると、向こうの間に紅い鬼は消えていった。

正座していた足を崩して膝を寄せる。今日も耳を澄ませば遠くの方で喧噪が聞こえた。最初耳にしたときは、聞こえてくる声や音に怯えていたが、今はもうすっかり慣れてしまった。私は結構凶太い神経しているのかな？ それとも人間つてそんなもの？

特に意味もなく着物の模様を眺める。朱の空に金の雲と雀が刺繡されていて、どこか可愛らしかった。籠の隅に目をやれば、鬼がくれた漆塗りの化粧箱が目に入る。中にはシンプルだけど豪華なかんざしや、細工が素晴らしい帯留めに小さな手鏡が入っていた。

はつきり言つて興味がなかつた。もちろん全くないと言つたら嘘になるけど、ずっと眺めていられるほど魅力的に思えなかつた。もしかしたら専門家の人を見たら泣いて喜ぶくらいの逸品かもしれないけど、私にはその価値が分かりそうもない。

ふと異変を感じた。相変わらず遠くから喧噪が聞こえるけれども、なんだかいつもと様子が違つておかしい。立ち上がり木目調の天井を見上げて耳を澄ませる。上方でまるで運動会でもしているかのように、足音や物音が騒がしく聞こえる。と思ったら途端に静かになりまた騒ぎだす。なんだつていうんだろう。

気になつて天井に声を掛けるが、返事はない。何かあつたのかな？

また静かになつたので、首が痛くなる前に視線を天井から外し、

ふいに格子の向こうに田をやつたその時。襖から見慣れない瞳がこれでもかといつぐらい、見開かれた目でこちらを覗いていた。ぎょっとして立ち上がり身構える。

細い闇から襖にそろり掛けられたのは、長い褐色の爪。それが襖を大きく開き濃い黄色の角が見えたかと思つと、のそりと何かが部屋に入ってきた。

何？ 誰なの？ 一気に全身の毛が逆立つような感覚に襲われ心拍数も急激に上がり、喉からドクドクという音が鳴る。手足が震えて汗が至るところからにじみ出てきた。

子鬼が騒いでいたけれど、この妖怪と関係があるの？ 額から鋭く伸びる一本の角を見て、すぐに鬼だと分かつた。ただ真っ黒な長い髪が畠を引きずり、猫背でこちらを見つめている様は、今まで見た妖怪とは比べ物にならないほど異様で危険な感じがした。

「だ、誰？」

籠の格子から離れて声をかける。その鬼が灯籠のすぐ脇に來たとき、その姿がより鮮明に浮かび上がつた。自分と似たような格好の、緑と青の単衣を羽織り、真っ黒な長い髪が畠の上に垂れている。顔はまるで般若のような顔をしていて、下から恨めしげにこちらを睨んでいた。

「あの……」

「恨めしい」

低い掠れた声でもう一度恨めしいと鬼は言つた。なにが、誰が恨めしいんだろう。

混乱する頭をなんとか押さえつけて、なるべく丁寧に私は田の前の鬼に言つた。

「あの、紅い鬼さんは今いないんですけど」

途端にざわざわと睨まれ思わず口を閉じる。どうしたら良いんだろう？ 話が通じそつもない相手にどうして良いか分からず、がたがた震える手で顎の汗を拭う。

「欲しい……」

「え？」

私が聞き返したと同時に鬼は格子に飛びついた。そして激しく狂つたように格子を揺さぶり、それに対しても反射的に飛び退いて、強く背中に格子をぶつけた。

「欲しい！ 欲しい！ お前を喰わせろ！ 全てよこせええ！」

顔に幾つもの皺を刻ませ、黄ばんだハ重歯をみせつけるように、口を大きく開いて鬼は私に怒鳴った。格子がみしみしと嫌な音を立てているが、鬼はそれでも構わずに白い格子を激しく揺さぶっている。まさか……入つてくる気！？

そう思つたが早いか、格子がプラスチックのボトルのようにひしやげ、鬼が私の首に手を伸ばした。獣の爪のように鋭い爪先が襟元を掴んだ瞬間、突然鬼が悲鳴を上げた。

「きこつー！」

聞こえた叫びに目を向けると、久しぶりに見る縁の子鬼の姿がそこにあつた。子鬼は鬼の足下に槍を突き刺し、顎をしゃくつて私に何かを訴えている。

「邪魔だあ！」

青い着物の裾が舞うと同時に、緑の影が宙を舞う。子鬼が蹴られる。明るい緑の上に、深い緑が鈍い音を立てて何度も転がり、少し滑つた後やつと止まつた。

「子鬼つ」

駆け寄ろうと一步踏み出しが、目の前の鬼がそれを阻む。長い爪が鼻先に迫り、何かを考えるより先に、すぐさま体を伏せた。頭の上を勢いよく何かが通り過ぎて頭の髪を何かが掠める。

気づくと私の体はすでに籠から出ていて、すぐ横に子鬼がよろよろと立ち上がつていた。後ろを振り返れば鬼が手前の格子と同じよう、奥の格子をぐにやりと曲げていた。

「大丈夫！？」

子鬼に手を貸そと腕を伸ばすが、いらんと払いのけられ伸ばしたものを見つめる。子鬼は息を大きく吸い込むと槍を構えた。しばらく微動だにせず、籠からおもむろに出てくる鬼を睨みつけていたが、突然畠に足を激しく打ち鳴らした。

天井全体がガタンと揺れる。そしてまた、先ほど聞こえたドタバタという騒音が遠くから次第に強くなると、天井からいくつもの四角い蓋が外れ、緑の影がいくつも降つてきて、部屋はあつという間に緑の頭で覆われてしまつ。

降りてきた子鬼の手にはそれぞれ一本槍や三つ叉の槍が握られており、大勢の子鬼が髪を振り乱している鬼を囲んでいた。

「きいつ」

裾を引っ張られ後ろを振り向く。見慣れた子鬼が開放された襖を指さし、顎で行けと訴えた。

「逃がすかあ！」

鬼の叫び声を合図に子鬼たちがそれに飛びかかる。顔をめがけ飛び上がり、別の子鬼が動きを止めるために着物の裾を引っ張るが、捕まれば宙に投げ出され蹴りとばされ、鋭い爪で小さな体に痛々しい線を刻まれる。子鬼の攻撃に鬼はこれでもかと地団太を踏み、言葉ではない雄叫びを上げながら髪を搔きむしる。

狂つてゐる……。

髪を振り乱し、奇声を上げながら子鬼たちを一心不乱に払いのける姿を目にして、私は立ち尽くした。

この鬼はいつたいどうしてこんなことをするのだろう？　いつた  
い何故怒り狂つているのだろう？　私はなぜだか、その姿に哀愁の  
ようなものを感じた。

ドンと重い衝撃を覚えた。足を子鬼が槍の柄で強くつついたらしく、イライラした様子で襖の闇を再度指さした。

そうだ。これ以上私がここにいたら子鬼たちの邪魔になる。私は頷いて、真つ暗な闇の中へと飛び込んでいった。

しかし勢いよく飛び込んだものの、廊下は真つ暗で何も見えない。手探りで前に壁があるかどうか、確かめながら籠の部屋から遠ざかる。

それにしてもどこへ行けと言つんだろう。いつも子鬼に連れられていたので道が分かるわけでもなく、とにかくひたすら足を進めた。

途中後ろの方で、叫び声や鈍い音が今いる場所まで聞こえて来るこ  
ともあつたが、ここに鬼がくる気配はなさそつだ。

しかし、早いところ明るい場所に行き着かないと、このままでは  
どうする事も出来ない。万が一、こんなところでまたあの鬼に襲わ  
れたらひとたまりもない。

襖から漏れる光を見逃さないように、慎重にあたりを伺いながら  
闇の中を進む。

時折聞こえる奇声に怯えながらしばらく廊下を進んだ頃、ようや  
く青白い光が漏れている襖に行き着く。ほっとしつつも、どこか緊  
張しながら探りあてた取っ手を手に掛けて、掠れた音を立てる襖を  
ゆっくり横に滑らせた。

私は目を少しばかり見開いた。旅館の宴会場みたいな横にだだつ  
広い部屋。そして襖が全て取り払われた景色から見える、今にも消  
えそうな、まるで線で書かれたような三日月が暗い空に浮かんでい  
た。

部屋に入つて襖を閉め、三日月の見える手すりに近寄り闇のパノ  
ラマを見渡す。暗闇のせいか建物らしい建物は見えず、あの沼の光  
景と同じように闇の中で様々な輪郭が見え隠れしていた。視線を下  
へやつてみると、より暗くて何も見えない。

そのまま身を乗り出した状態で、私は何の用意もなく手すりに強  
くお腹を打ちつけた。声のない、息だけの悲鳴が口から漏れて、背  
中に激痛が電撃のように走る。手すりが軋みを上げて私を支えたま  
ま崩れていき、一度何かの角にわき腹をぶつけ、視界が暗い天井、  
赤褐色の屋根、そして真っ暗な空と赤い月を順々に映していった。

最後に田の端での般若顔を捉えた時には、すでに自分の黒髪が  
視界を覆い、髪の毛が全て逆立つていた。そして次の瞬間、下つ腹  
がひんやりとしたかと思うと、般若顔と紅い月が上へ遠ざかり小さ

くなつていく。

私はなす術なく、両者が見下ろす中落ちていつた。

## 第六怪 灰駄く

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんだつてこんな事に。見て見ぬ振りをすれば良かつたか。  
汚い濡れ雑巾のような人の子を見て、ぎりりと口を歪ませたが、  
やはり死なす事は出来なかつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ、この感覺。

既視感を覚えると同時に、体中がぎちぎちと鈍い音を立てている  
のに気がつく。そして手足の痛みに呻き、起き上がろうと体に力を  
入れた瞬間、背中に亀裂のような痛みが走つて、私は思わず叫び声  
を上げた。

「静かにしろつ」

不機嫌な声が壁か何かに反響してこだまする。

うつすら目を開く。表面が光つたごつごつとした薄暗い天井と、  
それと同じ丸い壁。それを何度か瞬きした後に、やつと洞窟の中だと  
理解する。

「誰? ここは、どこ?」

声の主を捜して田を辺りに走らせれば、惡々しげに自分を見下す影があつた。

それはついいの聞合つたばかりの、老いた髭河童だつた。

「あなたは、あの時の河童 」

「黙れっ」

田を細めて吐き捨てるとい、髭河童は乱暴に私の胸ぐらを掘み上げた。

「お前など、貪欲の鬼様のものでないなら助けなかつた！ まつたく運の良い人間めっ」

激しく凹凸のある床へ叩きつけられ、悲痛の声を上げて咳込む。どうしてこんな乱暴なことをするの？ 体をくの字に曲げながら横田で老河童を見つめ、咳をなだめようと胸をあすつた。

「い、いはワシ等河童の住処だ」

「河童の？」

上体を支えながら起きあがらうとするが、また痛みが走り仕方なく体を横たえる。

冷たい床は塗れていて、自身も頭からつま先までびしょ濡れになつていた。自分の身に一体なにが起こつたんだろ？

「ああ。だがお前さんを溺死させるわけにはいかんから、正確には住処の近くだがな」

「そう、ですか。あ、あの、ありがとうございます。助けてくれたみたいで」

痛みに顔を歪ませながら礼を告げる私に、やはり毘河童は渋い顔を向けるだけだった。そんなに人間が嫌いなのかな。

「とにかく紅い鬼様にお前のことをお伝えする。それまでここで待つておれ」

「あ」

「ここまで詳しい話を聞いたかったのだが、私の声を聞く前に河童は踵を返し、暗がりへと消えて行つた。

その様子を田で追つたあと、はあつと私は息を吐いて田を閉じた。

ほんとに、大変な田に遭つたなあ。

土蜘蛛の次は鬼女だなんて。この次は一体なに襲われる事やら。心の中で茶化してみるけれど、気持ちが軽くなるはずもなく、やはり泣きたくなつた。

どうして私が狙われたんだろう？ また土蜘蛛みたいに何かの計画のために襲つてきたのかな？ もしそうだとしたら、鬼の屋敷は思つたより警備が薄いのだろうか。

土蜘蛛の時は知つて入れたんだろうけれど、今回の鬼女は子鬼達が襲つているのを考えれば、招かれざる客っぽかつた。

あの鬼は恨めしいと言つていた。そして般若の顔をして気が狂つたみたいに叫んでいた。「お前の全てを寄越せ」と。

あれは、どういう意味なんだろう。

ぴりぴり肌が痛む中、様々な考えを巡らしていると、また暗がり

からひたひたといつ音が耳に入ってきた。河童が帰ってきたのだろうか。

「お怪我はあ、如何でしょううか

聞き覚えのあるぐぐもつた声。はつとして目を見開き、声のしたほうへ視線を投げた。

暗がりに立っていたのは、あの鬼の屋敷で働いていた魚の人だつた。

「魚さん……ビーフヒーフに?..」

「わたくしはあ、あなた様のことを耳にしてえ、先に泳いで参りましたあ」

私のそばまでのそのそ歩いてくると、まだ濡れている着物の帯から丸くて平たいものを取り出し、傍らに座つた。

魚さんはどこから泳いできたんだろう? まさか鬼の屋敷から泳いできたんだろうか。だとしたら、そんなにここは紅い鬼のところから遠い場所ではないのかもしねれない。

「これをお体に塗ればあ、痛みは引きますう」

ひんやりとした水搔きの付いた手で、私の右腕を上げる。その途端、びりつとした痛みが腕に走り、口から悲鳴が漏れた。

そんな私を労りながら、てらてらと灰色に光る手が揺れると、腕に冷たい物が触れ次第に全体を包んでいった。

それを目で確認しようとしたとき、初めて自分の上半身が肌着だけの格好だと気が付いた。

「あれ？ 私、着物を着てない」

「あなた様はお屋敷から落ちた後お、通りかかった龍の角にひっかかりい、そのまま川に潜られ、捨てられてしまったのです。そしてえそこで河童殿に助けられたのです。着物は川に入った時に、おそらく脱げたのでしょうか？」

その話を聞いて目を丸くした。

龍の角に引っかかるなんて、そんな奇妙な体験をしていたんだ。暢気なことを思いながらも、その角が体を貫かなくて良かったと安堵する。

それにしてもひどい有様。薬を塗られている腕を見ると痣や擦り傷だらけで、未だに血が滲んでいる。

自分がどういう状態で河童に発見されたのか、想像もつかない。

「申し訳え」いやこません……

ふと蚊の鳴くような咳き声が聞こえ、傷だらけの腕から魚さんに目を向ける。

「まさか、このような事にいなるとは……

薬を塗っていた手が止まる。それから溜息のような風が私の肌を撫でると、また水搔きの付いた手が再び肌の上を滑り始めた。

「魚さんのせいじゃあつません」

どうして謝るの？ どうこちなく笑んでみせる。

すると大きな銀色の目がくるりと回り、そこに私の傷だらけの顔

が映つた。

ああ、顔にも傷があるんだけど、ちょっとだけショックを受ける。

「いええ、わたくしのせいです

なんで謝るんだろう？ 首を傾げて尋ねるが、魚さんは俯くだけで何も話さなかつた。やはり使用人という立場から、責任を感じているんだろうか。それとも紅い鬼にすでに怒られてしまつたのだろうか。

「よく分からぬですけれど、こうして助けにきて、心配してくれているじゃないですか」

ふふつと笑いながら『元気出して下さい』と声をかける。それをどう思つたのか分からぬけれど、魚さんはずっと一言も喋らず、黙々と薬を塗り続けた。

またなにか気に障つたことを言つたのかな。

不安に思ひながらも、私も黙つて大人しく薬を塗られていた。

「もうしじばらくすれば、痛みが引いてきます。そしたらわたくしがあ、ここからお連れいたします」

全身に薬を塗り終えた頃、ようやく灰色の口が動いた。薬の入れ物を帯の間に仕舞い込み、私の衣服を整えてくれる。

「鬼のところへ帰るの？」

魚さんはなにも言わない代わりに、懐から何か飲み薬のような物を取り出すと、そつと私の口元に添えた。

「これをお飲み下さい。痛み止めです。これを飲めば眠りに落ちてえ、起きたときには着いております」

「うん、ありがとう」

私は気持ちばかり顔を上げ、口元に添えられた薬を飲んだ。魚さんはそれを確認すると私に気を使って、上げた頭を下ろすのを手伝ってくれた。

私の頭がまた横たえられるた時、魚さんはおもむろに口を開いた。

「実はわたしは、元は鬼だったのです」

「へ？」

突然の告白に私は目を見開き、まじまじと魚さんの顔を見た。つるりとした頭を見ても角があつた形跡はみられないし、無表情に見える顔を見ても、鬼とは似ても似つかわない。とても鬼には見えない。

魚さんは私の視線から逃げるよつに俯き、ぽつりぽつりと話しだした。

「これでも少しあは、名を馳せておりましてねえ。そこのの妖怪や土地神を、見下してえおりましたあ。しかし、ある川の主の怒りをかつてえ、このよつな無様な姿に変えられましたあ」

「怒りをかつた？」

「ええ……」

両田で灰色の鱗に包まれた横顔をみつめ、私は頷いて続きを促した。

「わたしはあ、悪戯に川の魚を捕つては殺しい、岩を投げては川をせき止めておりました。わたしにとつてはあ、ほんの悪ふざけだったのですがねえ」

愚かでしよう? と、銀色の田がくるりと私に向けられる。私は何度も田を瞬かせてから言葉を選び、口を開いた。

「えつとでも、今は反省してこるんでしょう? 川の主様には謝つたの?」

私の言葉に、ふるふると魚さんは首を横に振つた。

「当時はあ仕返しする」とばかり考えてしまつて、反省などしませんでしたあ。しかし、時は流れてえ川の主に謝つと決めたときにはあ、川の主はいなくなつておりましたあ」

「いなくなつた? ビニカに行つてしまつたの?」

またくるりと淀んだ銀色が動き、ビニを見るわけでもなく田をさよわせた。そして小さく息を吐くと一咄。

「主が死んだのです」

「死んだ?」

眉を寄せた私に、じくじくと魚さんは頷いた。

「川は主がいなくなり、ただの川になりました。そしてその川はあ、今やドブ川と成り果てましたあ」

深く溜息を吐いて、また消え入りそうな声で言つた。

「私はもう、元の姿に戻ることが出来なくなってしまったのです」  
それから黙り込んだ魚さんに、なんて声をかけて良いか分からず、私も一緒になつて黙ってしまった。

ドブ川になつたつて、多分、私たち人間のせいだよね。  
確かめてみようかと口を開きかけたが、何にも読みとれない灰色の横顔を見ると尋ねる気が失せてしまい、声を出すのをやめた。

お互いが沈黙してから間もなく、私の瞼は次第に重くなつていつた。薬が効いてきたのだろう。痛みとともに意識もぼやけてくる。

「お薬があ利いてきたのですねえ」

「やう、みたい」

朦朧としながらも、私はやつと口を開いた魚さんに応えた。そして、まだ悲しげな魚さんに声をかけた。

「そんな顔しなくても、大丈夫ですよ。もし良かつたら今度紅い鬼さんに、鬼に戻れる方法を一緒に聞いてみましょう。何か、分かるかもしけないですよ」

意地悪だけどねと付け加えて、ひどく重くなつた瞼を閉じる。ぐにゃぐにゃと揺れる意識の中、自分の体が抱き起こされるのを感じながら魚さんがどうして私に今の話をしたんだろうと考えた。

もしかしたら、鬼にいじめられている仲間だと思って、その気持ちを打ち明けてくれたのかかもしれない。何度も目に会ったときも、名前を聞いてはいけないはずなのに尋ねてくれたし、あの時から私のことを仲間だと思つていれくれたのかな。

少しばかり自惚れかなと内心苦笑していると、くぐもった声で魚さんが私に囁いた。

「あなた様は、人の世界に戻りたいのですか？」

「……え？」

「それとも紅い鬼様のところに、戻りたいのですか？」

なにを言つてこるの？

そう尋ねようとしたけれど、私はもう既に睡魔に抵抗する事が出来ず、そのまま眠りに沈んでいった。

## 第七怪 銀の瞳

「紗枝様、紗枝様」

「え……？」

一瞬誰のことを呼んだのか分からなかつたが、自分の本名だと気が付き戸惑いつつも目を開けた。

「お田覚めにい、なりましたかあ」

薄暗い中、自分をのぞき込む銀色の瞳と田が合ひ、まだ少し重い瞼をこすり気がつく。

あれ、痛みが引いてる。

瞼をこすった腕を眺めると、多少傷跡はあるが痛みも腫れも無く、痣も見あたらなかつた。

すごい。あれだけの傷がもうここまで良くなつているなんて、妖怪の薬は人の薬よりも効果が大きいみたい。

何で作られているのか少し気になるけれど、妖怪の薬だということもあり、そこは知らない方が良さそうに思えて考えるのをやめた。知らぬが仮つて言うしね。

「薬があよく効いたみたいですねえ、紗枝様」

ぐぐもつた声を耳にして、腕を見ていた目を魚さんへひたりと向ける。

魚さん、今、私のことを紗枝って呼んだ……。もしかして、私を起こした声も魚さんだったのかな。

私は少し思案した後、意を決して息を吸つた。

「あの」

「はい？」

「今、私のことを紗枝つて……」

不安げな面もちで魚さんをみつめる。

本名を口にするのは鬼に禁止されているし、とても危険なことは多分、未だに意味がよく分かっていない私以上に分かっているはず。なのになんでいきなり私の事を本名で呼ぶんだろう。会つたのだから、片手に収まるぐらいしかないのに。

不安に眉を寄せる私に、魚さんはふつとぎゅういちなく笑みを浮かべながら平たい手を何度も裏返し、くるりと銀色の皿を私に向けた。

「紗枝様のお名前は、はじめの頃にお会いした時、紗枝様から教えて頂きましたあ」

「いえ、そういう事ではなく、鬼さんから本名は言つたりやいけないって言われていたじゃないですか」

「いは」ならあ、大丈夫です」

鱗と同じ灰色の唇をにこりと歪ませる。逆にそれが私にとってより不安をあおつた。

魚さん、なんだか様子がおかしい……。

訝しげに表情が読みとりにくい顔を眺めた後、今自分が横になつている部屋を、落ち着かない気持ちで見渡す。

なんだか旅館の客室みたいで、床の間には墨絵の掛け軸が飾られ、部屋の隅には数枚の座布団が重なつていて。広さは私がいた籠の部屋と同じくらいだ。

部屋を照らすのは、外側の薄い障子に暖色系のぼんやりとした光。籠の部屋とは違つて外からは賑やかな雜踏が聞こえてきた。

やっぱつーじ、紅い鬼の屋敷じゃない。

「あの、ここはまだですか？ 魔さんとのこに帰つてきたんじやないんですか？」

「紗枝様は、紅い鬼様のところへえ、帰りたいのですかあ？」  
わけの分からぬ質問に私は居心地が悪くなり、ゆっくり上体を起しそうとすると、魚さんが背中を支えて起しその手を手伝ってくれる。

私はその手が離れるのを感じた頃、魚さんに顔を向いた。

「それは、その、どうこつ意味ですか？」

掛け布団をぎゅっと握つて、そこに視線を落とす。

あの紅い鬼のところに行きたいわけがない。でも行かなければ鬼との契約がダメになる。今はあやふやになつていてるところもあるけれど、私から破れる事じゃない。

したいしたくないの話ではないのだ。

「（友人のこ）とはあ、諦めて下さ（ませ）

ぐぐもつた声に勢い良く顔を上げる。

予想もしなかつた言葉に目を見開き、一気に様々な言葉と疑問が浮かんでくるが、そんな混乱した状態でまとまる筈もなく、ただ口元を歪ませた。

「ですからあ、紗枝様はお帰りになることが出来るのです」

ちらりと様子をうかがうような視線を向けられる。

私は何度も口を開け閉めした後、よつやく震える声で魚さんに尋ねた。

「ねえなんでそんな事言つの？ 何か知つているの？」

「紗枝様はあ、人の世界に帰りたいのですかあ？」

「話を逸らさないで！」

顔が紅潮している。それを頭の隅っこで感じながら、灰色の肌を包んでいる着物の裾を掴んで叫んだ。

魚さんは表情を変えずに、ただ行儀良く座っている。私は少し深呼吸をすると、自分に落ち着けと言い聞かせながら声を抑えてもう一度魚さんを見つめた。

「諦めろつじじつして？」

「（1）友人はあ、帰ることは出来ません」

「だから、なんで？」

魚さんは俯き、氣の毒そうに顔を横に振った。

「そのお方はあ神通力をお持ちの人でえ、すでに他の鬼様とご契約されましたあ」

口と手足がわなわなと震え、目眩が襲つた。

他の鬼と契約？……契約つて？

よろける私に魚さんが慌てて私を支える。

「大丈夫ですか？」

「待つて。それ、本当っ？」

自分を支える灰色の腕を掴んで、両手で淀んだ皿をのぞき込む。お願いだから「冗談だと言つて欲しい。

「ええ」

私の気持ちとは逆に、魚さんは「ぐりと頷いた。

銀の目は血の氣の引いた私を見、すぐ下の布団へと視線を逸らす。その様子に些か苛立ちを覚える。

「もしかして、紅い鬼さんと最初に契約した子？」

「それは分かりませんが、髪が短くとても小さな娘でしたあ」

あの中で髪が短い女の子はみつちゃんだけだった。でも、鬼と契約したってどうして？

もしかして捕まつてそつせざるを得ない状態になつているつて事？

それとも私を助けようとして？

紅い鬼はこの事を知っているの？

みつちゃんは今どうしているの？ 無事なの？

次から次へと嫌な考えが浮かび、ますます血の気が引いてくる。泳がせていた目を再び銀色の目へ戻して、縋るように水搔きのついた手を掴む。

「みつちゃん、その子と魚さんは会ったことがあるの？」

灰色の口が気持ちほど開く。しかし一度閉じると、消え入りそうな声で答えた。

「……一度だけですが、あります」

「どうで？」

魚さんはきょりきょりと目を泳がせたが、小さく息を吐くと首を小さく横に振った。

その息を吐いた口がいくら待つても開きそうにないので、私は懇願した。

「お願ひ、親友の子かもしれないの！ お願ひよ

魚さんは居心地が悪そうに身じろぐと呟いた。

「座敷牢です。紗枝様と一緒にいたあ、人の子でした。それは確かです」

座敷牢ということは最初みんなで捕まつた時ということかな。

でも、それならやはり魚さんと言つてゐる髪の短い子つて言つのはみつちゃんに間違いない。

だとしてもなんで戻ってきたの？ しかも鬼と契約しただなんて。帰れないだなんて。

わなわなと身体が震えた。

どうしたら、どうしたら良いんだろう？

「お氣を確かに……」

そつと水搔きの薄い膜が、自分の頬を掠める程度に撫でた。

「わたくしはあ、紗枝様にずっとこの常闇にしてほしいのです」

思考の海から突然、引き上げられる。突然の言葉に思考が停止し、動きも停まる。

そして視線をおさるおさる魚さんへと向けた。

「紗枝様」

いつもは淀んでいる田が、今は澄んだ水のよつて透き通り、まつすぐ私を見つめている。

私は思わず息を呑んで緊張してしまった。  
ゆらりとあの紅い鬼のように妖しく、銀色に光る瞳に見つめられ、私は蛇に睨まれた蛙のように固まっていた。

静まり返った部屋の中、外の喧噪が聞こえるだけで他に音はない。一人とも石のように見つめ合つたまま、しばらく微動だにしなかつたが、魚さんの田がまた元の淀んだ銀色に戻ると、魚さんはそれを私から逸らした。

気まぐれ空氣の中、私は口を堅く結んだ。

魚さんは何を考えているんだろう。どうしてそんなふうに思つんだろ。

この状況をどうして良いか分からず、私は唇を噛んで俯いた。

「鬼様のところへ行くにはあ、少しばかり時間がかかりますのでえ、この宿をとりました」

何事もなかつたかのように、淡々と話し始める魚さん。  
それでも私はまだ顔を合わせることが出来なくて、ただ手元に視線を落とした。

「おお、お休め下されこそせう」

銀の瞳を灰色の陰に隠し、薄い手が揃えられると頭を下げる。私はそれを目の端で見た後、はつと思い出して、立ち上がりつつしている魚さんに、慌てて詰め寄った。

「待つて魚さん！　話はまだ終わっていないわ！　肝心なことをき  
ちんと話して」

「紗枝様」

部屋の中に、私の言葉を遮った声が波紋のように響く。

銀の瞳は相変わらず下を向いていて見えないが、ぐぐもつた声だけはまっすぐ耳に届く。

「わたくしもおこんな姿ですが、これでも妖怪の端くれでござります。ゆめゆめ御自身があ、ひ弱な人の子だといつ事をお忘れ無

1

有無を言わせない口調に、私は初めて魚さんに対して紅い鬼と同じような気持ちを抱いた。

それこそが、魚さんが元は鬼だったという確かな証拠に思えてならなかつた。

## 第八怪 橙通り

今はもう廃れつつある懐かしい情景がそこであつた。賑やかな通りを彩る光は、ネオンや蛍光灯などの電子的な明かりとは違う、傳くも懐かしいオレンジや朱色の光で溢れていて、様々な形の着物や浴衣を照らしていた。

「ちよいと寄つていかないかい？」

「新しい酒が入ったよ。」

「旦那、これなんかどうだい。たいしたもんだよ。」

店から通りを歩く影に威勢良く声をかける店主たちと、それらを聞きながら店先に並ぶ品物を眺める客たち。

鉢巻を頭に絞めた一つ目の大男。蛇のよじこじをちらちらとせる酒屋。店から顔を出すのはどれも大柄な店主が多いようだ。

お客様はかんざしを品定めしている青白い女性に牙をむきだした青年、猫目の少女。そんな一見人の姿をした妖怪もいれば、狐や川獺、狸などの動物の姿をした妖怪もいる。

「ひつじにらおいで下さい。」

呼びかけられ、振り返る。

笠から垂れる薄布のむじに手招きする魚さん。見え、困惑いつもそむく進む。

「はぐれないよつこい、お氣をつけくださいませ。」

「魚さん」

声に不安を含みながら、ぎゅっと茜色の襟を掴む。

「大丈夫です。その笠を被つていれば、平氣ですか？」

少し前に宿の格子から外を眺めていた私に、魚さんが茜色の浴衣を手にして、せっかくだからこの通りを見学しようと提案してきたのだ。

妖怪の群に飛び込むなんてとんでもない。

私は断つたが魚さんは私の意見を無視して、浴衣に着替えた私を半ば強制的に通りに連れ出したのだった。

その際に小さな桜色の匂い袋と薄布のついた笠を私に渡してくれた。これを持つていてことによつて、人間の匂いと気配を消してくれるらしい。

「これはあどうでしようか？」

薄い手には金色のかんざし。それを私に見せる。

それを一瞥した後、魚さんにだけ聞こえるくらいの小さな声で話しかけた。

「魚さん。そろそろ紅い鬼さんの所に帰らなないと……」

「大丈夫です」

不自然に灰色の口元を歪ませて笑う。本当に大丈夫なのだろうか。さき程からそればかりだ。

私がうんざりしているのも気にとめず、また違う店先へと足を進める。私は仕方なくその後を追つた。

魚さんはなにを考えているんだろ？。普通失くし物を見つけたら、

すぐに届けようとか考えないのかな。自分の主人の探し物なら尚更だと思うんだけど。

魚さんはずっと紅い鬼に連絡を入れるそぶりも、帰る素振りも見せていない。本当に紅い鬼のところへ帰る気はあるんだろうか。

眉間にしわを寄せながら、様々な妖怪たちがひしめき合つかを黙々と歩く。

ふと、ちらりと小さな人影が私の目に留まった。様々な服と肌が交差する向こうに、白地に黒の格子柄をした浴衣が見え隠れしている。

いまの。あれって、もしかして人間？

最初座敷童かと思ったのだが、そこまで小さな背ではないようだし、仕草や雰囲気的に妖怪では無いように思えた。

魚さんの背を気にしつつ、顔の角度を変えながらその子をよく見ようとした目を細める。

小柄な人影は髪が短いけれど、オカッパではない。

あの丸い髪型はどこかでみたことが……。

次の瞬間、はっとして声を上げた。

「みつちゃんっ」

弾けたように叫ぶと、私は恐怖を忘れて道行く魑魅魍魎の背中を押し分けてその後を追つた。

「待つて！」

一瞬振り返った彼女の横顔が見えた。が、すぐさま妖怪の群に埋もれて見えなくなってしまう。

「みつちゃん、待つて！」

袖を挟まれないよう脇に挟み、時折転びそうになつては『すいません』と頭を下げつつ見えた影を追つた。

嘘だと思いたいし幻だと思いたい。でももし、本当に彼女だとしたら？ まやかしでもない本物の彼女だとしたら？

「待つて！ 待つてよー！」

必死に笠を掴みながら大小異なる影をかき分けていくと突然視界が開け、すこし静かな橋の前に出た。

振り返れば賑やかなオレンジの通りが見え、前を向けば対照的に暗闇の中で柳の葉が風になびいている、なんとも物悲しい風景が広がつていた。

「みつちゃん！」

胸の前で両手を拳にしながら叫ぶ。

「紗枝ちゃん……？」

闇の中から声が聞こえ、肩が跳ねる。びくびくと鳴る胸を押さえながら辺りを見回す。

どこから聞こえるの？

きょろきょろと見回しながら橋を渡り始める。

「みつちゃん、どこ？」

「紗枝ちゃん。じつちだよ。橋の下」

橋の手すりに近寄り、おそるおそる背筋に冷たいものを感じながらトをのぞき込む。すると薄暗い川岸に見慣れた姿があった。

マッシュコルームカットの丸い髪型。小さな背。もじもじと何度も動く指。蒼白い顔。

田の前にするまで信じられなかつたけど、本当だつたんだ……。

「みつちゃん……」

震える足を叱咤しながら、私はまた見失つてはいけないと彼女の元に駆け寄つた。

「本当に、本当にみつちゃん？」

緩やかな手を降りきつたといつて、私は確認するよつて小さな影を瞬きも忘れて見つめ続ける。

私の視線に居心地を悪くしたのが、みつちゃんは田を泳がせながらも、小さな顎をこくんと頷かせた。

「みつちゃん……」

私は駆け寄つて彼女に抱きついた。

「みつちゃん、良かつた。本当に良かつた！ 無事だつたんだね！」

「うん……」

遠慮がちに肩に手が添えられる。

よかつた！ 生きてた！

土蜘蛛が言つていたように他の妖怪に襲われていたんじゃないかな

と不安に思つていたけれど、ちやんと無事だった！

彼女の存在を確かめるように、少し強めにみつちやんの体を抱きしめた。

「紗枝ちゃん、『ごめんね』

「みつちゃん。無事でよかつたよ」

彼女が元の世界に戻つていれば一番良かつたんだけど、久しぶりに心から安心できる友達にあつて私は舞い上がつていた。不謹慎だと分かりつつも、みつちやんに出来て嬉しくてたまらなかつた。

「しばらぐ会えた」とこお互い喜び合つていたが、私があることを思い出して、抱き合つていて体をゆっくり離すと正面からみつちやんの顔を眺めた。

「あのねみつちやん、紅い鬼以外の鬼と契約したつて本当?」

その言葉に小さな目を一瞬見開いたが、すぐに俯いて唇を噛むと、申し訳なさそうに頭を縦に振つて『そうだ』と返事をした。

ぐらりと眩暈に襲われた私は、自分に落ち着かせるよう一度深呼吸すると、彼女の顔をのぞき込むようにして言つた。

「みつちやん。私、あの時伝えなかつたけれど、逃げるときにあの紅い鬼と約束して、みつちやん達を返す事になつていたの。『ごめんね、もっと早く言つておけば良かつた』

「そんな……」

みつちやんは咳くように呆然とした。小さな目はみるみる潤み、

私を悲しげに見つめている。

私はそんなみつちゃんを励ますように彼女の肩に手を置いて明るい声を出した。

「でも、今からでも遅くなじよー。一緒に紅い鬼の所に行って、みつちゃんが帰れるように言つから」

もともとそういう約束だったのだ。みつちゃん一人返せないはずがない。それにそんじょそいらの妖怪と違つて偉い鬼みたいだし、他の鬼と契約していくもきっと大丈夫。

私は紅い鬼がみつちゃんを無事に返してくれると確信していた。

「あ、行こよ」

「駄目だよ」

ぱつんと小さな口から声が漏れる。

みつちゃんの喜ぶ顔を想像していたのだが、即答したみつちゃんの表情は相変わらず曇つたままだ。帰れないともう諦めているの？

「他の鬼のことなら紅い鬼がなんとかしてくれるよー。けつこう権力みたいな持つているみたいだから。ね？ 一緒にきて。お願ひ……！」

私は肩においた手を彼女の小さな手に移すと、ぎゅっと握りしめた。

みつちゃんは小さく息を吐き、微かに私の手を握り返してきた。そしてそこに、暖かい涙を一粒落とした。

「紗枝ちゃん……」めんね

「え？」

「……私、

何かを言いかけ、突然はつと顔を上げた。  
凍り付いた顔。蒼白い彼女の顔がさらに蒼くなる。  
彼女のおびえた視線の先へと、自分も恐る恐る振り返る。

「あつー。」

振り返った先には白髪の鬼が、笑みを浮かべながら佇んでいた。  
「何をしているんだい？」

くすんだ着物は風もないのにゆらり動いて、滝のような白い髪は  
どこかでみた夜叉のように鬼気迫るものがある。紅い鬼と対峙して  
いる時と同じように、その冷たい群青の瞳から目が離せない。私は  
金縛り状態になり、石像のようにその場で震えるのも忘れて固まっ  
ていた。

「愚痴の……鬼、様」

途切れがちにみつちゃんが背後で呟く。私は聞こえたみつちゃん  
の声に我に返つて、じりつと身構えた。  
もしかして他の鬼つて、みつちゃんと契約した鬼つて、この夜叉  
のような鬼のこと？

「やあ、時雨。ここにいたのかい？」

しぐれ？

田の前の呆けている私を無視して、白い鬼は私の前を通り過ぎると彼女の肩に手をかける。そして微笑みかけ、みつちゃんに歩くよう頸で促した。

彼女は戸惑い私を一瞬見た。

しばらく見詰め合うが、何かを諦めたように田を閉じて鬼に促されたまま川の方へ歩きだす。

「みつちゃん！」

未だに震える身体を無理矢理動かし、もつれつとも慌てて駆け寄つて、がしり彼女の袖を掴んだ。

みつちゃんは振り返らない。代わりに白い鬼がこちらをちらりと見た。

「ははあ。噂通りの人の子だねえ」

にいと口角を上げると、たくましい蒼白い腕を私へと延ばして、私に叫ぶ暇さえ与えず瞬時に首を捕んだ。

ひゅっと口からすきま風が通るような音が鳴る。

首を強く絞められているわけではないのに、なぜだか息が詰まくできない。

殺されるつ！

「鬼さま！」

悲鳴を上げるのと同時に、みつちゃんが白い鬼の腕にしがみついた。

白い鬼がみつちゃんを見下ろすと、彼女はしきりに首を左右に振

つて小刻みに体を震わせている。

「やめて下さい……友達なの……お願いです」

「そう、か。あい分かつた」

するりと暖かみのない手が首から離れる。

私はその場にせき込み、膝を突いた。

一瞬にして体中に冷や汗が流れ、悪寒が背中を覆う。凍り付いた胸を内側から心臓が激しくしつこく叩いている。

白い鬼はこちらを心配そうに振り返るみつちゃんの肩を抱きながら川の近くに寄つた。ひやりとした空気が頬をなでると、橋の下から屋形船が現れ、みつちゃんたちの前に着く。

「待つて！ みつちゃん！」

裏返つた叫びにみつちゃんはこちらを振り返りじつと見た。そして悲しげに目を閉じると鬼に促されるまま船に乗りこんだ。

丸い黒髪と広がる白髪が暖簾をぐぐり見えなくなると、船はそのまま音もなく川を滑り出した。

行つてしまふ！

追いかけようと足に力を入れるが、膝が狂つたように笑つて言うことを聞かない。叫ぼうと口を開いても、出てきたのはカラカラに乾いた喉の悲鳴だけだった。

さわさわと柳が風に遊ばれて乾いた音を辺りに響かせている。息を整えてようやく膝が黙つたころ、一人きりになつた私は呆然と船の消えた方へと視線を送り続けた。



## 第九怪 白い渴望

川の水面がまた闇夜を鏡のように映しだした頃、ようやく私はのろのろと立ち上がった。

何もかも分からぬことだらけだった。みつちゃんはどうしてあの白い鬼と一緒に行つてしまつたんだろう。脅かされているのとは少し違つて見えた。それに、何か言いかけていたけれども、結局何を伝えたかつたんだろうか。

そこまで考えてはつとした。

そうだ。何にしろ、みつちゃんのことを紅い鬼に伝えて、約束通り元の生活に戻れるようにしてもらわなくちゃ！ こんなところでぼけつとしている場合じやない。魚さんに早いところ鬼の所に戻るようにな言わないと！

そうと決まればすぐ行動。先を急いで振り返つた。

「お待ちください」

「わつ」

いきなり灰色の顔が視界いっぱいに広がつたので、思わず飛び上がつてしまつ。振り返つた先には魚さんが行儀良く手を結んで佇んでいた。び、びっくりした。

「魚さん、いつの間に」

言いかけて先ほどのことを思いだし、開きかけた橈円の口を遮つて早口に説明した。

「魚さん！ わつを長い白髪の鬼がみつちゃんを連れていったの！ 早く紅い鬼さんのところに戻つて何とかしてもらわないと間に合

わなくなつちやうかもしれない！ 早く、すぐに鬼さんの所にいかないと！」

「紗枝様」

灰色の口が少しばかり息が荒くなつた私を諭すよつに咳くと、ふと小さく息を吐いた。そしておもむろに背を向けて黙々と歩きだした。

訳が分からなくて、意味の分からぬ行動に私はどこかもどかしく感じて、思わず『魚さん！』と声を荒らげた。魚さんはその声にちらりと振り返り、ついてくるよつ薄い手で促してきた。

もう、急いでいるのに……。何を考えているのか全然わかんないよ！

腹立たしくなりつつも、私は他に何か良い案が浮かぶハズも無かつたので、しぶしぶ黙つて丸い背中についていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ビリに行くんですか？ 紅い鬼さんのところに帰るんですか？」

何度もかの質問。まったく同じ内容だけど、魚さんはずっと黙つている。答える気がないのかな。

枯れ木と枯れ草が広がる荒野。風が湿つた空氣で草木を撫でる以外は、私たちが歩く音しか聞こえない。後ろを振り返つても、すでにオレンジ色の明かりは見えなくなつていた。

なんだか寒い。ぶるつと体が震える。気温の寒さもあるけれど、別の寒さも感じる。魚さんから視線をはずし、荒野の様子を観察してみる。

月は姿を消し、空はただ真つ暗な闇が広がっていて、辺りは枯れ

木と自分の背丈ほどの乾いた草が生い茂っていた。

それにしても、どうして月明かりもないのに草木がはつきり見えるんだろう。草や木や地面が自ら光っているわけでもないみたいだし、まるで見えない照明がどこからか地上を照らしているような、不思議な光景だ。

沈黙と寒さに心が支配されようとしている中、早く紅い鬼さんに会いたいという気持ちだけで、私の心は支えられている状態だった。もちろん会いたいというのは友好的なものじゃ決してない。あくまでみつちゃんをきちんと返せる約束を果たしてもらつためだ。

でも、はつきり言つて私は混乱している。

何がなんだか分からない。

みつちゃんも。魚さんも。紅い鬼も。

……。

紅い鬼に関しては元から意味が分からぬから今更なんだけれど。でも魚さんとみつちゃんに関してはなにか引っかかる感じがして仕方ない。とても複雑な感じがする。

「あ……れ……」

小枝を踏んだところで我に返り、辺りを見回す。

「魚さん?」

右に左に視線を走らせるが、魚さんの姿が見あたらない。見えるのは自分より背の高い枯れ草ばかり。

ま、まさか、はぐれた?

ざつと勢いよく血の気が引いた。荒野に一人。あたりは真っ暗。月の明かりもない。

「魚さん!」

恐怖にかられてありつたけの声で叫ぶ。

緊張から体の各箇所が違うリズムで震え出す。手足が異常なほど震えてうまく立てないし、言葉も出ない。

魚さんはどこにいったの？ ここはどこなの！？

「や……」

もう一度叫ぼうとした。でも声は出なかつた。

田の前になにかと目があつた。でもそれはきっと氣のせいなんだと思う。だつてそれには目がないんだから。

「人だ……人間がいる」

木枯らしのような、掠れた声。それが茂みからカタカタと体を鳴らしながらゆっくりと現れた。

私、どうしてこんなに驚いているんだ？ ホラー映画だつて、お化け屋敷でだつて見慣れているはずなのに。ただの骸骨のはずなのに！

茂みから現れたのは長身の骸骨。着物も何にも着ていない、 理科室に飾つてあるような見事な骸骨が独りでに動いている。

「嗚呼なつかしい……人の姿よ」

意味の分からぬ私に、骸骨は嬉しそうに黄ばんだ骨を動かして私に腕を伸ばしてきた。

反射的に私は逃げた。

弾けるように駆けだし茂みの中をぐちゃぐちゃに走り抜けた。絶対に振り返らない。ただ全速力で前へと進む。

自分が骸骨が動くだけでこんなに驚いて怖がるだなんて意外だつ

た。どこか冷静にそんなことを思いつつも、腕で草をかき分けることも忘れて走っていた。

そろそろ息も切れてきた。足も痛い。肩で息をしながらついに足を止めて、その場で屈み込んだ。『さあ、と目をつぶり、耳に神経をかき集めて音を探る。

何かが動くような、追つてくるような音は聞こえてこない。

「逃げられた？」

ほつと胸をなで下ろすと下を向いた。酸欠で頭がくらくらする。額の汗が顔を伝い、顎に流れるまま重力に従って落ちていく。それをそつと開けた瞳で何気なしに見届け、凍りついた。汗が落ちたその先に、あの白い骸骨がじろじろを見上げていた。

「　　っ！」

一瞬目の前が暗くなるも、理性を総動員させて気力を振り絞る。こんなところで気絶したら生きて帰れない！ 気絶している場合じゃない！

「待て」

冷えた金属のよつなものが無理やり振り返った私の足首に絡みつく。途端に私は前に倒れ込んだ。弾みで被っていた笠が飛ぶ。痛みに顔を歪ませるが、それを目にした気がついた。

なんで人間つてばれたの？ 笠だって被っているし、匂袋だって持っているのに。

「やつと、やつと見つけた。熱と肉を持った人間」

「一の足にガシリとした感覚を覚えて跳ね上がる。下を振り返れば骸骨が迫ってきていた。

「な、なにを」

「温かい、生氣に満ちた人間が。生きた人間が」

足から這うように私の上に上ってくる骸骨。それが私に覆いかぶさると冷たい空氣の固まりがお腹の上に乗つてくるような奇妙な感覚に包まれる。

「……」は暗くて寂しい。心も体も、凍つて寒さよ

白い顎が音もなく上下する。

「だが、お前がここにいる。ずっとずっと」

「い、いや……」

「これからは寒くない。凍えることもない。永遠に」

泣いている様な掠れた声。どこから発せられているのか分からなければ、確実に耳元に近寄っている。

「お前はこれからずっと、俺といふから」

『永遠に』と耳の真横で聞こえたその瞬間、私の中の何かが限界を達し、髪の毛が逆立つのを感じて絶叫した。

「いやああっ」

私は持てる力を全部、身体の上に居る骸骨にぶつけた。骸骨は驚くほど簡単に宙を舞い、おもちゃのようにガシャッと音を立てながら地面に落ちた。

「置いていかないでくれ。ずっと一緒にいてくれ。慰めて欲しいだけなんだ。生氣を分けてくれよ」

ぱりぱりになつた骨から、まだ声がする。「これは何なの?」の骸骨も妖怪なの? でも妖怪って言つよつ幽靈に近い気がする。どちらにしろ危険なことには関係はない。

「寂しい……寂しい……」

逆再生の動画でも見ているように、骨がまた元の姿に戻り始める。足から順に組み立てられ、最後に頭が添えられる。

「どうして俺がこんな目に遭わなければならぬんだ。どうして我等が」

空を仰ぎ、ぶつぶつ言しながらじらうに足を踏み込んでくる。まずい。また追いかけてくる気がも。

私は後退しながら立ち上がつた。笠を拾いたかつたけれどもすぐに走れるようにしたいから、笠に氣を取られるわけにいかない。

「なんだつてこんな身体にならなければならぬんだ! 俺達が何をしたつて言うんだ!」

Hマーがかつた声が辺りに響く。はつとして外れかかつた視線を

白い影に向ける。

上を向いていた頭蓋骨が真正面に面る私に向かられると、やはり表情がないまま、白い顎を動かした。

「羨ましい。恨めしい。お前の持つているものが欲しい」

「私の持つているもの？」

眉を寄せて骸骨を凝視する。

特別妖怪とかが欲しがるようなものは持ち合わせていないけれど。まさか自分の命だとか、そういう意味？

「分かるぞ分かるぞ！ 輝かしい活気に溢れた日々が！ 隠りのない魂が！」

いよいよ意味が分からなくなってきた。思わず呆けていると骸骨が叫びながら飛び掛り、私の袖を掴んできた。

「何のことなの？ 私そんなの知らないつ！」

必死に顔を左右に振つて否定する。骸骨の言つている意味が全然分からない。私にどうしろっていうの？ 袖をつかまれ思い切り引張られる。しかし負けじと私も必死に抵抗する。

「（）にいるんだ！ お前だつていつかは（）になるんだ！ そういう前に少しでも慰んでくれえ！」

「やめてつ！ いやあ！」

もみ合いになり骸骨が私の腕を直に掴んだその時、発火音と同時に

に深紅のが骸骨を包んだ。  
これは……紅い鬼の炎。

「「」の炎は、鬼火なのか……？」

骸骨は一三歩後退するも、特に痛がる様子もなくぼんやりと炎を  
帶びて佇んでいる。

鬼火が効いていないの？ 着物の襟を掴みながら息を呑んで身構  
える。

「お前は鬼にも気に入られているのか。……そつか」

先程までの勢いをなくし、寂しげにつつむいた。皮も肉もない両  
手で空洞の目を覆い隠す。  
どうしてだらつ。私はなぜかその光景に何度もかの既視感を覚え  
ていた。

骸骨はよろよろとその場にしづくみると、つゝと呻き声を出しな  
がら切なげな声で私に囁いた。

「だつたらお前には分かるまい……。我々の気持ちなど……永遠に  
……」

骸骨はすすり泣き、そして

「分かるまい」

最期の言葉とともに、炎と一緒に跡形もなく消えていった。

「分からぬ……つて？」

骸骨の『分かるまい』という言葉にふと神社で泣いていたみつちやんが頭を過ぎつた。彼女もまた、私に『分からぬ』とあの時訴えていた。

骸骨から逃げられた安堵感よりも更に深くなつた疑問に、私はただ一人、身を硬くした。

## 第十怪 灰色の思い

「紗枝様」

背後から声をかけられ振り向く。

「魚さん」

背後の暗闇の中に灰色の影が立っていた。私はそれを見つめ、呆然としたまま呟いた。

魚さんは平たい手を何度もひらひらさせた後、息を吐きながら重たそうに口を開いた。

「時間がじぎじいませんので手短にお話しましょう」

何か覚悟を決めたように、ひとりと私は淀んだ目でまっすぐ視線を向ける。

「私は嘘を申しましたあ。光子様とはあ何度もお会いしたことがあ「ざこます」

「え……」

「私は紅い鬼様にい、仕えた時からさんざ虚偽にされて参りました。なのでえ一泡吹かせたいと、常口頃から思つておりましたあ」

突然の告白に、私はただ灰色の口から出る話を黙つて聞くことができない。しかし私の相づちがないのを気にせず、魚さんは言葉を続ける。

「そんな時、土蜘蛛の件でえ光子様の存在を知りました。そしてえなんとかあの愚痴の鬼様のところにい、いらっしゃることがあ分かりました」

愚痴の鬼。

みつちゃんが蒼い顔をしながら呟いていた、あの白髪の鬼の」となんだろうか。

私のそんな疑問に気づいたのか、魚さんはその鬼がそうだと云えてきた。

「愚痴と貪欲の鬼さまの目を盗んでえ、何度かお話をしているうちに、光子さまが抱いている気持ちがあ私と同じなのだと分かったのです。そして紗枝様。あなた様のことわざ、光子様を通して知ることになりました」

なるほど。だからそんなに会つたこともないのに、私に親しげに話してきたんだ。

ただ実際に直接会つて話したわけでもないのに、こんなに親近感を持つてくれるなんて。一人でなんの話をしていたんだろう。それみつちゃんが私に対して持つてている気持ちってなんだろう。魚さんは同じ気持ちを持つているつて言つてているけれど、すぐ気にならる。

「魚さん。みつちゃんと同じ気持ちつて何ですか？」

私は思つたことをそのまま訪ねてみた。

しかし魚さんはおもむろに首を横に振る。

「紗枝様にはあ分かるはずもない気持ちでえ」やこます」

微笑みながら、どこか蕭むよつた諦めたような声でため息混じりに魚さんは呟く。私はなぜか魚さんのその様子に、みつちゃんが神社で言つた言葉をまた思い出した。

『絶対に分からぬ』

神社で狂つたように、折り紙を釘で打ちつけて泣いていたみつちゃん。あの光景は狂つてていると言うよりも、悲しく寂しげに思えてならなかつた。そこで私は気が付いた。あの紅い鬼火と消えていつた骸骨をみた時、なんだかみつちゃんを眺めていた時となぜか同じよづに感じていたんだ。

「ただ光子様と違つてえ、私は妖怪でえ」いざこます。そこはあ光子様が紗枝様に対する想いとはまた違つのです」

また違う?

聞こえた言葉に思案してさまよつていた視線を目の前の灰色に移す。

同じ気持ちを持つてゐるけど、想いは違つて……。

「違うつて一体何が? 何のことなの? 二人とも私に対して何を想つてゐるつて言うの? それに魚さんもみつちゃんもあの骸骨も私には分からないつて言つけど。ねえ、どういうことなの? 全然、意味が分からぬよ」

堪らず声を震わせながら訴えた。言いようのない不安に、真相が分からずにはいるのはもう沢山! きちんと説明して欲しい。曖昧にしないで欲しい。

不安を露にした私に、魚さんが音もなく近寄ってきた。驚いて後

ずさつた私の腕を湿つた手が掴む。

「な、なに……」

「わたくしにはあ、先ほど申し上げましたように、時間がございません。もしあなた様が紅い鬼様とお、人の世界に帰る勝負をするときには、これをお使い下さい」

手のひらに小さな四角いものを一つ、私に握らせた。腕を放された後、角砂糖ほどの大きさのサイコロが手の中で転がっていた。

「これは？」

手の上の白と黒のサイコロを見つめながら魚さんは尋ねる。一見、普通のサイコロにしか見えないけれど。

「あなた様が念じた通りの目が出るサイコロでござります。人の世界に帰る時のみに、お使い下さいませ。決して他のお願ひ時にはあ使つてはなりません」

「え、でも」

返そつと差し出した手を魚さんは優しく押し返し、首を横に振つた。

そんな大事なものを私にくれるなんて。人の世界に帰つて欲しくないつて言つていたのに。

「ありがとう」

私は少し困惑いつつも、魚さんにお礼を言った。

もちろん、私はみっちゃんのことがあるから帰るつもりはまったくないのだけれども、それでも魚さんの気持ちがどこか嬉しくて、それは言わないでおくことにした。

「じきにこ、紅い鬼様があ参ります」

「魚さんはこれからどうあるの?」

「紗枝様をお河童のところから、勝手に連れ出したのです。戻ればあ紅い鬼様は、私を手打ちにされるでしょう」

ぐるり淀んだ目が回ると、すつとこちらへと銀色の瞳が向けられた。

「私は自力で元の姿に戻る方法を探します。紅い鬼さまの所はもう戻りません。またお会いするときはあ、鬼の姿であることをお、願つてくださいませ」

「魚さん……」

私を見つめる瞳がまた、宿にいたときと同じように澄んだものに変わっていく。穏やかな闇夜に染まる瞳。

「紗枝様には、もつとこの常闇の庭をお見せしたかったです。これからああなた様を魅せようと思つていたあ矢先でしたが、今の私は貪欲の紅い鬼にはあ為す術ございません」

灰色の肌が銀の瞳をしまい込む。そしてゆっくり頭を下げる。

「では、お元気でえ」

魚さんは丸い身体をのそのそ動かすと茂みの方へと歩み、やがてその身体を草の海の中へと沈ませた。振り返らず、静かに闇の中へと消えていった。

私は魚さんが消えた方向をしばりべじっと眺め、あの言葉だけが私の頭に残つて響いている。

『あなた様には分からぬ氣持ちなのです』

『分かんない、絶対に』

『永遠に分かるまい』

私には分からぬ氣持ち？ 私には？

取り残された気持ちで、闇の怖さも忘れてぼんやりと暗い草原を眺める。落とした笠がふわり風に遊ばれて足元に落ちた。それを拾い、ため息をしながら被る。

「分からぬ氣持ち……」

口に出して、小さく呟いた。

「ひやあつー？」

腰に大木のようなものが巻き付き、足が地面から離れてぐるりと視界が回る。緑の土手から暗い空が映る。仰向けになつて笠が落ちれば、漆黒の闇夜が瞳に飛び込んできた。

「だ、誰」

「まあ～つたぐ。手間のかかる雀力ナ」

言葉を遮ったのは、今はもう聞きなれたなまりのある口調。おそれおそれ顎を引いて顔をあげると、ニヤニヤとした紅い顔が見えた。

「鬼さん！」

「やつと見つけた力ナ鈴音<sup>え</sup>」

呆けている私にニヤリと尖った八重歯を見せつける。

「さんざん探したゾ。これでお前さんをのんびり可愛がれそудナア」

笑みを深くして笑いかけるが、その笑みは背筋が凍るよつた残虐性を帯びたものだった。

そうか。鬼さんからしたら私が勝手に逃げ出したと思われても仕方ない状態だ。魚さんが河童のところから無断でここまで移動してきちゃったわけだし。

「あ、あので　うつ」

「まあ～言い訳は屋敷で聞こひじやない力」

説明しようとした私に紅い大きな手で塞がれる。そのまま鬼はすんずん歩き出した。

知らず知らずに、私は鬼に抱きかかえられた体を小さくし、胸の前で両手を堅く結んだ。



## 第十一怪 紅い籠

「お、怒っているんですか？」

恐る恐る、目の前の紅い鬼を下から見上げるようになつめる。鬼は盆を左右に傾けさせながら、中の透明の液体をゆらゆらと踊らせているだけで何も話さない。

私はぐっと口をつぐんで俯いた。狭い籠の中では鬼と距離をとりたくても取れない。気まずい沈黙に押しつぶされそうだった。しかし意外にも心臓は落ち着いて、なんだか開き直つたようにいつも通りの鼓動を規則正しくさせていた。

神経が図太くなつたのかな、私。

「鈴音」

「は、はい！」

突然呼ばれて、文字通り弾けたように顔を上げる。紅い指がひらりひらりと私を呼ぶ。正座していたせいで堅くなつた足を気遣いつつ鬼の前まで足を進め、そこでまた正座した。本当に目と鼻の先に鬼が居る。

さすがに私の心臓も先程とは態度を変えて焦り始めた。お腹にドクドクと振動が響いて気持ち悪い。

「回れ」

「え？」

良く聞こえず聞き返す。

「ま・わ・れ

細長い、しかし鋼のように丈夫な指が一本ぐるりと回される。何がしたいんだろう。そう思いながらも大人しく従い、言われた通り腰を浮かせてくるつと体をよじる。

「ひやあっ

いきなり鬼に背中を向けたところで、後ろからからガチリと腰に腕が巻き付き、引き寄せられる。どんどん勢い良く厚い胸板に背中を強く打つけられ、その衝撃に眉をしかめた。

何が起きたのか一瞬分からなかつたけど、自分の下で鬼が足を組み直したのを感じ、膝の上に乗せられたことに気が付いた。

「なにするんですか？」

後ろを振り返りながら抗議の声を上げる。少し強く抱きかかえられているせいでちょっと息苦しい。

「お前さん、あの魚とずっと一緒にだつたそつだナ」

息を押し殺した声が耳のすぐ後ろから聞こえ、ぞわつと背筋に言いつのないものが走つた。それと同時に全身に鳥肌が立つ。

「ええ、まあ

言しながら自分の身体を締め上げている紅い腕に視線を落とす。

責められている気がして緊張してしまい、知らず知らず深く息を吐いてしまつ。

「宿にも泊まつたみたいだが？」

「やう、ですか、それがどうかしましたか？」

心える代わりにまた腕の締め付けがきつくなる。しかも背中から舐めるような視線を感じ、感電したみたいに身体が震えた。私は靈感とかないハズなのに嫌とこりほど背中から不吉な気配を感じている。

怖い……泣きそう……。

目頭が熱くなるが、必死になつて堪えた。

泣いたらダメ。しつかりしないと！

「今着てこむ茜の浴衣はどうした？ 僕がやつた物じゃないな？」

わき腹にある紅い拳がグツと帯のあたりを周りの布と一緒に掴む。ぐく苦しい。

「魚さんが用意してくれたんです。私のはボロボロになつてしまつたので」

魚さんの話だと着ていた着物は濡れるわ引きちぎれるわで、もう衣類としての機能は果たしていなかつたようだつた。もうそうなつたら着るに着れない。良い物だつたから勿体無いとは思つたけど仕方がない。

茜色の裾を眺め、ふいにあの銀色の瞳を思い出す。

魚さんどうしているのかな。あれからどこに行つたんだろう。

紅い鬼は魚さんが逃げたことを知つてこゐるの？ もう追つ手をだ

したりしていいるとか？ だとしたらうまく逃げて欲しい。辛い目に遭っていたみたいだし、多少ひつかかるところはあるけれど、私にとつて恩人なのは変わりない。

でも結局何を思つているのか分からずじまいになっちゃったな。みつちゃんのことも、もつと何か知つていたと思つたんだけれど、なんだかんだでそれも聞きそびれていた。

「気に入らないカナ」

「え？」

紅い声にはつと現実に引き戻される。  
鬼が後ろで酒を飲み干す音が聞こえると、畳の上に盆が足元に転がつてきた。

「脱げ」

「えつーー？」

盆を追つていた目が特に何を見るわけでもなく止まる。

え、今、今、ななな、なんていつたの？

硬直する私の背後から後ろで留めている帯が引っ張られ、身体が揺れる。

「ちよちよっと待つてくださいーー！」

鬼の手から逃れようともがくが、私を抱える紅い腕はまったくビクともしない。これは本当にまずいっ！

「嫌ですっ！ やめて下さいー！」

「安心した。お前の裸見たつてど～～も思わん」

「まつとこて下せこつー。」

第一 そういう問題じゃないしー

浴衣の下にそれ用の肌着はもちろん着ているけれど、下着はつけてないのだ。下着を催促したことはあるけれど貰つた例はない。どうして下着をくれないんだりつ。妖怪つて下着つけないの？ それとも下着の存在をしらないの？

何にしたつて浴衣を取られたら肌着一枚になつてしまつ。そしたら肌が透けちやうじやない！ それだけは嫌つ！ ううん、透けなぐても嫌だけどー…

「んん？」

鬼の手がピタリと止まる。するりと胴に巻いた腕の力を緩めると、長い指をお腹と帯の間に突っ込んだ。私が慌てふためく前に鬼さんが素早く紅い指を引っ込めると、指には四角いものが一つ挟まつていた。

それを見て私は自分の顔が凍つた気がした。

だつてそれは魚さんがくれた、出る田を自在に操れるサイ「ロ…

…。

「なんだこれは？」

「そ、それは、魚さん」、お店で買つてしまつたんですね

しまつた。どもつてしまつた。

お店で普通に売つてこるものなら鬼だつて気にとめたりはしない

だろう。やう思つてつゝ言つてしまつたけれど、不審に思われたかもしだれない。

大事なサイコロだし本当のことを言つて取り上げられたりしたら大変。内心ハラハラしながら背後を窺つた。

「お前がねだつたのか？」

『いいえ』と言つたら魚さんが余計に立場が悪くなるのかな。でも私から欲しいと言つた事にしたら、怪しまれないですむかもしない。

いや、でもなんでサイコロなんて欲しいのかつて聞かれたらなんて答えていいんだろう。なんとか良い言い訳は……。

「ほお～。ずいぶんと魚に懐いたナア、鈴音」

私が『じちやじちや』悩んで黙つていたのを鬼がどう捉えたのか、どこか嫌味っぽく言つてきた。そして顎を背後から掴み、私の耳元に口を近づけ

「ナア鈴音。お前の飼い主は誰だ？」

そう囁いた。

この場合は紅い鬼だと答えなければいけないと分かっていた。けれど、どうしても言いたくなかった。

飼い主と何だつていうの？ 私はペットなんかじゃない！ 恐い思いをするかもしれないと思いながらも、私は口を真一文字に結んで黙つた。

「主人は誰だつ！？」

すぐそばで雷でも落ちたかのような鬼の声に、一気に内臓が震え上がつた。

「ダメ！ やつぱり怖い！」

ぎゅっと目を瞑つて身体を縮めた。びりびりと畳にまで鬼の声が響いて振動が伝わる。それが静まるごとに、自分の心音だけが耳に残つた。

「まあ～つたぐ

溜息を吐きながら鬼は少し身じろぐと、強張つた表情をしている私の顎を掴んで、猫の喉を撫でるように私の下顎を指でなぞり始める。

「せっかく可愛がつてやるつと思つていいの。お前はつれないなア～」

罵声を上げたばかりとは思えないほど優しく上機嫌に顎や首筋を撫で回す。

相変わらずつかめない鬼の性格。気紛れにしたつて変わりすぎる。鬼にされるがままになりつつも、目の端で赤い手のひらで転がされている一つのサイコロが気になつて仕方がない。きちんと返してくれると思つんだけれど。

元の世界に戻るための切り札。自分が帰れないとしても、つまく使えば何かに役立つはず。

元の世界。元の日常。

ふつとあの川原の光景が浮かび上がる。

「……あの、鬼さん」

少しの間を置いてから私は切り出した。

「うふ？」

返事をしながらも、私を撫で回す手は止めない。鬱陶しいと思いつながらまた口を開く。

「私、友達に会つたんです。みつちやん！」

「……会つた？」

ピタリ。鬼の手が止まる。

「はー」

「ビー」で？

「川原です。お店がたくさん並んでる所の近くでした」

「ほひ」

また手の動きを再開するが、今度はゆっくりと私の髪を弄び始める。紅い指に髪が絡まれるたび、私の頭が揺れる。

「みつちやん、白い鬼と一緒に行つてしまつたんです。鬼さんなう何とかできるでしょ？ 約束通り、帰してくれるでしょ？」

振り向きながら鬼の返事を待つ。

鬼はふむ。としばらく考え、唸つた。

「お前、その娘にまた会いたいか？」

「え？」

「会いたいか？」

突然の質問に田を何度か瞬かせる。  
そりゃ、会えるならまた会いたいけど……。

「も、もちろん会いたいですけど」

「よし。帰らせる前に会わせてやる。ただ時間が掛かる」

帰らせるつて。

信じられない気持ちで振り返る。深紅の瞳と田があり、そのまま見つめ続けた。

「みつちあんは本当に帰れるんですね？」

「帰るも何も」

眉を吊り上げ、やや小首を傾けると皮肉、口端も吊り上げた。

「帰っていたハズだ。本来ならナ」

「え？ どうこいつですっ？」

鬼はこちらをチラリと見る。獣が相手を伺うような鋭さで。  
自分がなんだかしてはいけない質問をした気がして居心地が悪く  
なり、視線をそらす。

「ま、会うにしても、帰すにしても時間が掛かる。しばらく俺とのんびり遊ぶとすれば良い力ナ。お前を飼つてからのんびりかまつてやれなかつたかしナア」

ぎゅうっとそのまま向かい合つた状態できつく抱きしめられる。苦しそうに喘ぎつつも、頭の中は深い霧に覆わっていた。

真相が見えない不安か。もしくは鬼が私を抱きしめる力か。どちらのせいで今胸が苦しいのか、私は分からなくなっていた。

## 第十一怪 紅に伏す

火照った体に、暗めの赤に大輪の花が咲く着物で包まれる。土や汗で汚れた体と髪は今ではすっかり綺麗に洗われて気分も良くなる。できればもっと露天風呂でゆっくりしたかったのに。せめて鎖無しで入させて欲しかつた。

私の逃亡を防ぐためとか言って鬼はお風呂に入れるのを許す代わりに、囚人を繋げる鎖を私の片手に繋げた。逃亡しようと思つてした訳じやないんだけど。でも、それでもあの広い豪華なお風呂に入れたのは有り難かつた。以前入った時と違つて、お湯はミルクのような色をしていて柔らかなお湯だつた。

身体と髪を洗つてお湯に入り、五分もしないうちに小鬼から出ると合図がきた。もう出ないといけないの？ と顔をしかめていたら、子鬼が入るぞと言わんばかりに入り口を叩いてきたので、渋々お湯から上がるこことになつたのだ。

あの時と同じように、着飾りを終えて鏡の前に座らされる。その時、鏡に映る自分の瞳をみてぎくじとした。

なんで、紅いの？

鬼の瞳にはあるにしても、目を動かす度にきらりと紅く光る。まさか。慌てて左腕を捲くり上げ肌をみた。薄い灰がかつた桜色に染まっているはず腕は、元の日本人特有の黄色みを帯びた肌に戻つている。しかしあと腕を捲くり上げると肩の近くにまで色が移動していたのだ。

これ、なんなの？ どうなっているの？

怖くなつて捲りあげた裾をゆつくり戻した。

鬼の契約と何か関係があるのかな。そういえば誰かが妖怪に飼われた人間が鬼になつたつて言つていたし。その考えにぞつとして鳥肌が立つ。

私も鬼になるの？ 人間じゃなくなる？

もしかして、みつちゃんにもこの契約をあの白い鬼としているんじゃ……。

紅い鬼はみつちゃんに会うにしても帰すにしても時間がかかると言つていた。でも、それって本当？ なにか時間稼ぎをしているんじゃない？ どうして時間が掛かるんだろう。

もう待てない。

たとえ今すぐに行動できないとしても、知つたとして何も出来ることがないにしても、どうしても知りたい。

子鬼が髪を結い上げ顔に薄い化粧を施される。後ろから両方のこめかみを押さえ、顔を上げさせられた。鏡に映る自分の表情はぎらぎらと瞳を煌めかせ固く決意したものだつた。

もう曖昧なことはいらない。鬼に聞こう。すべて分かつてすべて終わるのなら、今ここで契約を完了してもかまわない。

支度をしていた子鬼たちが離れると、私は誰に言われるまでもなく立ち上がつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

襖を開けると、鬼はちょうど酒を飲み干していくところだった。

子鬼が私の腕にはめられた鎖を解くと、静かに後ろに下がっていく。畳の上をするすると着物を引きながら鬼の前に座る。そして両手をついて頭を下げる。

「お前、なにも食べていのダロウ?」

鬼が立ち上がる音がすると、まもなく私の前に少し乱暴に善が置かれた。視界の上方に黒光りした足が一つ見える。

「食え。瘦せこけた奴を飼つていたって仕方ないカナ」

はじめはろくに食事を与えてくれなかつたのに、何を今更なことを。下を向いたまま私は口を尖らせたが、顎に何かが振れ、急に視界が上に向いた。

「下向いてないで、わつわと食え」

鬼はそう言つて私の顎から紅い指を離した。目の前には豪華な食事。色鮮やかな平皿や小鉢には新鮮な魚や、細かいところまで細工された野菜や煮物が乗せられていた。

私は一度大きく深呼吸し、ぐつと膝の上にある両手をつよく握つた。

「鬼さん。お食事の前に良いですか?」

視線は紅い鬼に向けていない。視界に映るは極彩色の食べ物。しかし私はそれを見ていなかつた。全神経が紅い鬼に向けられている。唇をかんで、鬼の出方を待つたが何も聞こえなかつた。私はそれを承諾したと解釈して、また深呼吸すると切り出した。

「すべて話して下せ。みつちやんの」とを

身体を伝つて心臓の鼓動が直接耳に響いてくる。耳の真横に心臓があるような錯覚を起こす。

「だからそれはだな」

「私は今ここで鬼さんと契約を完了しても構いません！」

鬼の言葉を遮つて叫んだ。

「時間が掛かるのはどうしてですか？ みつちやんは本来帰れたはずって、どうこう」とですか？」

「それはお前に話したって、分からぬ」と力なく

また『私には分からぬ』ですって？

顔が赤く染まっていき、私は唇が震えるのもかまわず鬼に向かつて叫んだ。

「もう、うんざり！ 魔さんもみつちやんも、つこには鬼さんまで！ 私には分からぬってそればっかり！ 話してくれなきや、いつまでも分からぬよつー！」

嗚咽を無理に堪えた為に、最後のほつの言葉が上手く出でこなかつた。

紅い鬼は何も言わない。顔を向けていないのでどんな顔をしているのか分からぬけれど、禍々しい気配も怒った気配も感じない。ひたすら静かだ。

肩で息をして身体全体が熱く、目頭から流れ出る涙に気が付いた

時、少しだけ冷静さが戻ってきた。私は鼻をすすりながら何度も胸を上下させると、両手をついた。

「今どうなつているのか。みっちゃんはどうなつていてるのか。どうなるのか。それだけで良いです。どうか教えて下さい……お願いです」

言葉の終わりと共に、畳に額をつけた。

興奮のせいで身体全体が息をする度に上下する。目を開じて無心に頭を下げ続けた。

「鈴音」

静かな、穏やかな紅い声が上からかけられる。目をそっと開けて顔をわずかに上げる。

「まずは食え。話はそれからだ」

ぼやけた視界に肩眉をつり上げて呆れたような口と表情で、私に頬で食べろと促す鬼が映った。

上体を起こして、鬼へと顔を完全に向ける。

「お話、聞かせてくれるんですか？」

「食べたらナ」

氣だるそうに言つて、その場にじろりと寝そべつた。

話、聞けるんだ。そつか。緊張した身体から力が抜け、はあっと鬼に聞こえないように大きく息を吐いた。それと同時にまだ頬を伝つていた涙が膝の上に落ちる。

「食べなきや教えんゾ」

「た、食べまーす」

びくつと肩を揺りし、涙の跡を拭くのも忘れて慌てて箸を手に持つた。

本当は食欲なんて吹っ飛んでいたんだけれど、食べ始めればお腹がもつとぐれと鳴きつつあったので黙々と食べることに集中する。これから話されることを考えてしまつと、箸が止まりやうで、私はただ無心に食べ続けた。

食べ終えた食事を子鬼が下げ部屋からそそぐと出していく。紅い鬼から、みつちゃんの事を今から聞けるかと思つと緊張する。無意味と分かっていながら、落ち着きなく両手をもじもじさせてしまう。

「コシチに来い」

上体を起こしあぐらをかいた隣の畳を、何度も紅い手が叩いた。  
……もしかしてまた抱きつく気？ それはもう心から勘弁してほしい。無意識にそこに向けられた顔が渋いものへと変わる。

「どうした？ 話を聞きたくないのカナ？」

もちろん聞きたいんだけども。だけれども……。  
不安に唇を真一文字にして目を左右に動かす。でも迷っている場合じゃない。食べられるわけじゃないんだし、真相を聞くこれ以上ないチャンスだもん。よしつ。

自分に力を入れると同時にお腹に力を入れて立ち上がる。そして紅い鬼の手前まで行き、そこから鬼の横に静かに座った。

「さあて、何から話そうか」

鬼が片膝をついてそこに腕をおくと、部屋の向こうに視線を投げる。私はすかさず鬼に顔を向けた。

「友達は、みつちゃんは今どうしているんですか？」

「ああ。あの娘は愚痴の奴のといにいるサ。あいつがわざわざ人間を飼いたがるとは思わなかつたがナア～」

「私が鬼さんに連れ戻されたとき、みつちゃんは扉の向こうにいたのに、なんで今ここにいるんでしょうか?」

片眉を吊り上げ、鬼はうーんと唸つた。

「憶測だガア、扉が完全に閉まる前に愚痴の奴が引っこ抜いたんだろ。もしくは娘が閉まりかけた扉を開けた力」

「そんな……」

せつかく一度は確かに帰れたのに。なんでこんなことじ。私は一度うつむいた後、身を乗り出して鬼に訪ねた。

「でも、でも帰れるんですよね? 大丈夫ですよね?」

藁にもすがる思いで鬼に聞く。

「もちろん大丈夫カナ。しかも常闇と同じぐらじ心の広い俺は、帰す前にお前等を会わせてやる。感謝しろヨ?」

「そうですか?……」

鬼のきつぱりとした口調に私は大人しく素直に頷いた。だつて疑つたらキリがないし、鬼さんだつて契約が完全に結ばれるんだから、嘘をつく必要だつてないだろ。ほつとして肩の力が抜けた。

「他に聞きたいことはある力ナ?」

「えつと」

他に何聞こうかな。白い愚痴の鬼のことをもつと詳しく述べておいた方がいいのかも。それに紅い目と肌の灰色の事も聞きたい。今後どうなるのか見当も付かないのだから。

……でも。だけど。

最優先にすべきではないんだけれど。

隣の鬼を見上げるよつに盗み見て様子を伺つ。さつきまで飲んでいたお酒のせいか、まどろんだ顔をしている。どうしようかな。

しばらく悩んだあげく、色々聞きたいことがある中で、常にひつかかっていた事を私は尋ねた。

「鬼さん。みんなは何が、私には分からないと言つていたんですか?」

鬼に聞いても分かるのかどうか分からない。けれど他に手掛かりになる事もないし、なにか知るヒントにでもなればと思って私は口を開いた。

「せつだナ。前にこの常闇がどこまで広いか、という話をしただろう?」

「はい。人の闇がどうとかつて」

「その闇をお前には理解できないと、皆言つたんだろ？よ

「みんなは分かるんですか？」

「ここにいる奴は大抵分かる。分からぬ奴はここにいないだろ？  
しナア～」

「……」

人の闇。確かに私にはそれだけではよく分からぬ。けど、とりあえず人が持つ悪い感情つてことだよね。うーん。でもやつぱりどうもピンとこない。

もちろん私だつて落ち込んだり悩んだりすることはある。人を羨ましく思つたり、嫌だなつて思つたこともある。

けれど誰だつて持つてゐる感情だから特別だとは思えない。だから私には分からぬことは、無いはずなのに。

「でもまあ、分からぬお前だからこそ、手元に置きたいんだがナ  
ア～」

「わっ」

眉間にしわを寄せて悩んでいたが、いきなり肩を強く抱かれて飛び上がる。

口の端を吊り上げて笑う鬼の口は、まるで獰猛な獸のように鋭く、紅の瞳もいつもよりも一段と妖しく爛々と煌めいていた。

な、なに？ あつもしかして……。

血の気が引くのを感じながら私は身の危険を直感し、慌てふためいた。

「ま、待って下せ。私は食べても美味しいんですけど

「食つてみなけりや分からんか」

「えー、食べる気なの?」

ほほ本氣で今から食べようとしているの?...」

「ダメですよー。契約はまだ結んでいないんですからー。断じて食べちゃダメですよー。」

「お前はせつまいの場で結んでも良ー、と誓つていたじや ないか」

「それはちやんとみつちやんが帰れるといつ約束を守つてくれると  
いつこじが前提で…… その……」

「うふ?」

「ですか?」

「ナシダ?」

鬼が面白そうに笑みを浮かべながら、ギラギラした目で鼻先まで  
顔を近づけてくる。その下から鋭利なハ重歯が見えて硬直してしま  
う。

ちらりと自分の肌を簡単に引き裂く光景が頭の隅によぎる。ああ、  
なんでわざわざ嫌なことを想像しちやつたんだらうー。ついに我  
慢できなくなつた私は、田と口をわざわざと強く閉じた。

……。  
……。  
ん?

いくら待つても何も起きない。

クツと喉がなる音が聞こえ、恐る恐る目を開ける。私の両目が全開になつたところで鬼が堰を切つたように突然笑つた。そしてその声は次第に大きくなり、私を拘束していた腕をゆつくり解いた。

「安心しろ鈴音。可愛いお前を食べるわけない力ナ」

肩から離れた腕が今度は私の頭の後ろを掴み、そのまま下へ下へと押してきた。

「なんですか、何するんですか？」

嫌がる私を無視して鬼は強引に押さえ続ける。そのまま自らの膝の上に私の頭を乗せた。ちょうど小さい頃に、お母さんに耳掃除をしてもらった時と同じ格好に私はなつた。

「いい子にしてろよ鈴音」

頭を預けたまま硬直している私を、頭から肩にかけて紅い大きな手が撫でる。首筋に長く無骨な指が這つ度にぞくぞくしてしまう。気持ち悪い。

「お前は俺のモノだ。誰にもやうと」

呪いをかけるように耳元に囁かれる。

「ずっとずっと離せない」

甘く優しく、しかしどこか鋭い刃のように心に突き刺すような鬼

の言葉。

私はどひしてだろひ。それを聞いていひに田を閉じて子守歌でも聴いているかのよひに、鬼の紅い言葉に聞き入った。

「どひにこよひと逃がしはシナイ」

熱い指が、首から襟に入り肩を露わにする。

「お前は俺のモノだ、鈴音」

灰がかつたそこを鬼が丁寧に舐めあげていく。ゆっくり、吸い上げるよひに、灰梅に沿つて。

熱が……引いていく……。

ぼんやりとそんなことを思いながら田を閉じ続ける。なぜだか開ける気にもならなかつた。

「鈴音」

名を呼ばれて田を開くと、鬼が私の顎を持ち上げ両田にそれぞれ口付けた。

「やめて……下さい」

重く感じる腕を持ち上げて鬼の顎を押そうとするが、上手く動かずただ紅い頬を撫でただけだった。鬼はその手を掴むと、そつと手の甲にまた口付けた。

なんでこんな気色悪いことするの？ 腕を引っ込めようにもすで

に力が入らない。なんで？ それに、すこく、眠い……。

睡魔に必死に対抗するがそれも無駄な努力に終わり、私は背筋にぞくぞくとした異様な感覚の中、ついに意識を手放してしまった。

## 第十四怪 濡れたねずみ色

……うーん。

なんだろう、すごく頭が重い。それにだるい。

うめき声をあげながらうつすらと私は目を開いた。

未だぼやける視界に白い棒が何本も映り、やや間があつてから籠の中だと気がついた。いつの間にか眠ってしまったみたいで、薄い肌着姿の私は布団に丁寧に寝かされていた。

「私いつ布団に入つたんだっけ」

いつたいどれくらい眠つっていたんだろう。

風邪で長く横になつて、起きあがつた時のように体全体がだるい。ゆつくりと布団から這い出て立ち上がり、格子に近づくと両手で格子を握り籠の外を見回した。

「……は？」

無駄に広いのは同じなんだけど、金の屏風に派手な襖、紅い柱、細かい鮮やかな絵が描かれている天井。私が今までいた籠の部屋ではないみたいだけ。

ふと籠のすぐ横にある分厚い畳にまで流れる紫の帳が目に入った。あれはなんだろう。

籠の中を歩いてそこに近づく。籠から手を伸ばせばなんとか帳を掴めそうな距離だ。

誰か寝ているの？

耳を澄ますと微かに寝息のよつなものが聞こえる。

「鬼さん？」

声をかけてみるが返事がない。

寝ているのかな？ だつたらわざわざ起こす必要もないよね。振り返り布団の上に戻つて腰を下ろした。

鬼も寝るんだ。ちょっと意外。

特にすることもなく、かと言つて今起きたばかりなのに寝るのは気が引けた。それに頭がなんだか重くてだるい。こういう時つて横になつても寝れそうにないんだよね。

ふうっとため息をついて膝を抱えた。何気なしに横を見やる。見た先には鏡台があり、漆塗りのそれは丸い鏡ごと朱色の布で覆われていた。

私は腕を伸ばしてそれをとると鏡をのぞき込んだ。

「あ、れ？」

食い入るように鏡に顔を近づけて嫌と言つほど鏡に映る自分の瞳をのぞき込んだ。

「目が紅くない」

次の瞬間はつとして肌着の裾を掴み、肩を眺める。

そこにあつたはずの灰色がかつた肌はどこを探しても見えなくなつていた。

「どうして？ これって治つたの？ でも、どうして

言いかけて何かが記憶を舞い戻らせる。が、ハッキリしない。瞬何かを聞いた気がしたけれど思い出せない。——  
紅い鬼さんならなにか知つているのかな。

ちらりと暖簾の方へ視線を向ける。相変わらず規則正しい寝息が聞こえてくるだけで特に変化はないみたい。いつ起きるのかな。

「それにしても……」

立ち上がりながら格子のそばへ寄り、部屋を見渡す。豪華絢爛つて言葉と悪趣味つていう言葉が見事にマッチしている部屋だ。飾つてある屏風や燭台は見事だし、畳も綺麗な緑色でへりは黒っぽい緑に銀色の刺繡が施されていて細かい。

しかし壁や天井に描かれている絵の派手さや色使いが、それらの良さをダメにしている気がしてならない。

「無駄に派手な部屋ね」

「そう力？」

「えつ」

思わず出た言葉に応えた紅い声。紫の帳に目をやると、そこから細くも逞しい腕が見えてゆつくりと赤褐色の頭を見せた。

「まあそう言つてくれるナ。赤鬼の時から使つてている部屋だ。悪趣味なのは仕方がない力ナ」

がしがしと鋭い角の根本を搔きながら言つた。

「変えたりとかしないんですか？」

「面倒力ナ」

ゆつたりとした足取りで籠の前まで歩く鬼。暗い赤紫の浴衣は胸のところがはだけていて、厚い胸板が直に見える。なんだか作りもの体みたい。

「ナンダ、俺の体が気になる力？」

視線を感じたのか、鬼がにやにやしながら言つてくる。

「いえ、全然」

じりじり見たのに気を悪くしたのかも。あわててすぐに視線を逸らす。鬼はそんな私に対してもうじつとしてみつちゃんと会える鍵を開けた。

「出る鈴音。散歩に連れていつてやるつ」

「今からですか？」

「嫌力？」

「嫌ではないですけど」

正直外に出るのは懲りていた。もうじつとしてみつちゃんと会える時がくるまで待つてみたい。

「安心しろ鈴音。今度は俺もいる。それに」

籠の中をきょろりと眺め、顎で鏡台の横を指した。

「そここの箱に入っている物を着ろ。ソレなら動きやすいだろうつ

「箱？」

鬼が指した先を見ると、鏡台の陰に隠れるよつて長方形のベッドの箱が置かれていた。

「さあ～て、俺も着替えるとするか

「あの」

部屋を出ようとした鬼を呼び止めようと声をかける。

「うん？」

「なんで私、ここにいるんですか？」

「ここなら寝ている間でも様子が分かる。いちいち様子を見に部屋を移動するのも面倒だしナ」

「なるほど……。あ、それとですね、実は肌が

「ああ～後ダ、後。さつさと着替えナ」

くあつと大あぐびをしながら部屋から鬼は出ていった。

聞きそびれてしまった。後でつて言つてたから後で聞くしかないか。とりあえず着替えないといと。気を取り直して布団を畳み、べつこの箱を籠の中央に持つてくると蓋を開けた。

「え……」

しばらく信じられなかつた。もう捨てられたと思っていたのに。諦めていたのに。また目にする事はないと思っていたのに。

箱の中には丁寧に、懐かしい学校の制服が入つていた。

白いブラウスもグレーのスカートとブレザーも。ここに来た時に着ていたものが、きちんと綺麗な状態で入つていたのだ。

「どうして」

戸惑いながら手に取る。校章のボタンとピンもきちんとついている。靴下も茶色のリボンタイも。一つ一つ手にして眺めていると自然と涙が溢れてきた。皺になつたらいけないと思いながらも、制服に顔を埋めて握りしめた。

「お母さん、お父さん……みんな……」

学校や家族の思い出が次から次へと涙に負けないぐらゐの勢いで溢れ出てくる。嫌なことも良いことも、今では陽の光のよう温かく明るく感じる。

でも今更、泣いたらいけない。

これで良いんだから。これでやつと済むんだから。

必死に自分にそう言い聞かせた。これで完全に終わると私は改めて感じていた。

でも胸が苦しい。これで人としての人生は終わりだと突きつけられたみたい。

鬼はこれを狙つて制服を差し出したの？ 最後の最後にこんなことをするなんて。

私は鬼の思惑通り、心に揺さぶりをかけられて自分が未だに元の世界に未練がある事が、悔しくて情けなくて仕方なかつた。

涙でグレーの制服が曇り空のようになつとりと濡れ、暗く染まつた。私はそれを見下ろして、そこを意味もなく指でなぞつた。そして大きく息を吐いて天井を見上げた。

私は帰れない。

でもみつちゃんを助けられる。

中学に入つて新しくできた親友の彼女。それからずつと本当の妹みたいに仲良く学校生活を過ごしてきた。みつちゃんも私のことをお姉ちゃんみたいだつて言ってくれてすぐ嬉しかつた。

たとえ後悔しても途方に暮れても、私は絶対に前を向こう。決して鬼になんかならない。

みつちゃんに会つたなら笑つて送り出せつ。ありがとうつて言つてお別れしよう。

私は涙を拭つて、制服を広げた。

## 第十四回 濡れたねずみ色（後書き）

今まで田を通じて頂いてありがとうございます。  
そろそろ終わりに近づいてきておつますが、ここまでこれたのも  
皆様のおかげです。

お気に入りに登録して頂いた方、評価くださった方、感想をくださ  
った方。ありがとうございました。

もう少し続きますが、もし宜しければ最後までお付き合ください  
ませ。

## 第十五怪 白い幻惑

鉛のように重い体に鞭を打つてひたすら砂利の上を歩く。久しぶりのスカートで足下がスースーする。もちろん下着無しよりはずつと良いんだけれど。

砂利道の脇に咲き誇る木蓮の白い花が、闇夜に浮かび上がり、心なしか道が明るくも感じる。お花見の夜桜を見たときも綺麗だと思っていたけれど、前に紅い鬼が見てくれた梅同様、他にもこんなに闇に栄える花があるんだと改めてそう思った。

「平氣か？」

すぐ前を歩いていた紅い鬼が振り返る。黒地に紅葉の着物が闇夜に浮かぶ。

「大丈夫です。ところで、どこに行くんですか？」

「河原」

「河原？ 魚でも釣るんですか？」

鬼が魚釣りする姿なんて想像できない。もし魚を獲るとするなら、熊みたいに手でバツサバツサと捕獲する画しか思いつかない。思わずこつそり口に含みながら笑つてしまつ。

「友人に会わせてやるのさ」

「えー？」

叫んで、ぴたっと足を止める。

友人つてみつちゃんのこと?

「今からですか? な、なんでもつと早く言つてくれないんですか!  
それに時間がかかるつて言つていたじゃないですか」

「お前がずっと眠つてゐる間に準備が整つてナ。起きていたつてどうせ何もやることないだろ?」

「そんな無茶苦茶な……つて、私そんなに寝ていたんですか?」

それだつたらこんなに体がだるいのも理解できるけど……。

正確な時間がわからないから、その準備というのにどれだけ掛かつたのか知りようがないし、どれくらい眠つたかなんてもつと分からぬ。

どれくらい眠つたらこんなに体が鈍くなるんだろう。

「疲れが溜まつてたんだろ」

「だからつてそんなに寝れないですよ

困惑している私にニヤつと笑つて鬼はまた歩きだした。

なにそれ。馬鹿にされた気がして、その背中をむつと睨みつける。

でもこれからみつちゃんに会えるんだ。いきなりつていうのもあつてなんだか実感がない。

鬼との契約が完了したらどうなるんだわ。ここにいる間も色々呪いみたいなのをかけられていたいだし、それが一気に自分の身に降り懸かってくるのかな。

やだ……」「わい……。

恐怖を飲み込んで喉が鳴る。

「どうした？」

肩越しに鬼が振り、こちらに紅の瞳をむけてくる。その目を見て、一瞬縋りたくなる衝動が起るが、次の瞬間には罪悪感と嫌悪感に責められた。

何を考えてるんだろ？私……。

「何でもないです。みっちゃんになんて言おつか、考えていたんです」

「やうが、よく考えればいい力ナ」

本当になんてことを考えてるんだろ？。しつかりしないと。嫌なことをじっくり思い浮かべたって実際にどうなるのか分からないんだし、余計なことを考えるのはやめよ。

じぱらぐお互いに無言のまま木蓮に挟まれた砂利道を進んでいくと、田の前に道を阻むように急な土手が現れた。これだけ急なら立つて行くのは難しそう。手で這つていくしかないみたい。もしかしたらこのことを想定して制服に着替えてくれたのかな。

「鈴音。いらっしゃい」

ヒラヒラと紅い手が手招きする。

「すごいぶん急な斜面ですね。上のの大変そー」

鬼の傍らまできて鬼が素足なのに気がつく。薫色の肌が砂利に浮かび上がり不気味に[与]る。それはそつと、足の裏が痛くならないの？ よく不健康な人が素足でテコボコしたところを歩くと痛いつて言つけれど。……鬼は健康なのかな。

「そら、もうちょっとコチチに来い」

「もつとですか？」

今でもかなり近いんだけど、せらりに鬼の真横まで近づく。腕を伸ばさなくても鬼に触れるほど[の]距離だ。

「じゃあ行くとスルか」

「どこに……」

言つと同時に私を米俵の様に抱き上げ、驚き悲鳴を上げた私を無視して土手をどんどん上つていった。遠ざかる地面と脇をにスーっとお腹のあたりが冷える。

「次は下るゾ」

「ふえ？」

揺れる視界に酔いながら聞き返すが、すでにその頃には浮遊感を覚え、悲鳴を上げる前にドスンとした衝撃が体を突き抜けていた。

「さあ～着いたカナ」

地面に降ろされるが私はその場で屈み込んだ。

だつていきなり担がれたり飛び降りたりするんだもん。ああ、曰  
が回る。

「まだ着いてないみたいダナア。」じこりで待つか

屈み込む私の隣に鬼が腰を掛け、私にも座るよう促した。私は何  
度か深呼吸してから、鬼に促されるままその場に腰を下ろした。

「鈴音、そこじや痛いダろ。俺んとこに座れ

「イヤです」

未だにクラクラする頭を押さえながら即答する。少しだけ鬼が怒  
るんじやないかと横目で盗み見るが、鬼はいさむかムツとしだけ  
で、すぐに遠くをぼんやり見つめ始めた。

鬼が見た先に私も顔を向ける。大きな河が黒い水の流れを速くさ  
せて、水面を蛇のようにうねらせていた。

「あ……白い、月」

川の向こう側に真つ白な月が穏やかに上っていた。こんな不気味  
な世界には不釣り合いな、雪のよつに白い満月がこの河原一帯を照  
らしていた。

月を眺めた後に川を見てみるが、黒い川はそれを映したりはしな  
いでいる。どこまでも河は真つ黒だった。

「騙されるなよ」

白い月を見ていた私に、鬼が低い声をかけてくる。

「何がですか？」

鬼の「ど」かピコッとした口調に私は眉を寄せた。

「あの月は嘘力ナ」

「嘘？」

「そうダ」

あの月は本物じゃないってこと？ でも、それにしたって見事だわ。みればみるほど綺麗な満月。優しい穏やかな光。

「白い月に黒い河力。腹黒いアイツにぴったりな風景ダ。イヤらしいナア～」

嫌味つたらしく言いながら大きくのけぞり、土手に体を預けるとそのまま目を閉じた。

「アイツ？ 誰のことを言っているんだろう。私は首をかしげてしばらくぼんやり河原を眺めていたが、ふとある事を思い出した。

「ねえ鬼さん。腕にあつた灰色のことなんですけど、さつき見たら消えてたんです。どうしてか知つてますか？」

鬼はそのままの姿勢で、目を開けることなく応えた。

「俺の鬼火を移したる？」

私は「へつと頷きながら『はい』と返事して、先を促す。

「それを俺に戻すついでにお前に溜まつた妖力を吸い取ったんだ」

「よつじょく？」

少し鬼は身じろぐと、『氣だるそつ』に説明し始めた。

「この世界は妖の氣配で溢れていてナ。普通の人間がいるとそれに浸食されて一部肌の色が変わる。魂に繋がる瞳に色が全て行き着けば俺たちの仲間入りに一歩近づく力ナ」

「じゃ、私もう少しで妖怪になりかけていたんですか？」

「肩までだからまだ猶予はあつた力ナ。まあだが、ただそれだけじゃないぞ。妖力が馴染み始めるとなにかしらの神通力が身に付くこともある。身に付かない奴もいるガナ」

ということはもしかして。

何度か私の視点とは違う感覚が何度かあつた。それが私が身につけた能力だつたんだ。……あんまり役に立たなかつたけれど。あれ？ でも待てよ。

「鬼さん初めに肌の色が変わるだけって言つていませんでした？  
ここにいるなら特に問題はないつて」

「俺達の仲間になるだけだつ？ 問題ある力？」

「お、大ありじやないですか！ 妖怪になるだなんてダメじやないですか！」

「いや完全に物の怪になるワケじやあナイからな。 問題ないだろ

なんて適当な。鬼の言ひ事はあまり当てにしないほうが多いのかも。

「あとそれと、瞳が紅くなっていたんですけど、それも常闇の妖力というのに、あてられたんですか？」

「それは俺の鬼火が長く憑いていたせいで瞳の色が紅くなったんだ。完全に俺の妖力に呑まれる前に、俺が肌とついてにとつておいた」閉じていた瞼を上げて、おらつとこから見ると口端をつり上げる。

「肌の色が瞳に行き着き、さらに俺の妖力に染まればお前はどんなふうに化けるか興味はあつたんだがナア。いや惜しいことをした」

「そんな勝手な

」

不意に視線を感じ、口を閉じた。上流の川の向こうから誰かがこつちに向かつて歩いてきている。立ち上がりてそちらに注目するが、それでもよく見えなくて目を細める。

闇の中をのろのろと何かを引きずりながら向かつてきている。もしかしてみつちゃんかな？

緊張と不安で落ち着きなくその影を見つめていると、よひやく月の明かりが届く場所に来たところで、その姿が見えてきた。

そしてはつきり誰だと分かつたとき、私の中の恐怖心がまた体を奥底から揺るがした。

「鬼さんっ！」

ほぼ悲鳴と同様の声を張り上げて、すぐそばで田を開じている鬼の腕を揺さぶった。

「鬼がつ、あの般若の鬼がまたっ」

「ん~？」

のんきな返事をしている鬼はちいさと片目をひらすら開けてその影に視線を投げた。

濃い黄色の一本の角が暗闇から現れ、あの時と同じ顔で月明かりに照らされながら、なにかをズルズルと引きずりながら歩いてくる。

何でこんな時に来るのー？

私達からそんなに距離がないといひまでもくると、白い月の明かりに照らされて、よりそのおぞましい姿が浮かび上がった。

私はその光景を見て過去に経験したことがないくらい血の気が引いた。一瞬息をするのも忘れて、目の前の様子に呆然となつた。

真つ白な月明かりの下で、あの時私を襲つた鬼女が、ぐつたりとしたみつちゃんの体を引きずつてそこに立つていたのだった。

## 第十六怪 白蛇の下で

手足がガクガクと震えて声も出ない。胸の前で両手を結び合わせ、肩をすくめて鬼女を凝視する。後ずさる私の背中が、後ろで立ち上がりた鬼にぶつかる。

「……」

鬼女はなにも話さず、上からをじっと見つめている。その片手には微動だにしない制服姿のみつちゃんが。

「み、みつちゃん！　みつちゃん！」

泣き声混じりに私は叫んだ。

どうして、どうしてこんなことに…　もう逃げられるはずだったのに…　せっかく帰れるのにどうして…

「落り着け」

頭に鬼の大きな手が乗せられる。泣き出しそうな私の頭をそのまま撫でつけながら、紅い鬼は鬼女に向き直った。

「わたくし。お前さんがこいつを襲つたんだナ？」

気軽に鬼女へと声をかける。まるで世間話でもしてこるよつ。鬼女は紅い声に対し、すこし聞を空けてからゆっくり俯いた。

「ソレは」と鬼が顎でぐつたりとしてこるみつちゃんを指す。

「お前さんの望んだことなんだナ？」

鬼女は顔をあげ、強く頷いた。

望んだこと？

「どひじり」となの？」

私は一歩踏みだし、震えながら鬼女をみつめた。

「望んだって何が？ みつちゃんを……みつちゃんを、一体どひしたっていつの？」

怖くて震えているのか、それとも別の感情からか。どっちか分からぬいけど、今はそんなことはどうでも良い。

「みつちゃんを返して！ その子に何をしたの！」

鬼女に叫んだ。

すーっと生ぬるい風があたりを撫でつける。

私の髪が、鬼女のぼさぼさの髪が、みつちゃんの汚れた制服のスカートが。それぞれさわさわと揺れる。

お互い見詰め合つてから、おもむろに鬼女が身じろぐと、突然乱暴にみつちゃんを私めがけて投げつけた。

「みつちゃん！」

弧を描きながらみつちゃんが人形のように宙を舞う。

このままじや落ちちゃう！ 受け止める自信はなかつたけれど、とひやに腕をつきだして構えた。

「お前じや無理だ」

言ひが早いか、素早く紅い鬼が前にでると、片手でみつちゃんを宙で受け止めた。そして私の足下にその小さな身体をそっと横たえた。

「みつちゃん！ みつちゃんしつかりして！ ねえ、起きて…」

青白い顔をしている彼女の横顔を何度も叩く。その頬はひんやりと冷たく、肌の弾力もこころなしか張りがない。

私と同じ制服はどこもかしこもボロボロで、ブラウスに皺が出来ていたり、スカートの裾はギザギザに切られていた。

嘘でしょ。嘘でしょ？

そんな、そんな。こんな事つて……。

「みつちゃん返事して……」

両手で彼女のやつれた顔を挟んだ。その顔に私の目から零れた涙が落とされる。それでも彼女の目は閉じたまま。眉もピクリとも動かない。

「いめんね」

私は彼女の首筋に顔を埋める。

もつと早く気づいていれば良かつた。助けてあげたかった。こんな暗くて寂しいところで死なせたくなかつた。

「いめんね……」

もう一度彼女に謝った。

自分の髪が風で舞い上がる。他に音は聞こえない。小さな彼女の身体を抱きしめて、私はすすり泣いた。

「……紗枝ちゃん」

か細い小さな声。はつとし、おそるおそる顔を上げて、みつちゃんの顔を眺める。

「みつちゃん?」

眺めるけれど変わらず目を閉じ続ける小さな顔。頬を撫でてみると、相変わらず温かさは感じられない。でも、今確かに……。

「紗枝ちゃん」

また聞こえた声。でも目の前の小さな口は動かない。ふいに視線を感じて、体を起こし顔を上げる。変わらない青緑の着物。それを覆うようにボサボサではない、きめ細い綺麗な長い髪が風になびいている。

私は鬼女の顔を眺めた。

「……誰?」

さつきまでいたあの般若顔はなくなり、代わりに白魚のような肌と艶やかな桜色の唇、そして大きくぱっちりとした目をもつた、美しい鬼がそこに佇んでいた。

鬼女は訝しげな顔をしている私に柔らかく微笑んだ。

「紗枝ちゃん。私、光子だよ」

「え……？」

透き通るような、大人の女性の声。みつちゃんのような可憐らしい声じゃない。

「みつちゃん、なの？ 本当に？」

綺麗な鬼は嬉しそうに頷いた。

「な、何を言つていいの？ 嘘をつかないでよ！ みつちゃんをこんなにして、なに訳の分からぬこと言つていいの？ ふざけないで！」

「紗枝ちゃん……本当に私なの」

意味が分からないと何度も頭をふる。みつちゃんだと言つ鬼は困つたように小首を傾げて、悲しげに微笑んだ。

「私ね、あの時紗枝ちゃんがその紅い鬼に連れ去られた時、閉まりかけた扉をすり抜けで、またここに戻ったの」

いきなり鬼女は話しだした。あの時、みんなで扉をぐぐり抜けた大きな扉。なぜこの鬼が知つていいの？

不信感いっぱいの私に、構わず彼女は言葉を続けた。

「でも暗闇ばかりで、何も見えなくて途方に暮れていたの。だけど

」

一度俯き、恍惚したように静かに目を閉じると、空を仰いだ。

「そこにあの愚痴の鬼様がいらっしゃったの」

愚痴の鬼。あの夜叉みたいな白髪の鬼。

あの時みつちゃんを連れて行つた、恐ろしい白い鬼が頭を過ぎる。

「鬼様は紗枝ちゃんを連れ戻してくれるのを、手伝ってくれるつて言つたわ。それだけじゃなく、私の持つている力で紗枝ちゃんを守つたり、助けたりできる術も教えてくれると言つてくれたの」

「持つている力？」

「小学校のとき、そんなに紗枝ちゃんとお話できなかつたから知らないかも知れないけれど。私、靈感が強くて。……お母さんは氣味悪がついていたから、そんなに人に話したり出来なかつたけどね」

みつちゃんの靈感の強さは小学校の時に流行つた怪談話で一時期有名だつた。信じる人、信じない人それぞれいたけれど、隣のクラスにまで話題になつたほどだつた。

「私、紗枝ちゃんになんとか助けたくて、灯火を送つたり、他の呪いを遠ざけるおまじないをしたり、色々教わつては実践していたの」

あの黄色い人魂のことを言つてゐるの？ それに紅い鬼に呪いをかけられた時に、何度も得体の知れない何かに助けられていた。

本当にこの鬼女は……。ううん、信じちゃダメだ！」

「ねえ待つて。もし、あなたがみつちゃんだとしたら、どうして私

を襲つたの？ みつちゃんはそんな乱暴な子じやない！

私は許しかけた氣をもつ一度張り直し、きつい視線で鬼女に睨み返した。

「『めんね紗枝ちゃん。私はそんなにいい子じやないよ』

寂しげに、鬼女は微笑んだ。

「え？」

「私、この世界にきて氣づいたの。紗枝ちゃんが妬ましいって」

「妬……ましい？」

私の言葉に、彼女は小さく頷いた。

「この世界にいるとす『』怖いし、嫌な思念みたいなものがうつよつよしているの。でもその氣持ち私分かる……」

一度俯き、押し殺すような声で呟いた。

「私、紗枝ちゃんが羨ましかつた。優しくて可愛くて明るくて……家族も仲が良くて、友達もたくさんいて……」

口に含んだようにボソボソと話す。

深く俯いているせいか、長い髪で表情が隠れて、艶やかな口元しか見えない。

「一緒にいて楽しかつた。だけれど、否定してたけれど、ここに来

てからハッキリと気づいたの。私、私、紗枝ちゃんが嫉ましくて、妬ましくて、仕方ないの！ あんなに……あんなに助けてくれたのに

ぎゅっと感情を抑えるように、綺麗な口が一度強く結ばれる。そして意を決したように、再度口を開いた。

「私、たくさん気がついたの。お母さんも学校の男の子達も、みんな憎いって自分が思ってる事…」

「みつちゃん……」

「でもそんな恐ろしい考えは、だめだつて何度も何度も否定した。私を育ててくれるお母さんに、そんな事を思うなんていけない。男子だつて私が鈍いから、イライラしちゃつてるんだつて。それに紗枝ちゃんはいつも私のこと守つてくれてるのに、妬ましいだなんて」

最低だよね。と彼女が呟く。

「でも愚痴の鬼様は、そんな私を悪くないよつて言つてくれたの。ありのままで良いつて。怨んで良いつて。妬ましく思つて良いつて」

救われたと、嬉しげな彼女の表情が言つている。

でもまた、強い口調に変わり、興奮気味に吐き捨てた。

「だけど、私はあの人達みたいに……人の皮をかぶった鬼になんかなりたくない！ だから黒鬼様にお願いしたの」

「やめて……みつちゃん」

「私を本物の鬼にしてくださいって」

顔をあげた彼女の顔はあの般若の顔だった。悲しい、寂しい顔をした、鬼の顔だった。

私は悲しくて仕方がなくて、自分で中で音も無く何かが崩れいくのが分かった。

「みつちゃん……」

私は目を閉じた。彼女をみていると痛い。つらい。ひどく胸が痛い。

「でもごめんね紗枝ちゃん。私鬼になるつて決めた時、ある魚の人には紗枝ちゃんに会わせて欲しいってお願いしたの」

魚さんのことと言つてるの？両手で顔を覆いつつも、彼女の言葉に声にしないで聞き返す。

「最初は紗枝ちゃんに逃げて欲しくて、助けに行つたつもりだったんだけれど、その魚の人と話してくるうちに、どんどん、どんどん嫉妬の感情が溢れだしてしまって。気づいたら」

「そんなこと、もういいよー。」

私は顔を上げ、彼女の口を遮つて叫んだ。

もうそれ以上言つて欲しくない。もう聞きたくない。それ以上悲しい顔をしないで……。

「ありがとう。紗枝ちゃんはやっぱり優しいね。でもごめんね。その優しさすら、妬ましいの」

「そんなの……」

私は全然気にしないのに。  
どうしてそんなに自分を責めたりするの？ どうして謝るの？

「ねえ見て紗枝ちゃん」

両手を広げる。青緑の爽やかな清々しいほどの風の色が月明かりに照らされる。伸ばした腕に垂れるのは長い綺麗な髪。

「髪も、顔も、声も。とても綺麗でしょう？」

綺麗な口元が、透明な声を奏でている。  
あの般若顔はすでにはない。

「みつちやん……」

「これが新しい私なんだよ」

彼女の声はどこまでも嬉しかつて、顔はどこまでも幸かやつだつた。

たぶんそれと同じくらい、私は悲しかつた。  
もう取り返しが付かないんだと。もつ、どうにもならないんだと。  
彼女は決めてしまつたんだ。  
人間をやめることを。  
鬼になることを。

その場で泣き崩れる。

私の友達は元の世界に帰ることなく、鬼になつてしまつたんだ。

開放された、自分の意思で。

## 第十七怪 黒河に沈む

「時雨

いつの間にか、川岸にゅつたりと見おぼえのある屋形船が横付けされていて、そこから優しげな声が聞こえる。

「愚痴の鬼様」

綺麗な顔が破顔する。

着物の裾が優雅に舞いつとあたりの空気も舞い上がる。

「そろそろ行こうか？」

「はい」

彼女の綺麗な声を合図に、屋形船から小さな影がいくつも這い出てきた。船から降りてきたのは黄色い子鬼たち。緑の子鬼よりもふくふくとして、赤ん坊のようにも見える。

彼らは私の足下で横たわっているみつちゃんの体を見つめると、足早にぞろぞろと列をなして近寄ってきた。

「なにするの？ みつちゃんに触らないで！」

反射的に彼女の体に覆い被さり、子鬼たちから遠ざけようとした。これ以上なにかさせるものですか！ キツと睨みつけて子鬼達を威嚇する。

「よせ」

首根つこを紅い鬼に掘まれると、大蛇のよつに身体を腕で拘束され、体が強制的にみつちゃんから離される。

「離してよー みつちゃんが！」

「無駄だ」

鳶色の腕を剥がそうとするが、自分の胸から離れることはない。無理矢理身体を捻つて向きを変えると鬼に怒鳴つた。

「約束はどうなったの？ 帰してくれるんじゃなかつたの？ ねえ！ 答えてよつ」

鬼の着物の裾をつかんで、何度も激しく揺さぶつた。

「別にあの娘を帰すとは言つていない力ナ」

肩をすくめて、涼しげに紅い鬼は言つた。

私はこの時ほど鬼が憎たらしいと思ったことはなかつた。こんな状況でなお、笑みを絶やさない紅い鬼。

なんでよ。納得できないよ！ そう思つて何度も鬼の胸を叩く。叩いて叩いて泣きわめいても、鬼は表情を変えない。憎たらしい、残酷な紅い鬼。

「こ」の醜い身体も、名前も用済み

はつとして声が聞こえた方へと顔を向ける。しゃがんだ美しい鬼がみつちゃんの身体をなでる。残酷に見下す

冷たい視線。優しさも温かさもない微笑み。

「運んでちょうだい」

立ち上がりながら言い放つ。

子鬼たちがみつちゃんを囲んで一斉に持ち上げ、そしてそのまま船へ運ぶ。

「やめてよー 何するのー？」

子鬼の後を、青緑の背中が追つていいく。

凛とした後ろ姿は豪華で誇らしげ。なんの迷いも不安もない。でも私はどうしても納得できなかつた。だつてこれは本当の姿じゃないんだもの。みつちゃんはもつと自信を持つて良いのに、鬼になんかにそそのかされて、今自分を捨てようとしているんだもの！

「ねえ、みつちゃん！ だまされちゃダメだよー。こんな世界に残つちゃダメだよ！ 私だつて、私だつて、みつちゃんが思つているほど良い人間なんかじゃないよー！」

声を張り上げて、彼女に叫んだ。構わず腕の力を緩めない紅い鬼の体を押し退けながら青緑の後ろ姿に訴える。

「約束破つてここから逃げたいつて思つたことあつたよー。自分に嘘ついて、汚いことも考えたことあつたよー」

彼女は振り返らない。立ち止まらない。まるで私の声が聞こえないかのように歩みを止めない。

「鬼にだまされちゃダメだよー。みつちゃんは鬼になんかならなく

ても、十分

「紗枝ちゃん」

私の声にかぶせるように、私の名前を呼ぶ。私が息を呑んでいると、弱い風が一人の間をゆるやかに通り過ぎた。立ち止まつた美しい鬼。気持ち少し振り返つて咳く。

「じめんね…… ありがとう」

わざかに見えた頬になにかが光つたが、それもすぐに見えなくなる。

また歩きだした背中に、私はもう弱々しい声しか出なかつた。

「お願い行かないで…… もどつて……」

みつちやん。

彼女の名前を呼ぶも、かすれて咳くほどの声も出なかつた。私の声はもう彼女に届かない。どんなに叫んだつて無駄なんだ。

鬼に抱えられたまま、私は今度こそ完全に絶望した。うめき声を上げながら泣きじやくり、小さな子供みたいに体を丸めた。

「おい。紅いの」

「あ?」

船から聞こえた声に、鬼が間の抜けた声を出した。

「ずいぶんと、良い声で鳴くのを飼つていてるね

「お前のせいで可愛がる時間がなかつたぞ。まつたく名の通り腹黒い奴め」

「讃め言葉として受け取つておくれよ」

岸に紅い鬼と私しかいなくなつた頃、鬼たちとみつちゃんを乗せた船がゆつくりと滑り出す。白い月の下で照らされながら、どこまでも真つ黒な河を進んでいく。

船からは私の気持ちとは真逆の軽快な音楽と笑い声が響く。和楽器が奏でられ、それにあわせて手を叩く音が響き、げらげらと下品な笑い声が船から漏れる。

音がぼやけてしか聞こえなくなり、船の影が小さくなりかけた頃、そこから小さな人影が投げ出される。ぼんと水が跳ねる音。さらには大きくなる笑い声。

なんで笑うの？ どうしてそんなに楽しげなの？  
今投げ込まれた人影は、なに？

放心状態でそれをただぼんやりと見ていた。自分の中身が空っぽになつた様だつた。何も感じないし何も思わない。何も無い。

「ほんなの間違つてる……」

鬼が私を離した後も、そのまま地面につりまつて、泣くこともせずに呆然と自分の影を見つめていた。

もうすべて終わつてしまつたのだ。

完全に。すべて。

終わつてしまつたのだ。

…………

「はあー。行つちまつたナア」

つづくまる私の横で、鬼が腰掛ける音が聞こえてくる。私はなにも言わなかつた。もつなんの言葉も出てこなかつた。頭も心も空っぽになつていた。

「憂いでいるのかナ?」

紅い声が聞こえるも、私は応えなかつた。正しくは応えられなかつたのだが。もう涙も出でこない。

「良かつたじやないカ」

場違いな鬼の明るい声。嫌なほざほざつきり私の耳に入つてくれる。

「あの娘の望みが叶つたんだろう? めでたしめでたし」

なに言つてるの? めでたし?

唇と手がわなわな震える。どちらもせりあつとせせり、赤い鬼に視線を向けた。鬼は横目で私を見つめ返すと、見下したよつた眼差しに紅を変えて細めた。

「お前には理解できないみたいだがナアー」

「……あれのどいが良いの?」

自分の喉から低い声がでる。今自分はどんな顔をしているんだろ

う。喉元がずしづと重く、熱い。手足が鉛のように重く感じた。「こんなの……幸せなんかじゃない。絶対にちがう。

「鬼さん。私のさこいひ、今持っていますか?」

鬼は腕組みをして眉を寄せた。

「持つていろが……どうするんだ?」

「勝負しましょ!」

私は鬼を睨みつけて、唸るよひに言つた。鬼は無表情でこちらを伺つように見つめてくる。

「私が勝つたらみつちゃんを人間に戻して、元の世界に返してください」

「……よした方が、俺は良いと思つが」

「私が負けたら鬼さんの好きにして良いです」

「鈴音え」

鬼が呆れたよひに大きく息を吐きながら首を左右に振る。

「お前さん今なにも見えてないだろ」

「するんですか? しないんですか?」

私はすこじんだ。鬼は無表情のままじばらくなにも言わずにひかり

を見ていたが、また呆れたよつたため息を吐くと、懐からさうりを取り出した。

「文句いふなよ」

私は黙つてやうこりを鬼から受け取ると、辺りを見回す。そして近くにあつた小さくが平らな岩を見つけると、わざとそこに近寄つた。

鬼が私のあとに続いて両の向うに立つのを確認し、やうこりを両手に閉じて振る。念じて出る口を決める。出すのは一のゾロ田、丁だ。

卑怯だと、普段の私ならそう思つたかもしれない。でも今はそんなことはどうでもいいのだ。

「お前はまだいかける?」

「丁です」

「なら俺は半ダナ」

何度も振るさうこり。両手の中で小さく踊る。

これで良いはずがない。あんな寂しい結末は嫌だ。もう一度明るい陽の下に戻つてほしい。

そんな思いを込めて両手を開いた。

落ちるさうこり。岩の上に転がりくるくる回る。黒と紅の瞳がそれを追いかける。

さいこうが次第に勢いを弱めて、やがて止まる。

出た田は三と一。半。

「嘘……」

息が詰まる。体中が強ばつた。

田を見開いて、息をするのも忘れる。

「お前は本当に分かつていいナア」

なんで？

どうして？

「妖が欲しいものを、そつそつ手放すワケないだろ？」

魚さんは出る田が自在に操れると言つていた。でも、今の鬼の言葉に、信じたくないけれどある考へがよぎる。

本当は『自分が念じた物とは逆のものが田のサイロロだったのではないだろうか、と。

魚さんは私を帰したくないと言つていた。だから帰る時にだけ使えと言つていたんじや。そうすれば、それを望んだ私は帰れないのだから。

……鬼はそれを知つていたといつの？

「鈴音」

呆然とする私に上から声が掛けられる。すると突然、胸ぐらを掴まれた。

ぐ、苦しい！

「愚問だが、お前さんの望みは本当にあの娘にとつて幸せなものか

？」

「なに、を

「まあ～つたぐ。愚かダナア。子鬼なみの愚かさカナ。まさに驕りの極み」

鬼はそのまま私を片手で軽々と掴んだまま川岸に歩いていく。紅い鬼の手を剥がそうともがくが、やはりびくともしない。

「今のお前を飼つても面白くなれうだ。離を飼つのもすぐ飽きやうだしナ」

苦しさにあえぐ私を無視してどんどん歩むが、河の手前にまで来ると、やうに私を鼻先にまで掲げる。

「猶予をやれ。帰るつこでにあの娘の結末をみてくればイイ」

ぐつと顔を近づけると、妖しい紅が視界に広がる。霞む田の向こうには妖しい紅。恐ろしこほど妖しい紅の瞳。ニヤリとそれが笑むと

「それでは」<sup>コ</sup>キゲン<sup>コ</sup>カ

紅い手が、花びらのように開く。ゆっくり、ゆっくり。  
それが完全に開いたところで私が黒い水に呑まれていく。  
瞳には鬼の紅、次に空の黒、最後に川の闇。手足をばたつかせて  
顔をだすと、鬼が腕組みしながらこちらを眺めている。

「忘れるなよ鈴音。お前は一時的に帰してやるだけカナ」

鬼の紅の瞳が、刃物のような鋭い三田円になる。

「決して俺を忘れるなよ。決して、ナ」

黒い闇に包まれるも、妖しい対の紅だけは残っていた。河の水面からは想像も付かない激流にもまれ、手足がバラバラにされる錯覚を起こす。

グルリグルリと回る視界。身体が四方に引っ張られる。もがこうとするが身体に水が絡まり上手く動かせない。苦しい。口から鼻から水が入る。

耳は水がうねる音しか聞こえない。上へ下へ体が回り、視界も回る。ゴボゴボと自分の口から気泡が出ると、ゴシンと背中に何かが激しくぶつかつた。

鈍い痛みに顔をゆがませ、私は気を失つた。

## 第十八怪 向日葵

意識が浮上したのを感じる。

貧血のように頭がくらぐらして、頭の奥がすーっとする。うつすら目を開くと、映つたのは薄緑のカーテンに白い無機質な天井。そして消毒液の独特な匂い。私はそれらを少しの間、呆然としながらただ感じるに任せていた。

「……はい。308号室です」

カーテンの向こう側から女性の声が聞こえる。細く開けていた目を全開にして頭を上げようとした。

「痛つ」

上げようとした頭に激痛が走る。息を吐いてまた枕に頭を埋めると、カーテンがさつと開き、白い服を着た女性が入ってきた。その人の動きが早く感じて私は一瞬頭が混乱する。脳が外界の動きについていけないみたいだ。

「谷樺さん、気がつきましたか？」

「は、い？」

「I.IJがどこか分かりますか？」

「いえ……」

「ここは病院です。こまご両親来てますから」

完全に面食らってしまった。

全然、この状況が理解できない。

安心させようと/orしてか、看護師と思われる先程の女の人は優しく微笑むと、無駄のない動きでカーテンの向いの側へと消えていった。病院？ なんで病院にいるの？

何気なく頭に手をやると、布の感触。そこをなぞってみて、ようやく自分の頭が包帯で巻かれているのに気が付く。

「紗枝つー。」

泣き出しそうな声にほつと/or。カーテンが素早く動くと、そこにはやつれた懐かしい顔。

「お母さん……」

「もへ、ここの子はー、心配したんだからー」

苦しそうに強く抱きしめられる。

お母さん少し痩せた？ 自分に抱きつくる母に、自分もいまだにぎこちない動きをする腕で抱きしめた。

母の背中越しに、覗き込む姿。それは田頭を熱くしたお父さんの姿だった。私と田が合つと少し照れくさそうに鼻をすすり、何も言わずにただ優しく笑つた。

「心配かけて、ごめんなさい」

自然と謝罪の言葉が出てきた。こんなにやつれた両親を私は初めて

て見る。いつも口うるさいけど眠る「お母さん」。あんまり喋ったりしないけれど、頼りになるお父さん。一人とも心配してくれたんだ。私はそこでやっと元の世界に帰ってきたんだと実感した。もう戻つてくることが無いと思っていた世界に、戻つてこれたんだ。

母は私から離れると、涙ぐむ私の髪をゆっくり優しく撫でた。

「本当によかつた。ずっと田を覚まさないから」

「どうこう」と、私、どうしたの?」

なにもかも分からないことだらけ。

鬼に河に落とされて、溺れそうになつて。それからは、なんにも覚えていない。気が付いたら病院だった。

「覚えて、ないの?」

「うん」

お母さんの探るような目に、不安げに頷く。

まさか鬼に連れて行かれて今まで妖怪の世界にいました、なんて言えるはずもなく。そんなこと話したら間違いなく精神科に連行されそうな気がしたのだ。

お母さんは頭の中で少し整理をつけているみたいで、少し思案した後、話し始めた。

「紗枝たち五人がずっと学校に帰つてこないから、先生とお母さん達で最初探したのよ。それでも見つからないから警察に電話して、ずっと探していたの。そしたら山のほうで集中豪雨が発生したなんというから、もしかしてそっちに行つたんじゃないかと思って。消防の人たちにも協力して探しに行つたのよ」

えっと……。

なんだかすゞいことになつてゐる。

警察に消防？ 思わず顔が引きつてしまつ。

「そしたら最初、女の子と男の子一人が土砂で潰されたお社で見つかってね。もう泥まみれで凄かつたんだから！ それでもまだ紗枝と光子ちゃんが見つからなつて、それから一週間近く探し続けて。もう捜索も打ち切りになりそうになつた時、近くの小川で、紗枝を消防の人が見つけてくれたのよ！」

興奮のせいで母の目が熱を出した時みたいに、爛々と輝いている。早口に話している間も、両手の拳をぶんぶんとさせていた。

「それで、私病院で寝ていたの？」

「三日もよー！」

信じられないと言わんばかりに、首を振る母。

ああいつものお母さんだ。

私はのんきにそんなことを思つたが、次の瞬間はつとめて口を開いた。

「ねえ、お母さん。みつちゃんはビビったの？見つかったの？」

母の顔が凍りつく。うつむいて何も言わない。

そつか……。

私はそんな反応を見ても、別に驚いたりしなかつた。見つかっていないんだ。当然だよね。だってみつちゃんは、あつちに、鬼のところに残つたんだから。

今までお母さんの後ろで黙っていたお父さんが咳払いをする。気まずそうに、田を泳がせながら私に言った。

「見つかったよ

「え……？」

見つかった？

みつちゃんが？ 見つかって？

目を見開いて父の顔を凝視する。信じられない。だつてみつちゃんは……。そこまで思つて、私は青ざめた。あの時、河に落とされた人影。もしかして……。

私の視線から逃げるように、お父さんは俯くとため息混じりに声を出した。

「見つかったんだ。見つかったんだけど……」

みつちゃんの……彼女の遺体は無残な姿で発見された。

流れが緩やかになつた山の中にある川に、泥まみれで浮かんでいて、見つけた警察の人も目を背けるくらい酷い状態で死んでいたらしい。

葬儀は家族だけで細々と行なわれたそうだ。

母が私にもお別れを、とみつちゃんのお母さんにお願いしたそつだが断られたという。葬儀が終わつた後、みつちゃんのお母さんと弟さんは、まるで逃げるように、数日後引っ越したそうだ。その理

由は後になつても分からなかつた。

学校は、私達の行方不明騒動で持ちきりになつた。

一緒に連れ去られたはずの同級生達は、鬼については一切話さず、クラスメイト達が聞いても覚えていないと話している。

しかし皆なぜか英雄扱いを受けて、戸惑いつつもまんざらでもないみたいで、得意げに助けられた時のこと話をしていた。

やがて時間の経過と共にその話題を出す人もいなくなり、ついには亡くなつたみつちゃんの事を話す人は誰も居なくなつた。数カ月後には、まるでそんなことなど無かつたかのように、みんな日常生活に戻つていつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

春、先輩達の卒業式。

暖かい日差しに、優しい春風が花びらを運ぶ。

「紗枝え！ 早く早く！」

「今行く！」

友達の声に靴紐を結びなおすと、彼女達の元へ駆け寄つていく。校門には花束を持った先輩達。

「私絶対に第一ボタン貰う！ 紗枝も早く好きな先輩から貰わない

とー。」

駆け出す友達の背中を見送つて私は苦笑いした。別に特別好きな先輩はいないんだけどな。

後輩達に囲まれる先輩達。みんな笑つたり、照れてたり、嬉泣きしている人も居た。そのなかで見覚えのある先輩をみつける。

夕暮れの、薄暗いコンビニの光景。笑う声。

みつちゃんが鬼の世界に行くきっかけとなつた先輩。

先輩は他のクラスメイトとじやれ合つて、笑つていた。友達に、もみくしゃにされている制服の第一ボタンはすでに無い。もう誰かにあげたのかな。

私は漠然としながら、皮肉に映る、その微笑ましい光景を見つめた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

学校の帰り道。あの神社へと続いていた山道に寄る。

山道は土砂でさえぎられた所までなら、今も上ることができた。フェンスより向こうは土砂で区切られていて、これ以上崩れないようブルーシートで覆われている。

フェンスの手前には新しく建てられた小さな社。そこには枯れた花。私は手に持つていた花をそつと、その花と取り替える。両手を合わせる気にもなれず、呆然とその社を眺めた。

さわさわと花をつけた木々が揺れる。静かな悲しい場に木漏れ日が踊る。何をするわけでもなく、私はそのまま突つ立てていた。

するとそこへ、誰かが山道を上つてくる音が聞こえてきた。

え、どうしようつー

なぜか反射的に私は社の裏へと身体を隠した。どうしてそんなことをしたのか、私も分からなかつたんだけど。なんとなくここに居るところを、誰かに知られたくないなかつたのだ。

それにしても誰だらう？ あんなことがあつてから、ただでさえ誰もこないこの場所は、さらに入人が訪れるることは無くなつたのだ。こつそりお社の後ろから覗いてみる。

え！？ つと、思わず声が漏れそうになり、慌てて口を閉じた。 よれよれになつた制服姿。あれはみつちゃんと仲のよかつた先輩。 なんでこんなところに来たんだらう。 気づかれないよつに身体を小さくさせて黙つていた。

何かを置いたような音と、乾いた音が聞こえる。それから少しの間、なんの音も聞こえなかつたが、先輩の足音が聞こえ次第に遠ざかつていつた。

ゆつくり様子を窺いながら社の裏から出てみる。先輩の姿はもう無い。

先輩、何しに来たんだらう。

社のほうへ視線を向けると、私が来たときには無かつた小箱と花束が置かれていた。

先輩が置いて行つてくれたのかな。

社に近づいて屈む。私が置いたピンク色の花束と、先輩が置いたと思われるオレンジ色の花束。そして四角い箱。 これつてなんだらう。それを拾い、よくよく見てみる。

「あ、手作りのオルゴール」

粗い作りのオルゴール。おそらく学校の課題で作ったオルゴールだろう。蓋には太陽のような向日葵が彫られている。でも、先輩は失くしたって言つていたのに。

蓋を開け中をのぞくと制服のボタンが入っていた。  
これは……第一ボタン……？

そして蓋の裏を見て息を呑んだ。

『光子へ お誕生日おめでとう』

不器用に彫られた文字。

その途端、弾けた様に先輩が言つていた言葉が蘇る。

『文化祭に出演するなんて聞いてなくて  
『自分流にアレンジしたくて』

先輩、あれはこういう意味だつたんだ。

先生への提出が終わつてすぐに持つて帰つたのも、失くしたと  
つて文化祭に出演しなかつたのも。

制服のボタンの下には、二つに折りたたまれたバーステーカード。  
カードの間に挿んであつた向日葵の髪留め。  
向日葵はみつちゃんの大好きな花。

そして文化祭の二日後は  
彼女の誕生日……

先輩……本当は……

私は溢れる涙をぬぐいながらオルゴールのねじを回した。  
優しく流れるメロディー。頬を撫でる暖かい風。  
木漏れ日が彼女の大好きな向日葵に降り注ぐ。

「みつちゃん……」

私は一言彼女の名前を呼んだ。

## 終ノ怪 妖しい紅

晴れた青空を部屋の窓から眺める。  
どこまでも青い空。白い柔らかそうな雲がぽつかりと浮かんでい  
る。

「紗枝一。準備できたあ？」

「はあー」

下の階からお母さんの声。窓を閉めて部屋を出る。  
リビングにはいつもよつと氣合の入ったお母さんが、一生懸命化粧  
ポーチをあさって文句を言つてゐる。

「わへ、口紅がけにいったのかしらー。ほよほよと、お父さんー。力  
メラ持つたの？」

椅子に腰掛けて新聞を広げるお父さん。お母さんの声で『ん~』  
と、聞いているのか聞いていないのか、じぼけた返事をしてゐる。  
その光景がおかしくて、思わず口に唾液で笑つてしまつ。

「あ、紗枝」

聞こえた声に振り返ると、キッチンからビングにお姉ちゃんが  
入つてくる。ほほパニッシュになつつあるお母さんを尻目に、口  
そり私に耳打ちしてくれる。

「帰つたら私達からプレゼントがあるから、楽しみにしてて

「本当に？ なになに？」「

「帰ってきてからのお楽しみー。」

お姉ちゃんは悪戯っぽくウインクすると、まだおろおろしているお母さんに近寄って、「まだ化粧台におまつせんなんじゃない？」とアドバイスした。

お姉ちゃんとお兄ちゃん達から、プレゼントなんて。何がもうあるのかな。

なんだか今からドキドキしちゃう。

「ま、準備できたり、早く出なさい。」

やつと口紅は見つかって。

口紅の先を出しながらお母さんが私に言った。

「はーい。じゃ、行つて来るね」

家族に手を振つて、笑いかける。

年季の入つた鞄を手にとつて玄関のドアを開けた。

あれから月日は流れ、私は今日、中学校を卒業する。いまだに紅い鬼は私の前に現れていない。

あの出来事が何の変哲も無い日常に侵食されて、今はもう現実味

も無い。

常闇にいた証拠も、妖怪と会つた証拠も私には無い。

不確かな私の記憶だけが紅い鬼と私を繋ぎとめている。

いつか私は紅い鬼を、常闇を忘れる日がくるのだろうか。もしさんな日がきたとしても、私は決してあの瞳の色だけは忘れないだろう。

あの、妖しい紅だけは。

## 終ノ怪 妖しい紅（後書き）

これにて、妖しい紅は閉幕とさせせて頂きます。  
ここまで読んでくださって、ありがとうございました。  
そして、長くのお付き合いお疲れ様でした。

初挑戦で、楽しいこと大変だったこと、挫けそうになつたこと、  
色々ありました。

しかしここまでこれたのも、皆様のおかげであります。

また、もし宜しければ「面白かった」「つまらなかつた」などの  
一言や、「は良かつた」「が良くなかつた」などの指摘  
頂ければ幸いです。

いつか指摘して良かつた、と思われるような物の書き方に昇華で  
きればと思います。

最後に生意氣を言つて申し訳ございませんでした。  
そして本当に、本当にありがとうございました。  
お疲れ様でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1689o/>

---

妖しい紅

2011年11月15日02時37分発行